

博士論文

題目 「幕末明治期刊行草双紙の語彙・表記」

学籍番号 1041001 人文学専攻 多賀系 絵美

【目次】

はじめに 1

第一章 資料としての草双紙 3

第一節 草双紙とは 3

第二節 草双紙を扱った先行研究 9

第二章 仮名主体で書かれた草双紙 12

第一節 江戸式草双紙の体裁 12

『御産池龍女利益』―江戸期の草双紙―

第二節 江戸式草双紙の本文 19

『金華七変化』万延元年～明治三年

第三節 江戸式草双紙の漢語 26

『西南雲晴朝東風』―明治期の草双紙―

第三章 漢字仮名まじり文で書かれた草双紙 40

第一節 明治式草双紙の体裁・本文 40

『高橋阿傳夜叉譚』明治十二年

『嶋田一郎梅雨日記』明治十二年

第二節 明治式草双紙の漢語 46

第三節 漢字列と振仮名 56

第四章 草双紙の漢語の層 63

第一節 漢語の層別化 69

第二節 辞書体資料との対照 72

国語辞書・節用集・漢語辞書

第三節 草双紙の漢語漢字列の層 87

第五章 結論 92

おわりに 96

参考文献

註

はじめに

本稿では、幕末明治期に刊行された草双紙を中心資料として、草双紙を、幕末明治期の日本語を観察するための資料として活用するという観点から検証していく。

草双紙は江戸初期から簡単な説明入り絵本として出版されはじめ、やがて絵入り短編小説の一式として発展し、赤本、黒本、青本、黄表紙、合巻と、その内容・体裁を少しずつ変えながら明治二十年代頃まで通俗的読み物として人々に親しまれてきた。内容は、他の文学ジャンルや演劇などの影響を受けながら次第に複雑なものとなっていくことが文学研究などで指摘されている。とくに江戸末期から明治初期にかけて刊行された草双紙においては、一冊あたりの文字量も増え、文学研究の資料として、また日本語研究の資料として十分な語量を備えているといえる。

本稿ではおもに草双紙の語彙・表記についてとりあげ、日本語研究の資料としての草双紙の分類と整理、草双紙の翻字・データ化をし、今まであまり積極的におこなわれてこなかった草双紙の日本語学的研究の方法を提示することを目的とする。とくに草双紙の本文から漢語語彙をとりあげ、江戸期に主に刊行された仮名主体で書かれた草双紙と、明治期に主に刊行された漢字仮名まじり文で書かれた草双紙、双方の特徴を考慮しながら考察をすすめるとともに、日本語の語彙研究における研究観点や方法の見直しをすることも必要であると考え。とくに幕末から明治初期にかけての漢語使用の様相は、日本語の語彙の過渡的な時期と思われ、これまでもさまざまな資料に基づく研究がなされているが、この分野は今後さらに精密な研究を進めていくことが求められることと思われる。

第一章では、草双紙の文学的な先行研究をはじめ、これまでに指摘されてきている草双紙についての認識を検めるとともに、資料として未整理な部分について指摘する。これまでの日本語学の先行研究は、草双紙の文字・表記・仮名遣いの分析に集中している。しかしそれらは同じ作品、同じ作者ごとにみられる特徴をとりあげているものが多く、それぞれの作者、作品によって特定の面が色濃く反映されたり、事象が制限されたりする面があるのではないかと思われる。草双紙の語彙・文法などを含めた広範囲の研究はまだ緒にないばかりであり、詳細な検証が求められる分野である。

第二章では、「江戸式」とよばれることのある、仮名主体で書かれた草双紙をとりあげる。

具体的には、江戸末期に刊行された草双紙『御産池龍女利益』みぞろがいはけりゆうじよのりやく『金華七変化』きんかしちへんげ、明治期に入

つてから刊行された草双紙『西南雲晴朝東風』を資料としてとりあげ、仮名主体で書かれた草双紙の体裁、本文、先行研究で指摘されてきていることなどに言及しながら、さらに検証したことがらについて述べていく。草双紙語彙研究の新たな方法の提示として、仮名主体の草双紙から漢語語彙をとりあげ、表記体との関係を視野にいれながら論じていく。本文のほとんどを仮名で書くという書き方がされている草双紙には、本来漢字で書かれることが多い漢語や字音語も、その本文の中で一様に仮名書きされることになり、これは日本語の文献としては、やや特殊な形態であるといえ、その点に注目することによって「漢語の漢字離れ」（山田俊雄『日本語と辞書』一九七八年）を検証できるものと考ええる。

第三章では、「明治式」とよばれることのある、漢字仮名まじり文で書かれた草双紙をとりあげる。資料には明治期に刊行された『高橋阿傳夜叉譚』たかはしおでんやまのがたり『嶋田一郎梅雨日記』しまだいちろうさみだれにつきをとりあげ、仮名主体の草双紙との比較をしながら、その体裁、本文、漢語語彙について述べていく。また、仮名主体で書かれた草双紙の漢語語彙と対照し、漢字仮名交じり文で書かれた草双紙の漢語がどのような漢語であるのかということについて分析を試みる。漢字仮名まじり文で書かれた草双紙は、漢字で書かれているほとんどの語に振仮名が振られており、その点が仮名主体の草双紙の書かれ方と大きく異なるので、草双紙の表記体について考えるにあたり重要な位置をしめると考える。また、そのように書かれた漢字列と振仮名の関係についても検証する。漢字列を媒介として結びついていると思われる漢語と和語の関係が、明治期にはどのような結びつきであったのかということについて、語彙的事象の側面から検証する。

第四章では、草双紙の漢語語彙の層別化を試みる。語彙として漢語をとらえたときには、漢語語彙の内部には層があるという考え方がとられることがある。そのような先行研究をもとに、草双紙の漢語語彙をとらえる場合、どのように層別化できるのかということについて方法をもって論じる。仮名主体の草双紙の漢語語彙と、漢字仮名まじり文で書かれた草双紙の漢語語彙を、双方の表記体の違いに考慮しながらまず整理をする。そのうえで、明治期に刊行された主な国語辞書と、漢語を見出し項目とする明治期の漢語辞書、また、江戸期に刊行された早引き節用集を用いて漢語の層という考え方について考察するとともに、これらの比較を通して漢語の層をとらえ、草双紙の漢語語彙を日本語の語彙体系内に位置付けることを目的とする。

第五章においては、草双紙の語彙、表記についての総合的なまとめと、それぞれの章における結論をもって終章とする。今回得られた知見をもとに、草双紙を資料とした日本語

研究の可能性をもって今後の語彙研究について展望する。

第一章 資料としての草双紙

第一節 草双紙とは

まずは草双紙と呼ばれるものがどのようなものを指しているのかということについて概観を述べておく。

『日本国語大辞典』第二版（二〇〇〇年 小学館）の「くさぞうし」の項目には「くさぞうし」「ザウシ」【草双紙】（草仮名で書かれた草紙の意とも、また、薄手の浅草紙を用いたので一種の悪臭があったところからの名ともいう）江戸時代の絵入り短編小説の様式。広義には、赤本、黒本、青本、黄表紙、合巻（ごうかん）の総称。狭義には、合巻だけをさす。江戸で発生、展開したもので、江戸初期（一七世紀中葉）から婦女子向きの簡単な説明入り絵本として出はじめたが、次第に小説界や演劇界の動きに刺激されて複雑なものとなった。安永四年（一七七五）黄表紙の出現で、滑稽本、洒落本とともに大人向きの軽妙な小説となったが、その後、読本（よみほん）の影響で合巻となり、内容は再び婦女童幼向きのものとなった。装丁は、すぎがえし紙の美濃紙四つ折五丁目を単位とし、五丁またはその倍数を一冊としてその冊数を重ね、表紙には絵を主にした外題をつけ、数冊を袋入りにして売り出すのが常である。草本（くさほん）。仮名の草子。」という説明がなされている。これに続いて用例としてはじめに挙げられているものは「俳諧・正草千句〔1648〕三・蝦「うき名とらるる内裏（だいら）上臈 大方は恋路をかける草双紙（クサザウシ）」となっている。

次項目は「くさぞうし」たい「くさザウシ」【草双紙体】であり、「草双紙に用いられたような文体。雅語と俗語をうまく折衷させた文体。＊小説神髓〔1885〕86」（坪内逍遙）下・文体論三「雅俗折衷の文体は一にしてたらず、今大別して二種となし、仮に一を稗史体（よみほんたい）と称し、一を艸冊子体（クサザウシタイ）と称す」とある。

草双紙にある「文体」をとりだして「草双紙体」としていると思われる。右にあげられている坪内逍遙『小説神髓』（一八八六年 松林堂）の「文體論」の中で「雅俗折衷文體」として「稗史（よみほん）體」と「艸冊子體」があげられているのでその部分を引用する。

「艸冊子體」には、「艸冊子體は雅俗折衷文の一種にして、その稗史體と異なる所以は、単

に俗言を用ふることの多きと、漢語を用ふることの少きとにあり。故に跌宕豪壮なる情態形容を叙するに當りて、かの雅文體と同様なる不便不如意を感ずることあり。さはあれ漢語を用ふることをば強ち忌むといふにもあらねば、将来此體を用ふる作者は其時々の便機に應じて多少の漢語をとりまじへて、件の不便利を補ふとも決して不都合はあらざるべし。按ふに此體の文章にて、漢語をつとめて除きたりしは、假名文字のみにて書きたるからに、読者が之れを読みたる時に解しがたからむかと思へばなるべし。且つや艸冊子といへるものは専ら幼童婦女子輩の玩弄ぐさに供せしものゆゑ、つとめて漢語を除きたりしもまた當然の事といふべし。」(引用は岩波文庫『小説神髓』(一九八八年第十七刷発行)を使用した。一二八頁〜一二九頁)とある。坪内逍遙がここで「文體」というように草双紙はその本文にも特徴があるといえる。

『日本古典文学大辞典』第二卷(一九八四年 岩波書店)の「草双紙」の項目では「娯楽ないし啓蒙教化的な、婦女童幼対象と見られる通俗読みものの類を漠然とさす。」とあり、「草双紙」という名称について「双紙」は冊子(さし)の音便に適当な字をあてた仮借と解され、書型を意味するとともに記述性を備えた物語・小説類を想起させる語感も含む。「草」の字義には諸説あり、(1)読み物の草子の意(嬉遊笑覧・卷三)、(2)粗末なすきかえし紙の悪墨の臭気から臭(くさ)草紙の称(近世物之本江戸作者部類)、(3)草仮名で記した故(俚言集覧・増補)、(4)草相撲などのごとく正式のものに対する称(温知叢書本『近世物之本江戸作者部類』小宮山綏介頭書)等が主要説であるが、ほぼ(4)の非本格的・通俗的の意とする説が妥当視され、草双紙の称は一応通俗的読み物の一般的呼び名と解される。」という解説がなされている。

『日本語学研究事典』(二〇〇七年 明治書院)には「草双紙」という項目はたてられていない。事項索引をみると「草双紙」という語は「狭衣物語」「黄表紙」「合巻」の項に使われている。

「黄表紙」の項目には「草双紙(絵双紙)類の一時期のものの総称。(中略)その名称は、表紙が黄色(萌黄色)であったことによる。」とあり、黄表紙の時期を「安永四年(1775)から文化三年(1806)までに刊行された草双紙類を指す」と区切っている。「合巻」の項目では「草双紙の一種。狭義には黄表紙に対する称。(中略)作品が長編化したことにより冊数が増え、三冊から五冊を合冊したものを「合巻」と呼ぶようになる。式亭三馬の『雷太郎強悪物語』(文化三 1806)が合巻体裁の最初の作品と言われる。(中略)黄表紙の貼外題から錦絵の摺付表紙に変わり、口絵の人物には役者の似顔絵が登場し、このような華

麗な彩色を施した合巻は、読本が一定の教養を前提とした、かなり高級な読み物であるのに対し、漢字を交えることが少なく、仮名をたどれば読むことのできる平易な読み物であることと相俟って、婦女子を主として広汎な読者層を獲得することになった。合巻は最初敵討物が多かったが、次第に浄瑠璃や歌舞伎などの演劇に題材を求め、画工の参加も大きな力となって、さながら紙上歌舞伎の趣を呈することになる。」とある。また、項目の最後には「合巻類を資料とした日本語研究は、近年特に文字・表記に関するものが多く見られる」と述べられている。

『日本語研究事典』において「草双紙」という項目がたてられていないように、これまで日本語学の資料としての草双紙の研究は「黄表紙」「合巻」という括り方で扱われたものが多く、「草双紙」という括り方があまりなされてきていないようである。本稿では便宜的に「草双紙」という括りで述べていくが、本稿で扱う草双紙を分類するならば、「合巻」ということになる。

明治期に刊行された国語辞書である『言海』（大槻文彦 一八九一年）で「草双紙」を引いてみると「くさぶし^ソ」「草草紙」^{サウガナ}（草假名ノ草紙ノ義カ）草紙ノ文ヲ平假名ノミニテ記シ挿畫^{サシエ}ナドシテ、兒女^{コドモ}ノ見ルニ供フベク作レルモノ。」と書かれている。「平假名ノミニテ記シ」たものであるということが語釈として挙げられている。「合巻」「黄表紙」の項目はない。

草双紙が明治期に手にとられた様子が、一八六一年に来日したロシア正教会の宣教師ニコライ（一八三六～一九一二）が一八六九年に帰国した後、ロシアの雑誌『ロシア報知』に発表した『キリスト教宣教団の観点から見た日本』という論文に書かれている。この論文が中村健之介によって翻訳され『ニコライの見た幕末日本』として講談社学術文庫から刊行されている（一九七九年第一刷発行、二〇〇四年第十八刷発行）ので、ニコライが草双紙について述べたと思われる箇所を引用する。

街頭に娘が二人立ちどまって、一冊の本の中の絵を見ている。一人が、いま買ったばかりのものを仲良しの友だちに自慢して見せているのだ。その本というのが、ある歴史小説なのだ。もつとも、この国では本はわざわざ買い求めるまでもない。実に多くの貸本屋があって、信じ難い程の安い料金で本は借りて読めるのである。（中略）そこに諸君が見るのは、ほとんど歴史的戦記小説ばかりである。（それが長きにわたった内乱抗争の時代によって養われた、民衆の嗜好なのである。）しかも、手垢に汚れぬまっ

さらの本などは見当らない。それどころか、本はどれも手擦れしてぼろぼろになっており、ページによつては何が書いてあるのか読みとれないほどののだ。日本の民衆が如何に本を読むかの明白なる証拠である。」(十四頁〜十五頁)

この箇所は鈴木俊幸「草双紙論」(『中央大学文学部紀要』第一五七号 一九九五年)に引用され、ニコライが見た娘たちが手にしていたものは「草双紙である蓋然性が極めて高い」(三九頁二行目)と述べられている。本が「どれも手擦れしてぼろぼろになって」しまう様相も草双紙を思わせる。

草双紙そのものに草双紙の様相について書かれたものもある。本稿でも資料としてとりあげる『御産池龍女利益』(文政十一・一八二八年)の冒頭にある「草双紙大意」は「草雙紙のいろく」(石田元季『草双紙研究』一九二八年 南宋書院)などでとり上げられている。

旧昔ふるきむかしを尋るたづぬに草双紙くさざうしに作者さくしやといふものなく鳥居流とりみりうの目めの丸まるき武者むしやに。つよいやつだにげろく。とかき入いれて子供こどもの喚わやくを補おぎなふ其頃そのころは外題げだいも黄紙きかみにて赤本あかほんあり黒本くろほんあり舌した切雀鉢きりすくめはちかづき桃太郎ももの鬼おにが嶋兔しまうさぎの手柄てがらは花咲爺はなさきじ金平きんひらの化物退治ばけものたいぢはねんくころりの伽ときもの語がたり其後そのいちあか赤き色紙しきしに青き短冊あお たんざく外題げだいの青本あおほんあり中昔なかむかし宝曆ほうりき十庚辰年じゅうかうしんねん丸小まるこが板はんに丈阿じやうあ戯作けさくと始はじめて作者さくしやの名なを著あらはし。たいのみそずでのみかけ山やまのかんがらす。大木たいぼくのはへぎはで。ふといのね。ひきのやのどらやき。なんと子供衆こどもぐらがてんかく。などゝ出入でいりせしもはや昔むかし又明和まためいわのすゑ〇(↑鱗型はん)の版はんより外題げだいを色摺いろずりにせしよりめづらしき事ことにおもひ是これより青本流行あをほんりうかうして安永あんゑのはじめに桂子作けいしと名なを入れしより当世風たうせいふうをめかし恋川こいがは春町喜三はるまちきさんじ。通笑可笑つうせうかせう。芝全交京伝しばぜんかう。などの妙作出まうしゅて益ます青本あをほん繁盛はんぜうして子供こどもはそこ退女のけじょ中方ちゆうかうの手てにふれ給ひしかるに古人こじん楚満人そまんとく作さくの虚空太郎こくうたらうより前後ぜんごの編へんを別わかつ京伝きやうでん作さくのお六櫛ろくしより口画くちゑを初はじめに出せしより自おのづかから行おこなはると雖いへども紙数かみかずに際限さいげんあり口画くちゑに紙かみを隔へたてぬれば意味深長みみしんちやうなる筋すぢは書取かきとりがたし今いまや高名かうめいの細画さいぐわに文ぶんに先立画さきたつゑあり文ぶんに送おくるゝ画ゑあり去さば此され一談このいちだんは農夫のうふが陰徳いんとくを発端はつたんとして忠孝ちゆうかうの功こうに依よりて養父やうふの仇あたを討主家うちしゆかを再興さいかうの始末しまつ迄まで入組いりぐみたる訳わけを詳愛とくゐに口画くちゑを省略せりやくして古人こじん楚満人そまんとくが遺稿いかうに筆ふでを染其理そめそのことわりのぶを述のぶるになん 文政十一戊子ぶんせいじゅういちづしむつまし月 閑亭伝笑誌

草双紙は明治期に入りだんだんとその形態を保ったものは衰退していくが、鈴木俊幸『繪草紙屋 江戸の浮世絵シヨップ』(二〇一〇年 平凡社)第六章「繪草紙屋消滅」によると、花形絵師の死、繪葉書の流行などにより、草双紙を取り扱う繪草紙屋は明治の中頃には減少が目立ち始め、明治二十年代末にはまだ木版刷りの繪草紙を確認し得るようではあるが、その後衰退したようである。

つまり、草双紙とは赤本・黒本・青本・黄表紙・合巻の「総称」であるということになり、「草双紙」とあった場合の「幅」はかなりひろい意味合いで捉えておく必要があるということになる。草双紙の体裁は時代によつて変化しているといえる。赤本・黒本・青本・黄表紙・合巻という呼び方は、草双紙の体裁によつて呼び分けた名称ということになる。本稿の題目は「幕末明治期刊行草双紙」としたが、時期が区切られれば、ある程度どのような形態の草双紙をさしているかは判別できることになる。

草双紙は現在でも古典籍の入札会等で販売されることが少なくない。また、多くの大学図書館が所蔵しており、実見することができる。草双紙を資料として用いるときに、その原本が手元にあればそれを使うことができるが、先行研究では国立国会図書館がインターネット上で公開している「近代デジタルライブラリー」による画像データ等を資料(の一部)として用いる場合も多い。早稲田大学図書館による「古典籍総合データベース」(註1)においても数多くの草双紙が画像で公開されている。

『リプリント日本近代文学』は国文学研究資料館が「近代文学の研究基盤を再組織し、新たな研究動向を創出することを目的として、国文学研究資料館が収集した文献の中から、良質で研究価値の高いものの影印をオンデマンド方式により継続的に出版し、国内外の幅広い研究者・読者にできるだけ簡便な方法で提供する」(註2) 目的で発行されている出版物であり、そのシリーズの中にも「高橋阿伝夜叉譚」(仮名垣魯文・明治十二年)「恋相場花王夜嵐」(仮名垣魯文・明治十三年)など、草双紙がいくつか刊行されている。翻字はされていないが、判読が難しい箇所には註や解説がついている。

『新日本古典文学大系 83』(一九九七年 岩波書店)は「草双紙集」である。「赤本・黒本・青本」として十作品、「黄表紙」として九作品、「合巻」として三作品の翻刻を行い、脚注をつけている。翻刻は漢字仮名まじり文に改められ、句読点が施されている。凡例には「仮名に漢字を宛てた場合は、底本の仮名を振り仮名として示した」とあり、それは、底本にもともと漢字が使用され、振仮名がふられていた場合とは区別して表示されている。

草双紙には脱字や衍字がみられることがあるが、この資料では「意によって改め」られているので、その原本のかたちを知るのは翻刻からはできないが、脚注が詳しいので文学資料としては十分に参照できるものと思われる。

東京学芸大学近世文学研究「叢」の会による『叢 草双紙の翻刻と研究』は、黒本・青本・豆本・合巻などさまざまな草双紙を翻刻し、影印と翻字を示し、書誌情報に加え、それぞれの草双紙について翻刻者が解説や諸本の研究について執筆したものを載せている。非売品ではあるが現在第三十二号（二〇一一年二月）まで刊行されている。『叢 草双紙の翻刻と研究』総目次は二〇〇六年まで『草双紙事典』（叢の会編 二〇〇六年八月 東京堂出版発行）の巻末において見ることができる。翻刻の提示方法は翻刻者によってさまざまではあるが、扱った草双紙の影印・翻字があり、それについての研究報告が載せられているという形態になっている。

明治大学においては「明治大学図書館蔵幕末草双紙デジタルコンテンツ」（註3）が公開されている。これは小野正弘氏を代表とする「幕末草双紙の言語研究用デジタルコンテンツ化と語学的研究」（科学研究費補助金基盤研究 研究成果報告書 明治大学 二〇〇八年）によるものであり、式亭三馬や十返舎一九をはじめとする幕末の草双紙を、ウェブページ上に公開し、自由に閲覧できるようになっている。版面画像の上に翻刻を重ねて表示するシステムは草双紙の一字一字を現行の仮名もしくは漢字をもって確認することができる。しかし、データ化されている草双紙はまだ少ない。

このように、草双紙を資料とすることは難しいことではないが、日本語学においてはあまり積極的に使われてきていないのが現状であるといえる。

『日本古典文学大辞典』第二巻（一九八四年岩波書店刊）の「草双紙」の項目にもあるが、草双紙は「娯楽ないし啓蒙教化的な、婦女童幼対象と見られる通俗読みものの類を漠然とさす。」といったように、しばしば「婦女童幼向け」という扱いがなされることがある。坪内逍遙『小説神髓』（一八八六年 松林堂）の「艸冊子體」においても「按ふに此体の文章にて、漢語をつとめて除きたりしは、仮名文字のみにて書きたるからに、読者が之れを読みたる時に解しがたからむかと思へばなるべし。且つや艸冊子といへるものは専ら幼童婦女子輩の玩弄ぐさに供せしものゆゑ、つとめて漢語を除きたりしもまた当然の事といふべし。」とある。

木村八重子『草双紙の世界―江戸の出版文化』（二〇〇九年 ペリカン社）では、享保の改革時に地本出版が禁止になったことに触れ、享保六年（一七二二年）の『享保撰要類集』

にある「書物草紙之類是又新規ニ仕立候儀無用」、「子共翫之くさ草紙并一枚絵、右子共翫一通ニいたし候草紙（中略）板行いたし候儀ハ不苦候事」について「新規の出版は禁止するが、子ども用の草双紙や一枚絵でおもちゃのようなものなら構わない」と説明し、草双紙の出版が制限される時期があったことを述べている。

このようなことが、草双紙が婦女童幼向けであるとしば言われる理由のひとつであるのかもしれない。また、仮名主体で書かれているので、その本文の様相が婦女童幼向けにとらえられるということもある。しかし、内容が毒婦物であったり、漢語が相当数使われていたりするのであり、仮名主体で書かれているということだけでは、直接婦女童幼向けであるということには結びつかないと思われる。

第二節 草双紙を扱った先行研究

草双紙の研究は、日本文学研究を主とする研究者による研究と、日本語学研究を主とする研究者による研究に分類されると思われる。「草双紙」と冠する研究書・論文のほとんどが日本文学研究であるが、日本語学研究として草双紙を扱った論文も少ないながらある。

『江戸文学』第三十五号（二〇〇六年ペリかん社）は「草双紙―発生から終焉まで―」と題された特集である。高木元「草双紙を研究すること」（二頁）、佐藤悟「草双紙に関するいくつかの疑問」（十四頁）をはじめ、木村八重子「赤本」その後」（二十六頁）、神楽岡幼子「草双紙と演劇」（五十頁）、佐藤至子「末期の長編合巻」（二二七頁）、鈴木俊幸「豆合巻小考」（二四〇頁）、金井圭太郎「草双紙の筆耕」（九五頁）など、話題は多岐にわたる。

草双紙の作者としてよく取り上げられるのは山東京伝・曲亭馬琴・式亭三馬・十返舎一九・柳亭種彦などが多く、挿絵は歌川豊広・歌川国貞・歌川国芳などが多いようである。草双紙の体裁としての呼称である赤本・青本・黒本・黄表紙・合巻と分けて取り上げられることが多い。とくに黄表紙と合巻は物語として長編になっている場合が多く、文学研究の資料としては取り上げられやすいといえる。

草双紙には、筋書きが書かれている文章（地の文）（註4）とは別に、登場人物の台詞のような短い文が絵の余白に書かれていることがある。佐藤至子『江戸の絵入小説―合巻の世界―』（二〇〇一年 ペリかん社）に所収されている「草双紙の物語性と文体」（初出『国語と国文学』七十四巻九号 一九九七年 東京大学国語国文学会）では、式亭三馬『昔唄むかしうた花街始くるわのはじまり』巻之上六丁裏に「絵と書入かきいれとを先へ見て本文はあとにて読み給ふべし」（十六

頁)とあることをとりあげ、筋書きが書かれている文章(地の文)を「本文」、台詞の短い文を「書入」と称し区別をしている。「書入」は「詞書」「小がき」と称される場合もある。「本文」と「書入」は「本文と書入に同じ内容の台詞が繰り返されるもの」(二十六頁)、「絵と書入によって表されている場面が、本文では台詞を伴わず地の文によってのみ記述されているもの」(二十七頁)、「本文に台詞が書かれていても、書入とは台詞の内容が異なっているもの」(同頁)があるという。草双紙の絵と文が複雑な構造になっていることが日本文学研究によって明らかにされつつある。

先にあげた「幕末草双紙の言語研究用デジタルコンテンツ化と語学的研究」(明治大学二〇〇八年)に所収されている小野正弘「幕末草双紙デジタルコンテンツ化の試み―語学的研究の観点から―」において、「国語学において、草双紙(黄表紙を含む)に用いられた言語の研究は、矢野準氏による、一連の精力的な研究を除いては、あまり盛んに行なわれているとは言えない状況である」(十一頁)と述べられており、また「行なわれている研究も、いまのところ、文字・表記・仮名遣いに集中していて、語彙・文法を含めたより広範囲の研究は、まだ緒についたばかりと言ってもよい」(同頁)とある。また、草双紙がデジタル化(翻刻)されることについて「日本語学のみならず日本文学の研究や演劇学の研究においても豊富な意義を有するものである」と述べられている。

草双紙の文字・表記・仮名遣いにおける先行研究を概観する。仮名字体については内田宗一「柳亭種彦自筆資料の仮名字体―草双紙稿本を中心に―」(『語文』第七十一輯 一九九八年 大阪大学国語国文学会)、久保田篤「草双紙の用字法―赤本の仮名字体の用字を中心に―」(築島裕博士古稀記念『国語学論集』一九九五年 汲古書院)、『浮世風呂』の平仮名の用字法『成蹊文学』第三十号 一九九七年 成蹊大学文学部)など作品ごとに詳細に検証したものがある。仮名遣いは、矢野準「草双紙類の仮名遣い―石原知道浄書合巻類四種を資料として」(『国語と国文学』七十九卷十一号 二〇〇二年 東京大学国語国文学会)など矢野氏によるものが主である。小野正弘「式亭三馬合巻の江戸語―『雷太郎強悪物語』―」(『国語論究』十二 江戸語研究 式亭三馬と十返舎一九 二〇〇六年 明治書院)では係り結びについてふれている。小野正弘(二〇〇八)「語学資料としての幕末草双紙―仮名書き漢語を中心に―」は、式亭三馬『復讐安達太郎山』の文章を「地の文」「準発話」「発話」に分けた上で、「仮名書き漢語」を抽出し、幕末期に刊行された早引きタイプの『節用集』を緒として漢語の分析を行なっている。

草双紙は仮名主体で書かれているものが多く見られ、それが草双紙の特徴のひとつであ

るともいえる。そのためか、今まで行なわれている研究は文字・表記・仮名遣いに関するものが多い。草双紙の本文は、仮名主体で書かれているものと、漢字仮名まじり文で書かれているものがあるが、漢字仮名交じり文で書かれているものについてはあまり「草双紙」として取り上げられていないようである。また、研究の方法として、同じ作品、同じ作者ごとにみられる特徴をとりあげているということもあり、それぞれの作者、作品による特定の面が色濃く反映されたり、事象が制限されたりする面がある。

今野真二『文献日本語学』（二〇〇九年 港の人刊）第三章第四節「草双紙」（一九〇頁）では、草双紙の表記体について述べるとともに、仮名主体で書かれている草双紙について、少数ながらも漢字が使用されているにもかかわらず、漢語を漢字で書かずに、仮名書きしていることにふれている。

本稿でとりあげるように、草双紙には少なからず漢語が使用されているが、草双紙は主に平仮名で書くという表記体（註5）がとられていると予想されるために、漢字で書くことが一般的であると思われる漢語も、平仮名で書かれることになる。しかし、使われている漢語のすべてが仮名で書かれているわけではなく、漢字で書かれたり、部分的に漢字で書かれていたりする漢語もある。その場合には、ほとんどの箇所直後に割書きで読みが表示されている。

同書（今野二〇〇九）には「漢語の難易度を測ることも難しいが、そうしたことをもって、難しい漢語には漢字をあて、わかりやすい漢語は仮名で書いているとも考えにくい」とある。また、挿絵と本文の関係について「どのような「情報」が挿絵側で示されているかについてつねに留意し、「本文」側では挿絵側にわたされた「情報」は省かれている可能性があるということに注意しながら、草双紙の「本文」をとらえる必要がまずはあることになる。つまり、草双紙の「本文」を何の吟味も経ずに、そっくりそのまま日本語観察の材料にすることはできない、ということになる」と述べられている。絵と本文のどちらがどのように伝えたい情報を担っているかということについて、本文中に「絵解き」として場面（絵）の説明を（話の内容からはずれてわざわざ）行なう場合や、本文よりも絵のほうが多く場面が進む場合もあるので、挿絵と本文の関係も注意してみていくことが必要であると思われる。

草双紙がどのように研究されてきたかということを観察することによって、草双紙がどのような資料としてこれまでにとりあげられてきているかということを示した。日本語学において草双紙はその表記・仮名に注目されることが多く、草双紙の語彙面を扱う調査は

あまりなされておらず、その点はもう少し幅をもった広い事象の検証ができそうである。草双紙が刊行されていた時期は江戸から明治へと時代が移るといふ、文化においても日本語においても過渡期といえる時期である。草双紙を資料として有効に使う方法を模索することは日本語の研究において有意義であることと思われる。

第二章 仮名主体で書かれた草双紙

第一節 江戸式草双紙の体裁

『御産池龍女利益』——江戸期の草双紙——

草双紙の本文は大きく分けると、①ほとんどが仮名で書かれているもの、②漢字仮名交じり文で書かれ漢字には振仮名が振られているものがある。とくに①の書かれ方は草双紙独自ともいえる特徴であり、日本語学の研究分野においてはしばしば注目されている。草双紙が仮名主体で書かれているということが、文字・表記・仮名遣いの研究資料としてとりあげられてきた理由であるともいえる。まずは仮名主体で書かれている草双紙についてとりあげる。

『御産池龍女利益』^{みぞうがいはりゆうじよのりやく}は文政十一（一八二八）年一月に刊行された草双紙で、奥書きに関亭傳笑作・歌川国兼（外題は北尾重政）画、森屋治兵衛板とある。前篇（二く十五丁）・後篇（十六く三十丁）の二巻がある。この草双紙は前篇・後篇で完結している。

『御産池龍女利益』^{みぞうがいはりゆうじよのりやく}

【四丁裏】

ねずかな

も三郎はふしぎの

いのものども

ゑんやとかの女

へはおやのゆるし

くもみをつれ

ある女ぼう

てわがやへかへり

のたづね

いやしからぬとり

きたりと

なりゆへ身の

ひろうしてかい

うへのことを

ろうのちぎり

くどくもたづ

あさからずしたしみ

けるにくもゐはも三郎
がいへにきたりてより
ばんじにかしこくかな
いのおとこをんなを
いたはりてまめだちて
はたらきいとをとり
はたををりたの
ものにまさりて
せいだしけるに
も三郎もよろこび
くらしけりこゝに又

【五丁表】

あくふいはねはちかごろ
も三郎いつくよりか
うつ
くしき
女を
つれ
きたり
にちや
むつま
しくした
しむ
ことを
きゝて

ひそかに
かいま
みて
ねたま
しく
おもひ
わがひごろ
こひしくしたふ
人をねとられ
しとくやく
しくおもひ
折もあらは
うちころして
くれんと
こゝろを▲
▲つけて
いたり
けり

さてもいはねは茂三郎
ふうふがなかよきあり
さまを見しよりも人のうは
さをきくにつけ又見るに
つけてもりんきいや
まししんいの

ほむらむね

にみち

ひごろ

わか▲

あるゆふぐれのでん

にていはねはくもゐに

はたとゆきあひこれ

さいはひとあたりにあり

あふたち木をねこぎにして

▲こひの

わがこひのあたおもひしれと

かなはぬも

ちからにまかせてうちかゝれば

かの女をかねて

ふしぎやいはねかごたいしひれて

かくしおきしもの

たちすくみになりけるそのひまに

ならんとくもゐを

くもゐはのがれてにけさりし

つけねらひゐたるに

こそあやしけれ

ほとんどの本文が仮名で書かれているが、矢野準「一九黄表紙に於ける漢字(一)」(『香椎潟』三九号 一九九四年 福岡女子大学)などで指摘されているように、漢数字や固有名詞、「女」や「人」など「画数の少ない漢字」(矢野準・一九九四)は漢字で書かれることが多い。つまり主に仮名で書き、少数ながら漢字も使うという書かれ方であるといえる。現代日本語を書くためにごく普通に採られている「漢字仮名交じり文」に対比させれば、いわば「(平) 仮名漢字交じり文」であることになる。本文のほとんどを仮名で書くという書き方がされている草双紙には、本来漢字で書かれることが多い漢語や字音語も、その本文の中で一様に仮名書きされることになり、「漢語の漢字離れ」(山田俊雄『日本語と辞書』一九七八年 中央公論社 二二三頁)の状態になっているということになる。

本稿では、草双紙の表記体ということ考えたときに、主に仮名で書くという書き方を「選択」したとみて、このような草双紙については「仮名主体」表記と呼ぶこととする。

草双紙がなぜ仮名主体で書かれているのかということについては、先行研究をみても明確な理由が判明しているとはいえない。草双紙が仮名主体で書かれていることについて、今野真二『文献日本語学』(二〇〇九年 港の人刊)では、「なぜ仮名ばかりで書いたのか」という問いをたてると、草双紙が「娯楽ないし啓蒙教化的な、婦女童幼対象と見られる通俗読みもの類」(『日本古典文学大辞典』第二卷「草双紙」の項)であったから、が答えに

なってしまうかもしれない。草双紙の内容が娯楽的であるか、啓蒙教化的であるか、については結局はいろいろなみかたができる、ということになるであろう。(中略)「婦女童幼対象」だから仮名書き、という運びは、それはそれで理解できる「筋道」ではあるが、「筋道」を構成する一つ一つの階梯にずいぶんと推定を含み、かつ運びが単線的にみえもする。」と言及されている。さまざまな資料を通してみても、草双紙が仮名主体で書かれていることについて確信できる考えをもたないが、草双紙が刊行されはじめた時期から、草双紙が仮名主体で書かれていたことにより、草双紙はそのように書かれるものであるということが共通認識として定着し、それにより、仮名主体で草双紙を書くということが、草双紙の表記体として、ある程度まとまった概念をもったのではないかと考えられる。

『御産池龍女利益』には本文とは別に、人物の絵の横にその絵の人物のことばが「┐」(括弧のような記号)つきで書かれている箇所が、全篇三十丁のうち前篇に二十か所、後篇に六か所ある。以下にその箇所を示す。

『御産池龍女利益』発話部分

【前篇】

一裏 茂三郎 「これ／＼へびはころさぬものじゃ わしがかりをやるほどにたすけて

やれ／＼

二表 こども 「どこからでた ぶつちめろ／＼

「とつちめてもひつつめても かまふことねへころせ／＼

二裏 男 「これ／＼あねへちからぢまんをしてけがをするなそれでいまにさぞい

しゆをしりにしくだんべい

三表 いはね 「此くらあなことはおちやのこさ

男 「さても／＼

四裏 茂三郎 「ちつとやすんだがよい きがつきやうに

五表 いはね 「エゝはらのたつどうしてくれやう

五裏 いはね 「うぬまちやアがれ アゝゝ

くもゐ 「のふこはやゆるして下さんせ

六表 茂三郎 「ハテさてふしぎなゆめではないか

八表 くもゐ 「なごりはつきぬさらばじやぞや

八裏 友市 「これからみつをくんでまきをほすばかりだ

九表 茂三郎 「さんがいのくびかせこれであんどいたします

はつせ 「ふしぎなふんどむしもかぶらずよい子をもらひました

十裏 でくあん 「ハハハナルナルやもいさいせうち／＼

伴右衛門 「とかくきろうにあらされば此一で□はらちあかず しからばきつとせう
ちじやの

十一表 「女だてらのおてんばもうまれつきならしかたがねヘナントきもがつぶれ
たかへ

「アッタ／＼こいつは大しくじり／＼

十五裏 赤松 「そのもとのこんせつまんぞくいたすこのうへばんじ申あはすであらう

大弐 「だん／＼おぼしめしたちのけつこうちくいちせうちつかまつりましてご
ざりまする

【後篇】

十八裏 茂三郎 「またこのへんへきたらよらつしやれ

「わしがうちでそたてたと思へば一トしほなごりをしい

二十一裏 吉六 「あなたはすま二郎さまこれは／＼

すま次郎 「やゝそのほうは吉六ならずや

二十三裏 僧 「とかくおしよくがいかぬではらちかぬて

「ひやうにんのたべものにうまいものはないものさ

この「ことば」については佐藤至子『江戸の絵入小説―合巻の世界―』（二〇〇一年 ペ
りかん社）に「書入」（註6）という用語を使って、本文との関係を説明している。先にあ
げた小野正弘（二〇〇八）の論文では草双紙の文章を「地の文」「準発話」「発話」に分け
たうちの、「発話」という表現がなされているものにあたる。本文とは離れた箇所「一」
で始まることばが書かれている場合、その内容はほとんどが人物の話している言葉、また
は心中話である。この部分は地の文に比べ、口語的であるようなので、草双紙の文章が文
語的であるのか口語的であるのかを考える際にはこの部分を区別することは有効な方法で
あると思われる。小野（二〇〇八）の中では「発話」にはかなり生き生きとした口頭語が現
われる」と述べられている。しかし今回はこのことばの部分が、扱った草双紙の中では『御
産池龍女利益』にしか見られなかった。また、そのような「書入」がみられない草双紙で

は、地の文の中に登場人物の会話部分は埋め込まれてしまっている。

本稿では草双紙の漢語をとりあげるが、このような「口語的」な枠組みの中にも「自慢・怪我・亭主・不思議・安堵・委細・承知・懇切・満足・万事・病人」のような漢語が使われているということには留意しておきたい。

本稿でとりあげる草双紙は分類するならば合巻であると先に述べたが、草双紙のところに合巻体裁のものについて、「江戸式」「明治式」「東京式」という呼称が用いられることがある。

「合巻」は『日本語研究事典』（二〇〇七年 明治書院）の「合巻」項によると、「草双紙の一種。狭義には黄表紙に対する称。（中略）作品が長編化したことにより冊数が増え、三冊から五冊を合冊したものを「合巻」と呼ぶようになる。式亭三馬の『雷太郎強悪物語』（文化三 一八〇六年）が合巻体裁の最初の作品と言われる。」とある。また、佐々木亨「明治の合巻―所謂明治式合巻と東京式合巻なる名称をめぐって―」（『徳島文理大学文学論叢』十二号 一九九五年）によると木版による最後の合巻は明治二十一年（一八八八年）まで刊行されていた万亭応賀の『明良双葉草』と目されている。この「合巻」という体裁をもつ草双紙をひとつの流れととらえるならば、合巻は約八十年間にわたって刊行され続けたということになる。

『日本近代文学大事典』第四卷（日本近代文学館編 一九七七年 講談社刊）の「文学改良」の項にある合巻についての部分を引用する。

これらの流れにも増してひろがりをもったものは、合巻の流れだったのであろう。幾種もの合巻――先にふれた『釈迦八相倭文庫』や、『白縫物語』（柳下亭種員―三世柳亭種彦）、『児雷也豪傑譚』（美図垣笑顔―柳水亭種清）そのほかが、江戸から時代を越え、作者のリレーで、延々と書きつがれていたのをはじめ、この時代へはいって新に興った新聞の「つゞきもの」が、やがて、江戸合巻よりも字を大きくし、ふり仮名つき漢字まじりの明治式合巻となった。やはり浮世絵Ⅱ風俗画とのタイアップで「婦女童幼（蒙）」にも親しまれた。おりおりのトピックにも、いち早く対応したのはこの流れだった。函館や西南の戦争にも、農民蹶起にも、高官暗殺にも、いわゆる毒婦の処刑にも、あい前後して、合巻作者は競って筆を走らせた。『鹿児島戦記』（篠田仙果、永島孟齋）『冠松真土夜暴動』（武田交来、大蘇芳年）『蓆旗群馬嘶』（雑賀柳香、梅堂国政）『島田一郎梅雨日記』（岡本起泉、楊斎房種）『高橋阿伝夜刃譚』（魯文、守川周重）『毒婦^{其名}

高橋 小伝『東京奇聞』（起泉、房種）など、それぞれよく迎えられた。明治式合巻は、『巷説
児手柏』（明一二、三世種彦Ⅱ高島藍泉）が、たまたま木版にかえて鉛活字版袋綴（表
紙・口絵木版）としたのを機に、いわゆる東京式合巻の活版合巻となって、技術上挿
画も少なくなり、合巻書型に一大変化を来たようになって、それだけ正系合巻から
離れてゆき、江戸生きのこりの合巻が、はつきり姿を消して行ったわけである。（四五
五頁）

江戸式合巻というのは、草双紙特有の仮名主体で書かれているものをさすと考えて差し
支えないと思われる。見開きを単位として描かれた絵のまわりをびっしりと文字で埋め、
少数の漢字を用い、漢字の読みを示す際には「としふる鯉いまれなり」『御産池龍女利益』
後篇二十四丁オモテ）のように直後に仮名で割書きをするという体裁である。その仮名主
体で書かれていた草双紙が、明治十一年に刊行された久保田彦作『鳥追阿松海上新話』を
筆頭に、漢字仮名交じり文に振仮名を施すという書かれ方で刊行されはじめた。その体裁
では、ほとんどの語を漢字で書き、漢字の横に振仮名を施すため、行間にゆとりをもつよ
うになり、それにより草双紙の版面は仮名主体のものとは様相を変えることとなった。こ
の漢字仮名交じり文＋振仮名で書かれた草双紙をのちに明治式と呼ぶようになったと思わ
れる。そしてその明治式の草双紙は、明治十二年頃から活字版の和装本が刊行されはじめ、
この活字版の草双紙を東京式と呼ぶことになる。

佐々木（一九九五）には「江戸式」「明治式」「東京式」の呼称をめぐるさまざまな見解
が述べられている。その中に「柳田泉は『明治初期の文学思想』で、明治文化研究会にお
いて戯作方面の問題を分担して得意顔だった石川巖の姿を伝えている。この研究会が、そ
して石川巖が明治式合巻の命名者ではあるまいか」（二十六頁）と述べられている箇所があ
る。

また、小野忠重「明治の絵入本（上）草双紙の末路をめぐって」（『日本古書通信』三十
巻第一号 一九六五年）には「故石川巖氏の命名する「明治式合巻」（八頁）とある。そ
れぞれによると「明治式」という呼称を用いたのは石川巖氏であるようだが、同七頁に載
せられている図版の「木版組込み活版の明治式合巻（和装本）」とあるものは活字のものを
示している。そして「木版の江戸式合巻」として漢字仮名交じり文で書かれた（活字では
ない）『高橋阿伝夜叉譚』の図版を示しており、佐々木（一九九五）とは「明治式」を示す
ものが異なっている。

江戸式合巻と東京式合巻の違いは、木版であるのか、活字版であるのかという版の違いを呼び分けたものということになる。そこにさらに木版に漢字仮名交じり文で書かれた草双紙を別に呼び分けようとしたときに「明治式」という呼称がうまれたと思われる。つまり「江戸式」は仮名主体表記・木版、「明治式」は漢字仮名交じり表記・木版、「東京式」は漢字仮名交じり表記・活字版ということになる。しかしこれらの呼称は明確に定義されているわけではないと思われる。本稿の範囲では前述のように「江戸式」「明治式」「東京式」という呼称を用いることにする。本稿で扱うのは主に、「江戸式草双紙」と「明治式草双紙」ということになる。

第二節 江戸式草双紙の本文『金華七変化』万延元年～明治三年

草双紙『金華七変化』は万延元年（一八六〇年）から明治三（一八七〇年）年までの間に三十一編が刊行されたと目されている。著者は初編から二十七編までが鶴亭秀賀、二十八編から三十一編が仮名垣魯文となっている。二十九編の「換序」には「鶴亭秀賀が一世の大筆。金花七変化と題号し稗史。普く婦幼の時好に叶ひて廿七編の。巻数を重ねしに。彼人長の病気に。悩まされて生国なる。山鳥の尾張に帰る。生死は知らつなりしとて。そが次編を余に乞へり。此原本は誰も知る。嵯峨野の奥にありしといへる。猫魔多譚を生捕ました。京都にては女三の宮。大坂にては唐犬傳を翻案なして廿八九編と続いて御評判。新版じゃく。東京 仮名垣記」とあり、仮名垣魯文が鶴亭秀賀から引き継いで、続きを書くことになったいきさつが書かれている。

『金華七変化』十三編九丁ウラを開いてみると、絵は左右の丁を合わせて一場面とみた構図で描かれている。右上から本文が始まり、丁を移って一番左はじまでいった後、右の丁にもどり、また右の丁から左の丁へとつながっていく。同じ記号を辿って右の丁から左の丁へと絵の隙間をぬって五往復する。人物と人物のすこしの隙間にまで文字が書かれている。この場面は絵の中の空白部分に文字をさしこんでいったというようにみえるが、文字に沿って絵を描いているような箇所もある。次にこの部分の翻字を示す。

『金華七変化』《十三編九丁裏～十丁表》

（改行は版面通り。見開き一丁分の文字量を提示。）

つゞき

お玉の

かたを

はじ

めおん

こしも

とのめん／＼

またはこもり

半の丞を

はじめごきん

しゆのめん／＼も

こゝろがまへのなき

おりからゆへいと

こふじながらも

なにとぞしう

いつをよみいだ

してたいしゆの

きよかんにあずか

らんトおの／＼くふう

をこらしけるにぞ

おんにかいはしんと

してみづうちしこと

くなり

そが●

●なかにも

かのお玉のかた

のつぼねかすが

のはさるみちに

うとければかゝる

おんせきにつらなる

べきにもあらざれば

そつとおんにかいを

すべりへやにかへらんト

こきみあし

くもたゞひとり

おんらうかをかへり

くるにいつものことく

みけねこはさき

にたちくび8

8ひもの

すゞを

りん／＼

となら

してかけ

ゆくにかの

ねこまみど

りの市の

ぼうれい

いつもあら

わるゝ▽▲

▽▲ところ

まで

きたり

しに▲◇

▲◇こわしと

おもふ

ときも

とき

ふと

その

ことを●

●お

もひ

いだし

こゝは

しか

ぐ／＼の■

■あや

しみありし

ところゆへ

すぐ

さま

こぼち

て●

●べつ

の

しな

にて

たてかえ

させたまひし

がもしやいま

にてもそのおんねんののこりてや

の

あらんかなどゝ

よし

なき

ことを

思ひ

いだ

すやいなえり

もとぞつとなして

みづそゝがるゝがごとく

おもふおりしも

いと

なま

ぐさき

いちぢん

のかぜ○▲

○▲ふききた

るにかのかべの

うちにていちだの

おに火あらわれいで

しをよく／＼みれば

そのなかにれい／＼と☒

☒あら

われ

いでし

みどりの

市の▼▲

▼▲ぼう

れいにや

／＼とわらひ

ながらもあき

のゝすへの

むしよりも

なほほそ

きこゑ

して「なん

じにうら

みはなけれ

どまわるいん

ぐわのゐん

えんあれば

ふびんなが

らもいのちを

もらひ大守に

ちかよりしせ

つをまちて

あくまで

うらみを

かへさん

とすなん

じかならず

うらむ

る

な

と

い

ひ

つゝ

カラ

〈

うち

わらへば

さいぜん

よりまへ

あし

おつて

いた

えん

に

ゐ

ね

ふり

いたりし

かの

みけ

ねこは

みふるひ

なしてたち

あがりいつさんに

かけきたり
つぎへ

このような草双紙が「読みやすさ」を意識しているのかどうかは不明であるが、草双紙を読み慣れてくれば、読みにくいということはない。文が絵を挟んでぎれている場合でも、その上下の列はまっすぐになるようにそろえられていることが多い。草双紙が次第に文字量を増やしていったのは、読み物としての需要に応えたものであると思われるので、少なからず「読みやすさ」は保たれていると思われる。草双紙を日本語学の研究資料とみたときには、丁を右から左、右から左と絵の隙間を縫いながら進む文字列に、どこまで通常の表記の意識、語頭の意識、仮名遣いの意識を想定できるのかということについて、考えることも必要であると思われる。短い箇所では二字のうち一字が「行頭」になるのである、そのように書かれている文章の中に語頭を示すなどの「読みやすさ」の機能がほかの資料で言われるように働いていると考えることはできるのだろうか。このような点はさらに詳細に検証する必要があると思われる。

矢野準「草双紙の行―京伝黄表紙三種を中心に―」（『筑紫語学論叢 奥村三雄博士追悼記念論文集』二〇〇一年 風間書房）は、黄表紙の「行移り―行の変り目―による表語の働きの定着度合いを詳細に検討」（二四七頁）したものである。その調査結果においては「語頭相当の文字が行頭に記される率の高さからして、各丁に書記上の安定した行形式をもつ資料で、既に、行なわれていた、語の切れ目で行移りを行なうという原則は、行の保障されていない草双紙の場合でも稿本・板本ともに基本的在り様となっていた」「一見、右の傾向に反すると思われる場合も、詳細にみれば、稿本・板本ともに行における表語の働きを妨げない場合が多かったと思われる。」（二六一頁―一六二頁）と述べられている。

一方、先にあげた「幕末草双紙の言語研究用デジタルコンテンツ化と語学的研究」（二〇〇八年 明治大学）に所収されている今野真二「幕末期草双紙の表記の概観」（三十五頁）では、十返舎一九作『女諸礼鑑』（文化六 一八〇九年刊）を採り上げ、その表記について述べられている中に「草双紙にも一行というものがあるとして、その一行の字詰めは一定ではない。このような形態をとるテキストの「行」に対する書き手／読み手のいわば「感覚」は、物理的に同じ長さをもつ「行」が並んでいるテキストの場合の「行」に対するそれとは異なるであろうし、「行」のもつ表記上の機能（というものがあるとして、それ）もやはり異なることが予想される」（四十四頁）とある。

『草双紙集』（新日本古典文学大系 83 一九九七年 岩波書店）に収録されている『会席料理世界吉原』（市川三升作・歌川国安画、文政八 一八二五年）は、小池正胤氏の「解説」によると、七代目市川団十郎名義の合巻で、「お家の重宝紛失」「敵討ち」「貧家」など、「こ

れまでにたびたび使われた歌舞伎の趣向の型と言うか、作劇上の型とでも言うものを取り入れている」(六三七頁) 内容となっている。この草双紙には挿絵のない、文字だけで埋め尽くされた丁が何丁かある。他の草双紙においても、巻の最終丁になる裏の半丁はそのように、挿絵は入れず、文字だけの丁になることがある。この作品の挿絵のない文字だけの丁について、註には「詞書ばかりで絵はないが、この時期の合巻は時々このような方法をとる。十六丁表から後編に入り、話は後半部に入って展開する。それゆえここでまとめてしまわなければならないための手段。」とある。この丁はさらに、文字列を調整して、版面が波模様の柄に見えるように、文字の改行をもってレイアウトをしている。このように書かれているものを見ると、書き手にとって行がどのように捉えられていたのかということを考えることは難しいと思われる。また、『会席料理世界吉原』十八ウラ十九オモテでは、次にあげた箇所は語中で改行されている。(／は改行を示す。)

先／年	ろう／じん	せが／れ
かく／まで	引／いだす	かたじけなけ／れど
せん／だつて	つか／れはて	ごと／き
うつ／たへ	そ／しらぬ	なに／しに
ごく／や	たい／けつ	あき／らめ
なか／ば	なに／もの	がん／ぜなき
な／のり	こな／た	まう／し上げ
けう／だい	ちま／よふ	し／さい

これらの箇所は行頭に語頭がきていない箇所ということになる。

草双紙は一行の字詰め数が決まっていないので、挿絵の幅によってある程度限定されてしまうということを考慮しても、行頭に語頭をもつてくるように調節することはできると思われる。しかし、一字二字程度しか入らないような隙間にまで字を書くなど、行頭に語頭がこない例が少なからず確認されるのであれば、行頭と語頭がそろっていることに積極的な意味をもたせることができないと考えてよいと思われる。また、最初から挿絵の隙間に文字を埋めていくことを前提・目的としているのならば、字数を調節しようという意識はないといえる。

この箇所の語中で改行されている語のうち、漢語をみると「先／年」「老／人」「対／決」

「兄／弟」「仔／細」のように漢字にした時には一字ずつに区切られているとみることもできそうではあるので、まだ分析の余地があると思われる。

草双紙の仮名字体については、久保田篤「草双紙の用字法―赤本の仮名字体の用法を中心に―」（『築島裕博士古稀記念国語学論集』汲古書院 平成七年）において、草双紙としては初期のものである赤本をとりあげ、仮名字体の使われ方を調査し、検討をくわえているものがある。そこではまず「二種の字体の使い分けがはっきりと分かる仮名」として「シ」「タ」「ミ」があげられている。「シ」については語頭「志」語中・末「し」、「タ」はおおよそ語頭「た」語中・末「多」、「ミ」は語頭「み」語中・末「み」という使い分けがなされていると述べられている。

赤本ではないが、万延元年（一八六〇年）ごろの草双紙である『金華七変化』十三卷三丁ウラから五丁オモテまでの見開き二丁を見てみると、「タ」と「ミ」はそれぞれ「多」「ミ」の一種類ずつしか使われていない。「し」の箇所は以下のとおりである。（形が「志」であるものと、「し」であるものを分けて示す。／は改行。）

ひと／志ほ	とがぐしき	志か／られ
うし／みつ	まうしあげ	志よんぼり
くるしく	なしつゝ	志あん
うし／ろ	かん志ん（感心）	志かるに
ふ志ん／なし	志やうず（上手）	くる／志む
きま／せし	きけ／かし	志せん
むきいだし	志う／と（姑）	ねんじ
わたしは	ゆる／志もせん	志らぬまに
わたし／は	とがぐしき	かん／びようなし
わたしの	つゝ志み	はしめ（始め）
あしで	志からるゝ	うれ／志く
わた／しの	志らず	もつたいなし
おしいだされ	志のび	あんじ
これは／志たり	こしもと	くるしむ
志たことが	志ら／で	なかりし
くるしき	志うと	くるしむ

ふしん

あやしき

ばんじに

志らざれば

「シ」は「し」と「志」が使われているが、その使用箇所は、この範囲だけではあるが、「志」が語中にくることもあり、「不審」は「ふ志ん」「ふしん」の二通り使われている。『金華七変化』においては「使い分け」といえるような使われ方はしていないようである。また、使い分けしていることを定義することは難しく、このような調査はその作品、その作者に限られた使用範囲内での議論の域を出ることが難しいと思われる。

江戸式草双紙の本文は、主に表記面において、書写された手書きの文献、または活字で印刷された文献とは違う、整版本であることの可能性を多岐にわたって内包している。その特徴をうまくとらえることが草双紙を資料として生かす方法のひとつであると思われるが、いろいろな可能性を含むがゆえに、はっきりとした事象をとらえることは難しいと思われる、またそのような断定的な事象は起こりにくいのではないかと思われる。

第三節 江戸式草双紙の漢語 『西南雲晴朝東風』——明治期の草双紙——

草双紙にも漢語が使われているということを先述したが、ここで具体的に、草双紙にはどのような漢語が使われているかということを示していく。幕末から明治初期にかけては日本語における漢語使用の過渡期といえる時期であり、これまでもさまざまな資料に基づく研究がなされているが、この分野は今後さらに精密な研究を進めていくことが求められることと思われる。

仮名主体で書かれた草双紙にも、漢字仮名まじり文で書かれた草双紙にもそれぞれ漢語は使われている。ここではまず、仮名主体で書かれた草双紙に使われる漢語をみていく。

『西南雲晴朝東風』は、巻末に明治十一（一八七八）年三月十五日、東京の「山松堂」出版とある。篠田仙果作・楊洲斎周延画。一卷は八丁ずつ、上中下巻がある。原作は河竹黙阿弥が書いた狂言「西南雲晴朝東風」であり、明治十年におきた西南戦争が題材になっている。この時期には他にも西南戦争を題材にした草双紙が多く刊行されている。渡辺保『黙阿弥の明治維新』（1997年新潮社刊）によると、西郷隆盛が自害したのが明治十年九月二十四日、河竹黙阿弥が書いた「西南雲晴朝東風」の上演初日が明治十一年二月二十三日であり、戯曲は『黙阿弥全集』（一九二四年 春陽堂）には収められず、現在までにその第

一幕第一場をのぞいてすべて失われてしまったため、「三月に刊行された篠田仙果作、周延画の同名の合巻上中下三巻によってその内容を知るしかない。」(232頁)と述べられている。

『西南雲晴朝東風』上 六丁ウラゝ七丁オモテ

つゝき

いづれそうすけ

そのいきほひにてはやがてめでたく
きこくなればいはふて一トツまふが
よいといはれてさうすけたちあかり
あふぎをひらきこゑくもらせ

とうなんせいほくのてきを
やすくほろぼせり」

とたむらまるの一トさしをしゆくうて

高瀬の場

くまもとけんかのてうゑきにんらんぼう
なすことひとかたならねはたかせぎいのむらかた
にてもいりくちにやういをしつらいそれ／＼ようい
なしたりしがこのところへにけきたるおとこはくま
もとぜうかにてかたなとぎの小川宗治さうそれと
みるよりてうゑきにん人はやにわに宗治をうちた
をしいるいのつゝみろようかねをうばひとられて
しんたいきわまりすでに川にとびこんでしなんと
せしがさつしうがたのたきだしこかしら五郎蔵
にたすけられてさつしうがたひようらう人そく
となりにける吉治きちゑのばくわんぐんがたのばつたう。

まふにあをぎのおやほねさらりととれ

しをさうすけはいと／＼きにはかゝれども

なにとあかしのうらちどり一羽いち

すご／＼もどりけるかゝるところへ

たけのうへ四郎しろうはせきたり「たゝいま
ものみかちうしんにはくまもとにははや
らうぜうとけつしんせしよしなりと

きゝてひしとめとめみあわせしばし
ことばもなかりける

●たいみきほひ

するどくさつ

しうぜいもてき

しがたくしりぞく

にぞゆうきすぐ

れしみのはら国

元もとへいしを

いさめはげまして

吉次とうげをとり

もどしいまひと

げきせんいたして

くれんとうまのり

いだすを

武上たけ
うえの

四郎しろう

こゑを

かけて

ひき

とめ

いつ

たん

ひき

あげ

めさ

れよ

といさ

めのこ

とば

をきゝ

いれず

次へ

小野正弘（二〇〇八）「語学資料としての幕末草双紙―仮名書き漢語を中心に―」は、式亭三馬『復讐安達太郎山』の文章を「地の文」「準発話」「発話」に分けた上で、仮名主体で書かれた漢語を「仮名書き漢語」として抽出し、幕末期に刊行された早引きタイプの『節用集』を緒として漢語の分析を行なっている。仮名主体で書かれた草双紙の漢語は、おもに仮名書きであらわれる。このような草双紙の漢語について、『百年前の日本語―書きことばが揺れた時代』（今野真二 岩波新書 二〇一二年）では、「草双紙は、「仮名で書く」ということをまず選択していると思われるので、草双紙に使われている漢語が仮名で書かれているからといって、その漢語が「漢字離れ」しているとは限らないことになる。しかし、そもそも漢字を使わないということがわかっていて作品が書かれているとすれば、仮名で書いても「わかる」漢語が使われていたと推測することは許されるであろう。（中略）仮名で書かれている理由の一つとは限らないが、仮名で書かれているのだから、これらの漢語が漢字を離れていることは確かなことで、漢字の支えがなくても理解できるようになつて

いた漢語といえよう。」(四六～四七頁)と述べられている。

「漢語の漢字離れ」とは山田俊雄『日本語と辞書』(中央公論社刊 一九七八年)の一節「辞書の中の漢語の姿」においてとりあげられていることからであり、「漢語が、漢字で書かれない場合、もしくはその漢語の本来の有した文字連結(文字列)から遊離しても存在し、使用せられた状況をみとけたい」(二三八頁)としたうえで、「漢語の漢字離れ」について述べられている。その箇所を引用する。

ある語が漢字表記を通常とするのは、その語が観念語であることが一つの条件である。また、その語が字音語であることが第二の条件である。しかしその語が漢字仮名まじりの表記体にあられるとき、観念語であるなら、多く漢字の訓読を要求する表記体をとる。漢語・字音語は、右の二つの条件をもつとも典型的にそなえているから、十中九まで漢字表記をよしとする慣習である。少くとも現代人の漢字仮名まじり文というものは、そこまですべてを要求しているかと考える。(中略)江戸時代の草双紙の類を読むならば、漢字は、たしかに使用してはあるが、振り仮名を伴ったり、割注の形で読み方を記したりすることも多く、現今のようではなかった。そのことは、一面においては、漢字を使用しない、仮名の多い読み物の流行と考え合わせてみる必要があるのだ。あつて、仮名使用を主とする読み物では、字音語も仮名であらわし、しかも読者の方に格別の支障が生じなかったのではないかと想像される。すなわち、漢語の漢字離れである。仮名で書いても、その語形だけで、その語が固定しうる状態に達していた語群が存在していたことを、筆者は信じるものである。漢語の漢字離れは、漢語を漢語らしく見せる姿を変えることである。ことに、一字の漢語は音節としては一音節もしくは二音節であるから、姿を仮名にやつてしまうと、それは漢語としての性格をかなりあいまいにすることになる。そこには、漢語の日本化、漢語の性質転換がおこる。しかし一方では、それを抑制する傾向が、語表記の方法とは別に生じていたろうとは思われる。(二三八頁～二四二頁)

このように書かれたことがらに基づき、「漢語が、漢字で書かれない場合」である草双紙の漢語を採集し、分析を試みることは漢語の「本来の有した文字連結(文字列)から遊離しても存在し、使用せられた状況」を確認し、さらに、それがどんな漢語であるのかということ进行分析することは、日本語の語彙としての漢語の姿をとらえ、その特徴の一端を

明らかにすることにつながる。実際に、このようなことがらの分析はこれまでにあまりなされてきていないといえる。

幕末明治期の漢語を採りあげた辞典として、佐藤亨著『現代に生きる 幕末・明治初期漢語辞典』（二〇〇七年明治書院刊）がある。この辞典の凡例には「主に幕末・明治初期に新造された語、成立はそれ以前であるが、新しい概念を示す語として改めて用いられた語、また、意味・表記・語形（よみ方）が変化した語、それらがゆれている語など、時代の特徴を示している漢語四四八二語を収録した」とある。文学作品、新聞などさまざまなジャンルから用例が挙げられているが、当該時期にも相当数刊行されている草双紙は、この辞典に資料としてほとんどとりあげられていない（註7）。漢字仮名交じりで書かれている草双紙もあるが、そのような草双紙もこの辞典には資料としてとりあげられていないということになる。

この辞典のように、漢語の使用例を採集することを目的とする場合は、漢語を多く使用している資料を対象とするものであり、その多くは漢字で漢語が書かれている資料であるといえる。草双紙にも漢語は相当数使われている。しかし、仮名主体で書かれているものが多いためか、草双紙の漢語はこれまであまり注目されることがなかった。しかし、「草双紙の漢語」は存在するのであり、これも漢語語彙の一面として、とらえておくべき姿であると考ええる。

まず、草双紙の漢語を概観するために、草双紙『御産池龍女利益』に使用された漢語をあげてみる。草双紙の漢語は以下のように採集した。

①採集した漢語は、和語に対する広い意味合いでの漢語であり、字音語・和製漢語・新漢語等の判別はしていない。また、仮名遣い、濁点の有無、唐音・呉音などの差異による語の区別もしていない。（註8）

②「御」などの接頭語は原則としてはずした（例「御意向」「御主人」など）。しかし、「御前」「御殿」など漢字一字として切り離しにくい語はそのまま採取した。

③混種語は除外した。

④固有名詞は除外した。

⑤一字漢語のサ変動詞（例「感ず」「祝す」など）は含めた。

⑥漢数字は原則としてのぞき、「人」「円」などの単位のみで扱う。しかし「一卷」「三界」などそのまま扱う場合もある。

⑦漢字字体は現行の形に改めた。

以下本稿で扱う漢語語彙は右にしたがって扱うこととする。

『御産池龍女利益』全篇に使われている漢語の合計数は七九四語、異なり数は四四八語であった。『御産池龍女利益』全体の字数は約二万二二〇〇字あり、前篇が約八六〇〇字、後篇が約一万二六〇〇字である。『御産池龍女利益』に使われている漢語七九四語は字数に直すと、二六九九字であったので、漢語一語あたりの平均は三・三九字、全体の字数に対しての漢語の割合は約十三%ということになる。

比較のために、『御産池龍女利益』全篇とほぼ同じ字数である、『金華七変化』十五編・十六編、『西南雲晴朝東風』上中下巻の漢語と対照し、『御産池龍女利益』と『金華七変化』に共通する漢語には「○」印を、『御産池龍女利益』と『西南雲晴朝東風』に共通する漢語には「◎」を、三つの草双紙すべてに共通する漢語には「●」を附した。

仮名主体の草双紙に現れる漢語は主に仮名で書かれているので、一覧表にあげた【漢字】は、語の判別のために、主に現行の漢字をもって便宜的に漢字表記し掲載したものである。また、【本文】には草双紙に使われた仮名遣いをそのまま表示しているが、同じ草双紙中でも仮名遣いは統一されているということではなく、同じ語であっても「さうぞく」「そうぞく」のように異なる場合、また、「たいせつ」「大せつ」「ようじん」「よう人ん」のように漢字書き(註9)がまざることがある。【本文】にはそのうちの一例を提示している。

『御産池龍女利益』の漢語一覧(五十音順に示す。)

		8	安産	あんざん
	【漢字】	【本文】	9	● 案ず
1	● 挨拶	あいさつ	10	安堵
2	哀惜	あいじやく	11	意向
3	愛情	あいぜう	12	○ 委細
4	悪	あく	13	医者
5	○ 悪心	あくしん	14	威勢
6	○ 悪人	あく人	15	○ 以前
7	悪婦	あくふ	16	一途
				いちづ

17	一善	一ぜん	47	街道	かいどう
18	◎ 一人	いちにん	48	懷妊	くわいにん
19	◎ 一味	いちみ	49	◎ 介抱	かいほう
20	● 逸物	いちもつ	50	偕老	かいろう
21	違勅	みちよく	51	火急	くわきう
22	一家中	いっかちう	52	額	がく
23	一卷	いくわん	53	● 覚悟	かくご
24	一決	いっけつ	54	家財	かざい
25	◎ 一刻	いっこく	55	加増	かぞう
26	一散	いっさん	56	◎ 加担	かだん
27	◎ 一心不乱	いっしんふらん	57	◎ 家中	かちう
28	一睡	いすい	58	合体	がつたい
29	● 一旦	いったん	59	◎ 家督	かどく
30	一通	いっとう	60	◎ 家内	かない
31	一統	いっとう	61	果報	かほう
32	一匹	いっぴき	62	家老	かろう
33	一方	いっぽう	63	◎ 棺	くわん
34	◎ 衣服	いふく	64	寒氣	かんき
35	医療	いりよう	65	官女	くわん女
36	陰徳	いんとく	66	願書	ぐわんしょ
37	陰謀	いんぼう	67	◎ 顔色	がんしよく
38	音物	いんもつ	68	寛仁大度	くわんにたいど
39	雲竜	うんりやう	69	◎ 感(ず)	かんず
40	◎ 縁	ゑん	70	艱難	かんなん
41	閻魔	ゑんま	71	早魃	かんばつ
42	閻魔王	えんま王	72	元来	くわんらい
43	横領	おふりやう	73	觀樂	くわんらく
44	◎ 恩	おん	74	● 義	ぎ
45	温順	おんじゆん	75	帰参	きさん
46	◎ 懷中	くわいちう	76	希代	きたい

77	◎	貴殿	きでん	107	結構	けつこう
78	◎	奇特	きどく	108	血判	けつはん
79	○	祈念	きねん	109	家来	けらい
80		帰服	きふく	110	権威	けんゐ
81	◎	逆意	ぎやくゐ	111	厳寒	げんかん
82		急死	きうし	112	嚴重	けんぢう
83		九生身	九しやうじん	113	権柄	けんべい
84	○	恭悦	きやうゑつ	114	嚴命	げんめい
85		教化	きやうげ	115	光陰	くわういん
86		行跡	ぎやうせき	116	後見	こうけん
87	◎	兄弟	けうだい	117	孝行	かう／＼
88		綺羅	きら	118	高座	かうざ
89		義理	ぎり	119	耕作	かうさく
90		気力	きりよく	120	降参	かうさん
91	◎	近国	きんこく	121	後室	こうしつ
92	○	近習	きんじゆ	122	孝心	こうしん
93		金子	きんす	123	口論	こうろん
94		欽定	きんてい	124	刻	こく
95		苦痛	くつう	125	国賊	こくぞく
96		屈(す)	くつす	126	御所	ごしよ
97		工夫	くふう	127	小姓	せうせう
98		供養	くよう	128	御錠	御じやう
99		君恩	くんおん	129	御膳	御ぜん
100		勲功	くんこう	130	御前	ごぜん
101	○	気	け	131	御膳番	御せんばん
102		稽古	けいこ	132	五体	ごたい
103		警固	けいこ	133	乞食	こつじき
104		刑罰	けいばつ	134	忽然	こつせん
105	◎	怪我	けが	135	牛頭午頭	牛頭午頭
106		懸想	けむう	136	御殿	ごてん

137		後日	ごにち	167		指南	しなん
138	●	御免	こめん	168		慈悲	じひ
139		今生	こんせう	169		始末	しまつ
140		言上	ごん上	170		自慢	ぢまん
141		懇切	こんせつ	171		杓	しゃく
142	●	今日	こんにち	172	○	癩	しゃく
143	○	才	さい	173	○	尺	尺
144		再会	さいくわい	174		邪身	じやしん
145		再興	さいこう	175		邪智	じやち
146		妻女	さいぢよ	176		娑婆	しやば
147		在所	さいしよ	177		邪魔	じやま
148	○	早足	さそく	178		衆	しゆう
149	●	早速	さつそく	179		衆悪	しうあく
150		左右	さゆう	180		重々	ぢゆうく
151	○	産	さん	181		住所	じゆうしよ
152		三界	さんがい	182		愁傷	しうせう
153	◎	参詣	さんけい	183		衆善	しうぜん
154		讒言	ざんげん	184	●	祝(す)	しゆす
155		産後	さんご	185	○	守護	しゆご
156		讒者	ざんしや	186		酒色	しゆしよく
157	●	残念	ざんねん	187	○	主人	しゆじん
158		産婦	さんふ	188		手跡	しゆせき
159		死骸	しがい	189		出家	しゆつけ
160		仕官	しくわん	190	○	出仕	しゆつし
161		地獄	ぢごく	191	○	樹木	じゆもく
162		死罪	しざい	192		手裏剣	しゆりけん
163		時節	じせつ	193		諸	しよ
164	○	次第	しだい	194		錠	じやう
165	◎	支度	したく	195		將軍	せうぐん
166		執権	しつけん	196		証拠	せうこ

197	定業	じやうぎよう	227	◎	精	せい
198	障子	しやうじ	228		姓	せい
199	上使	じやうし	229	◎	成人	せいじん
200	生(ず)	せうず	230		正統	しやうとう
201	装束	しやうぞく	231		石塔	せきとう
202	上段	上だん	232		殺生	せつせう
203	承知	せうち	233	◎	是非	ぜひ
204	松柏	松柏	234	●	世話	せわ
205	妾腹	しやうぶく	235		善	ぜん
206	食	しよく	236	●	詮議	せんぎ
207	食事	しよくじ	237	●	前後	ぜんご
208	諸国	しよこく	238		詮索	せんさく
209	所士	しよ士	239	○	前世	ぜんせ
210	所持	しよち	240		先祖	せんぞ
211	諸処	しよく	241		善人	ぜんにん
212	女中	女中	242		先年	せんねん
213	所領	しよりやう	243	◎	相続	そうぞく
214	思慮	しりよ	244		騒動	そうどう
215	瞋恚	しんい	245		双方	そうほう
216	深淵	しんゑん	246		属(す)	ぞくし
217	心願	しんぐわん	247		蘇生	そせい
218	親切	しんせつ	248		訴人	そにん
219	親族	しんぞく	249		鼠輩	そはい
220	身体	しんたい	250		尊骸	そんがい
221	身中	しんぢう	251		尊敬	そんきやう
222	震動	しんとう	252		存命	ぞんめい
223	身命	しんめい	253		大恩	大おん
224	心労	しんろう	254		代官所	大くわんしよ
225	推挙	すいきよ	255		大罪人	大ざいにん
226	水中	すいちう	256		大蛇	大じや

257	○	大切	たいせつ	287	◎	敵(す)	てきす
258	◎	大胆	大たん	288		天	てん
259		大敵	大てき	289		田	でん
260	◎	対面	たいめん	290		天蓋	てんがい
261		大望	たいもう	291		田地	でんち
262		他出	たしゅつ	292		天道	てんとう
263	◎	達(す)	たつす	293		土	ど
264		談(ず)	だんず	294		堂	どう
265	◎	嘆息	たんそく	295		同音	どうおん
266	◎	旦那	だんな	296		当家	とうけ
267		地	ち	297		当主	たうしゅ
268		逐一	ちくいち	298		盜賊	とうぞく
269		逐電	ちくてん	299		到着	とうちやく
270	○	忠義	ちうぎ	300		道理	どうり
271		忠孝	忠孝	301		当惑	とうわく
272	●	忠臣	ちうしん	302		等	とう
273		誅(す)	ちうす	303		徳	とく
274		忠節	忠せつ	304	○	毒	どく
275		誅戮	ちうりく	305		毒害	どくがい
276		調合	てうかう	306		毒殺	どくさつ
277	○	提灯	てうちん	307		毒藥	どくやく
278		張本	ちやうぼん	308		吐血	とけつ
279		長命	長命	309	○	土地	とち
280		勅命	ちよくめい	310		途中	とちう
281		珍事	ちんじ	311		土中	どちう
282	○	追善	つひぜん	312		徒党	とどう
283		追伐	つひばつ	313		遁世	とんせい
284		通力	つうりき	314	●	難儀	なんぎ
285	●	体	てい	315		日々	にち／＼
286	○	亭主	ていしゅ	316		日夜	にちや

317	◎	女房	女ぼう	347	○	不意	ふゐ
318		人間	にんげん	348		風	ふう
319	○	佞人	ねいじん	349		夫婦	ふうふ
320		年	年	350		不覚	ふかく
321		年貢	ねんぐ	351		袱紗	ふくさ
322		年月	ねんげつ	352		腹心	ふくしん
323		念(ず)	ねんじ	353	◎	武芸	武けい
324		農業	のふぎやう	354		無事	ぶじ
325		徘徊	はいくわい	355	●	不思議	ふしぎ
326		拝(す)	はいす	356		武将	ぶせう
327		拔群	ばくくん	357	○	不審	ふしん
328		発向	はつかう	358		布陣	ふじん
329		罰(す)	ばつす	359		父祖	ふそ
330	◎	番	ばん	360		扶持	ふち
331		判官	はんぐはん	361		不忠	ふちう
332		反逆	ほんぎやく	362		武備	ぶび
333		半国	はんこく	363	○	不便	ふびん
334		万歳	ばんぜい	364		無礼	ぶれい
335		万事	ばんじ	365		分	ぶん
336		藩中	はんちう	366		紛失	ふんじつ
337		繁忙	はんぼう	367		文武	ぶんぶ
338		美人	びじん	368	○	塀	へい
339	○	悲嘆	ひたん	369	◎	辺	へん
340		必定	ひつじやう	370	○	変化	へんげ
341		皮肉	ひにく	371		片時	へんし
342		非人	ひにん	372		変死	へんし
343	◎	百姓	ひせう	373	◎	返事	へんじ
344		病人	びやうにん	374		弁天	べんてん
345		披露	ひろう	375		返答	へんたう
346		不案内	ふあんない	376	●	方	ほう

377		奉公	ほうこう	407		野心	やしん
378	○	茫然	ぼうぜん	408	○	夜中	やちゆう
379		宝蔵	ほうぞう	409		遺言	ゆひけん
380		菩提	ぼだい	410		勇	ゆう
381		菩提所	ぼだいしよ	411		幽霊	ゆうれい
382		発起	はつき	412	◎	油断	ゆだん
383		没落	ぼつらく	413		要	やう
384		反逆	はんぎやく	414	●	様	やう
385		末期	まごゝ	415		容易	ようゐ
386		真向	まつこふ	416	●	用意	ようゐ
387		慢	まん	417		養育	よういく
388		満作	まんさく	418		容顔	ようがん
389		満足	まんぞく	419		用事	ようじ
390		満々	まん／＼	420		庸人	ようじん
391		密書	みつしよ	421	●	様子	やうす
392		密々	みつ／＼	422		養父	ようふ
393		無慚	むざん	423		埒	らち
394		無二	むに	424		卵塔	らんとう
395	◎	無念	むねん	425		利益	りやく
396		名画	めいぐわ	426		竜	りやう
397		名工	めいかう	427		立願	りうぐわん
398		鳴動	めいどう	428		龍女	りうじよ
399		免(ず)	めんず	429		龍神	りうしん
400		面体	めんてい	430		領	りやう
401	○	面々	めん／＼	431		両	両
402		亡者	もふじや	432		領主	りやうしゆ
403		沐浴	もくよく	433		領分	りやうぶん
404	○	模様	もやう	434		料理人	りやうり人
405	○	門前	もんぜん	435		慮外	りよぐわい
406		菓酒	やくしゆ	436		旅宿	りよしゆく

437	愔気	りんき	443	連判帳	れんばんてふ
438	○ 臨月	りんけつ	444	浪人	らうにん
439	靈驗	れいげん	445	路銀	ろぎん
440	礼謝	れいしや	446	露頭	ろけん
441	● 列	れつ	447	路地	ろち
442	連判	れんばん	448	◎ 路用	ろよう

『金華七変化』十五編・十六巻編の漢語は、総数が七二七語、異なり数が四五四語、『西南雲晴朝東風』は、漢語の総数が七五二語、異なり数は四〇九語であつた。一覧表に○●の印をつけた漢語の合計は一一九語であるので、『御産池龍女利益』に使われている漢語と、『金華七変化』『西南雲晴朝東風』に使われている漢語は、二六・五%の重なり合いがあるということになる。「作品にあらわれた語いの類似度は、それらにおなじ用語がどのくらい共通しているかによつて、はかることができる」(宮島達夫「語いの類似度」『国語学』第八十二集 四十二頁)のであるが、この場合は漢語のみに注目しているので、作品そのものの類似度としてはかることは難しいが、「仮名書きされた漢語」が共通しているということに特化すれば、注目しておくべきことではある。これは、山田俊雄(一九七八)がいうところの「仮名で書いても、その語形だけで、その語が固定しうる状態に達していた語群」を抽出することになる。

先にとりあげた坪内逍遙『小説神髓』においては、「艸冊子體は雅俗折衷文の一種にして、その稗史體と異なる所以は、單に俗言を用ふることの多きと、漢語を用ふることの少きとにあり。」「漢語をつとめて除きたりしは、假名文字のみにて書きたるからに、読者が之れを読みたる時に解しがたからむかと思へばなるべし。且つや艸冊子といへるものは専ら幼童婦女子輩の玩弄ぐさに供せしものゆゑ、つとめて漢語を除きたりしもまた當然の事といふべし。」と書かれている箇所があつたが、実際に草双紙の漢語をとりだしてみると、かなりの数の漢語が使われているといえる。

新日本古典文学大系 83『草双紙集』(一九九七年 岩波書店)の解説である宇田敏彦「草双紙の誕生と変遷」には、「文章は依然として丸仮名を使用して書かれた。丸仮名は漢語の使用を前提としない日常語による表現に適した文字遣いであるが、黄表紙作者はこれを逆手に取つて、漢語をふんだんに用いている点には注目する。いったい作者たちはどのような

な効果を期待して、こうした奇妙な表現法を多用したのだろうか。」と書かれている箇所がある。どのような調査をもってこのように書かれているのかはわからないが、草双紙に漢語が「多用」されているということを挙げている。

この草双紙の漢語語彙が、どのような漢語であるのかということについては第四章において述べることとし、ここでは草双紙の漢語を概観するということにとどめておく。

第三章 漢字仮名交じり文で書かれた草双紙

第一節 明治式草双紙の体裁・本文

『高橋阿傳夜叉譚』『嶋田一郎梅雨日記』明治十二年

次に、草双紙のうち、明治期に入ってから刊行されるようになった、漢字仮名交じり文＋振仮名で書かれている「明治式」の草双紙についてみていく。

明治十一年に刊行された久保田彦作『鳥追阿松海上新話』とりおいおまつかいじょうしんわを筆頭に、漢字仮名交じり文に振仮名を施した体裁で刊行されはじめたとされているが、明治十二年に刊行されたいわゆる毒婦物の草双紙である『高橋阿傳夜叉譚』たかはしおでんやしやものがたり（仮名垣魯文作、守川周重画）もその明治式の体裁になっている。全八編二十四冊。『高橋阿傳夜叉譚』は初編の本文のみ、活字で印刷されており、そのことがしばしば注目される。その事情については『明治開化期文学集

(二)』（明治文学全集2 一九六七年 筑摩書房刊）の解題に「この作品が、横山町の金松堂（嘉永五年、地本双紙問屋本組に加入）から刊行予定のところ、おなじ題材を、新興出版社たる島鮮堂（明治元年開業）が、芳川春濤、岡本勘造綴により「其名も高橋 毒婦の小傳 東京奇聞」と題して発刊することになったため、出版をいそいだ金松堂では、あらかじめさし絵の木版を彫刻させておき、魯文に二日間で書かせた本文を活版刷りにして、二月十三日に初編を刊行した。それに対して、「東京奇聞」の初編は、二月十一日すでに発売されていた。」

「主人公の高橋お傳が、市ヶ谷監獄刑場において処刑されたのが、明治十二年一月三十一日であり、初編の刊行が、二月十三日というのであるから、際物とはいっても、その早手まわしであつたことはおどろくべきものがあつた。」と説明されている。しかし、この初編以外は木版刷りであるので、明治式草双紙として扱うこととする。木版刷りである三編上の翻字を示す。

『高橋阿傳夜叉譚』三編上

つゞき

傍へに

侍らし酒

宴を

開き

酒に

あか

すも

毎度

なりしが或夜奴僕の逸平が

藩邸よりむかひに來たり主人

にまをしいるゝ義ありといふ

を聞きて逸平を酒宴の

席へうち招きいかなる

事と問ふに應じ逸平は

席を進みしばしの間女

ばらを退け給へとその場を

去らしめ懷中より

女の文切斷を▲

▲取いだし

旦

那

是

を

看給ふべしと

渡すをとつて読▲▲

▲▲下

すに

「まことに過し夜はかはし
そめまいらせしに枕の×

×程もなく

おき別れ

まいらせ甲

斐なき床

にとゞまりそろ●

●妾が心のうち

おしはからせ給へ

かし猶うつ

り香は

袖に残り

などしか

ぐと

書たる

中すね

たる松まつ

より紫むらさきの

由縁ゆかり

もとめ

て

宿やど

の

花はなと

詠ながめなど

いまはしきこと

聞きこ侍りなど

しるしあれば鉄弥てつやは

いぶ次つぎへ

妾せう

を

娶めとり

明治期に入ってから、仮名主体で書かれる草双紙も、挿絵のまわりをびっしり仮名が埋めるというような体裁ではなく、字が大きくなり、余白が多くなっているものがあるが、明治式草双紙の場合も、挿絵のまわりに余白がある丁が多い上、一字一字が大きく書かれている。漢字仮名まじり文で書いたところに振仮名を施してあるので、行間はひろくとられている。ほとんどの漢字に振仮名が振ってあるが、振られていないものもある。しかし状態はかぎりなく総振仮名に近いといって良いと思われる。絵が左右の丁を合わせて見開き一場面とみた構図で描かれているところは、仮名主体の草双紙と変わらない。

明治式草双紙の振仮名について、今野真二『二つのテキスト（下）明治期の文献』（日本語学講座第五巻 二〇一一年 清文堂刊）では、「江戸期の草双紙には振仮名が（ほとんど）みられなかったために、明治期の草双紙をみると、その振仮名に注目したくなるが、漢字を使用していなければ振仮名の必要がそもそもないのであって、「ふり仮名つき漢字」ということではなくて、漢字を多く使用したために、必然的に振仮名を施すことになった」という「道筋」も考えておかねばならない。」と述べられている。

これまで仮名主体で書かれてきた草双紙を、漢字仮名まじり文で書くということは、草双紙を書く「表記体」が変更されたということになる。

草双紙というならば、仮名主体で書かれていたものを、漢字仮名まじり文で書くとき、一番大きな違いは、漢字を多く使用する（ことができる）ということになる。漢字を多く使用するならば、語を書くときに、仮名で書くか漢字で書くかという選択肢をもつことができる。しかし、明治式草双紙の場合は、漢字で書いた語であっても、そのほとんどに振

仮名を施している。田島優「振り仮名と漢字表記との関係の処理について」『日本語の文字・表記―研究会報告論集―』二〇〇二年 国立国語研究所) には「振り仮名の語が本文であって、その語にどのような漢字表記を用いるかによって、意味の豊かさや違いを出そうとしているのである。したがって、振り仮名から漢字表記を見る立場、すなわちどうしてそのような漢字表記を用いたのかという、書記的な立場からの処理を施すのが適切なのである。」(九十一頁)とある。明治式草双紙のように漢字仮名まじり文+(総) 振仮名で書かれているものを「振り仮名の語が本文」とみるならば、振仮名は仮名で書かれているので、本文は「仮名書き」であると見ることできる。振仮名の機能がどのような場合でもそのようにあるとは言いきれず、振仮名には使用される場面ごとにさまざまな機能があると思われるので、このような見方は粗いが、仮名主体で書かれた草双紙と、漢字仮名まじり文で書かれた草双紙の本文比較をしてみることによって、表記体が変わるということが、日本語にどのような変化をもたらすか、あるいはもたらさないのかということを探ることができると思われ、興味深い。そもそも漢字仮名まじり文で書かれる明治式草双紙についての日本語学における先行研究はほとんどないと思われるので、まずはこのような草双紙をとりあげることにも意義があると思われる。本稿では主に漢語について比較をおこなうが、今後このような資料群についての研究がのぞまれる。

明治式草双紙である、『しまだいちろうさみだれにつき嶋田一郎梅雨日記』(以下『梅雨日記』と略称)は『明治開化期文学集(二)』に翻字が掲載されている。その解題によると「木版刷りの明治式合巻。五編十五冊。芳川春濤撰。岡本起泉綴。櫻齋房種畫。初編は明治十二年七月十五日、五編は同年十二月十二日刊。柱題は、「島田初上」(註10)のごとくなっている。丁数は各九丁。版元は、浅草瓦町十二番地、島鮮堂、綱島亀吉。この作品は、大久保利通暗殺者の島田一郎一代記を、芸者梅吉ほかの女性たちのからむくだりに潤色ぶりはみられるにもせよ、実に近いものとしてえがいている点において、この時代の特色たる実録的傾向を代表する作品の一つであったことはまちがいない。」とある。ここにおいても「明治式合巻」という呼称が使われている。

『しまだいちろうさみだれにつき嶋田一郎梅雨日記』初編下 二丁裏く三丁表

めいすう命数にや重兵衛は

つゞき定まる

六十一を一期として又来る

春も待またず其年の冬の末すゑ

あへなくなりしかば一郎は留とどめ

かねたる涙なみだを片手かたてに埋葬とりおき

等も方とうの如く七日かた／＼の間弔とひとむら

ひ迄も懇ねんごろに済すまし忌いみおも

爰こゝに果はてたれば今ははや父母

とて此世いまに在いまさねば遠とほく繁華はんくわ

な東京へ趣かねむき兼しぐわんて志願しの

学文がくもんを修行しゆぎやうして智識ちしきを廣ひろめ

事を成なさんと思おもひたち先其事そのこと

を小次郎うちあかに打明うちあかしけるに小次郎も

疾とくより其志そのこころざししありとの事に■

■ 両人りやう初はじめて心を決けつし

小次郎ちゝは父金十郎こに乞こふて

其許そのゆるしを受早速うけさつそくその○

○心構がまへをぞ

なしたりける

今此兩人かが斯かく

出京しゆっきやうを思おもひ立たしも

畢竟ひつぎやう此このほどからして

舊同藩きうどうはんの若者わかもの共どもは

甲乙たれかれとなく故郷こきやうを立

去すでり既すぎに杉村脇田わきた図

図等らの親しん

友いうも大坂

又は東京へ

寄留きりうせしが

故ゆゑに彼等かれらに劣おとらぬ

様都会やうとくわいに出て勉べん

強きやうせんと思おもへばなり

○爰こゝにまた同

縣けんの士族しぞくに

森茂道もりしげみちと

いふ者あり

二人ふたりの娘むすめを

持もてるが

姉あねを文ふみ

子ことよび

妹いもは綾子あやことて

まだ漸やうやく二八

を越こせし計はかり

なるが此乙女おとめは

双方さうだんの親々おやが

相談さうだんして末はは

小次郎ちゝに妻めあは

せんと豫約いひなづけせし

中ななるを綾子あやこは疾とくに母はは

親おやから聞きにつけても恥はづ

かしく兼て心に次へ

『高橋阿傳夜叉譚』たかはしおでんやものがたりに比べると、いくらか振仮名が振られていない漢字があるようである。振仮名が振られていない語をみてみると、固有名詞、「六十一」「七日」などの漢数字が入る語、「今」「心」などの画数の少ない漢字であり、また、引用箇所りやうの「兩人」は「人」部分には振仮名がない。これは仮名主体の草双紙が「りよう人」と書いている例と、通っているのとみることができる。これらの「振仮名が振られない漢字」は、仮名主体の草双紙に「漢字で書かれる語」とほぼ一致する。漢字仮名交じり文で書かれた草双紙の振仮名部分を本文とし、漢字部分を除いたものが、仮名主体の草双紙の本文に近いということになる。試みに『梅雨日記』を仮名に置き換えて示してみる。

(a) 明治五年の三月初め時節はじ じせつよければ急いそがぬ旅たびとて所々の古跡しよゝ こそきや名所めいしよを訪ひ日数重ひかずかさねて漸々やうゝ かに あゆと蟹の歩みの横濱よこはまへ着しあづく四五日逗留たうりうして出京しゅつきやうせんと

(初編下七丁オモテウラ・改行省略)

(b) 明治五年の三月ははじめじせつよければいそがぬたびとてしよゝのこそきやめいしよをとひひかずかさねてやうゝとかにのあゆみのよこはまへちやくし四五日たうりうしてしゅつきやうせんと

たとえば「時節 じせつ」は仮名主体の草双紙である『金華七変化』きんかしちへんげ十九巻では「じせつのいたるをまちゐたるは」「二十一巻「じせつをまてよおりあらばめいしださんと」、二十三巻「なにとぞじせつを見はからひ」などと使われ、仮名書きされている。「三月」「四五日」は『梅雨日記』では振仮名が振られていないが、仮名主体の草双紙ではほとんどの場合、漢字で書かれている。

草双紙が刊行された同時期、漢字仮名交じり文で書かれる表記体が一方にあることに對して、仮名主体の草双紙というのは、当該時期の日本語を書く表記体としては少々特殊なものであるように思われる。しかし仮名主体の草双紙と漢字仮名交じり文の草双紙は、振仮名の有無に注目してみると、表記体が異なるだけで、その質は同じものであるとみることができる。次節においてさらに検証する。

第二節 明治式草双紙の漢語

仮名主体で書かれている草双紙にも、少なからず漢語が用いられていることは先に述べた。仮名主体の草双紙は、草双紙として仮名で書くということを前提に書かれていると思われるので、漢語であつてもそのほとんどが仮名で書かれている。先に引用した山田俊雄『日本語と辞書』にも、「ある語が漢字表記を通常とするのは、その語が観念語であることが一つの条件である。また、その語が字音語であることが第二の条件である。(中略)漢語・字音語は、右の二つの条件をもつとも典型的にそなえているから、十中九まで漢字表記をよしとする慣習である。」(二三八頁)とあるように、本来漢語は漢字で書かれるのが自然なかたちであると思われる。漢語も仮名で書かれている「漢語の漢字離れ」(同二四一頁)状態になっている仮名主体の草双紙と、漢語が「通常」のように漢字仮名交じり文で書かれている明治式の草双紙では、どのように漢語が使われているのか対照してみたい。

明治式草双紙の漢語として、『梅雨日記』初編上中下・二編上中下に使われている漢語を採集し、そのうち、異なり四九五語を五十音順に挙げる。漢語の総数は七六〇語であつた。【一覧表】の「漢字」は『梅雨日記』で使用されている漢字列、「振仮名」はその漢字列に振られている振仮名を示す。漢字字体は適宜現行の漢字に改めた。本文中で振仮名が漢字列の一部にしか振られていない語(「不覚」^{かく}など)においても漢語と認められ得る場合は採取した。

さらに、仮名主体で書かれた草双紙の漢語と対照し、その語が仮名主体の草双紙にも使われている語である場合には○印を附した。仮名主体の草双紙に使われている漢語は、文政十一(一八二八)年刊行の『御産池龍女利益』前篇・後篇の二巻と、万延元(一八六〇)年から明治三(一八七〇)年までの間に刊行された『金華七変化』のうち、十三〜十六編、十九〜二十三編、二十八〜三十一編の計十三巻、明治十一(一八七八)年刊行の『西南雲晴朝東風』上・中・下の三巻に使われた漢語であり、総数は六〇四〇語、その異なり数二〇五一語と対照した。

【一覧表】

【漢字】	【振仮名】	○2	愛敬	あいけう
1 愛	あい	○3	挨拶	あひさつ

○4	愛想	あいそ	34	一新	いつしん
5	愛着	あいじやく	○35	一心不乱	いつしんふらん
6	暗	あん(に)	○36	一声	いつせい
7	暗愚	あんぐ	37	一体	いつたい
○8	安心	あんしん	○38	一杯	いつぱい
○9	案	あん(じ)	39	一発	いつぱく
○10	案内	あんない	40	一服	いつぷく
○11	意	い	○41	因果	いんぐわ
12	異儀	いぎ	○42	因縁	いんえん
13	異見	いけん	43	鬱気	うつき
○14	意見	いけん	44	運動	うんどう
○15	医者	いしや	45	会釈	ゑしやく
○16	衣裳	いしやう	46	栄耀	えよう
17	維新	ゐしん	47	縁	えん
18	異人	いじん	48	縁者	えんじや
○19	以前	いぜん	○49	遠慮	ゑんりよ
○20	一時	いちじ	50	王化	わうくわ
21	一賊	(一)ぞく	51	恩儀	おんぎ
○22	一同	いちどう	52	恩人	おんじん
○23	一念	いちねん	53	改革	かいかく
○24	一別以来	いちべついらい	54	懐剣	くわいけん
25	一面	いちめん	55	改心	かいしん
○26	一見	いつけん	56	快晴	くわいせい
○27	一個	いっこ	○57	懷中	くわいちう
28	一向	いつかふ	○58	介抱	かいほう
○29	一献	いつこん	59	餓鬼大将	がきだいしやう
30	一切	(一)さく	60	稼業	かげふ
○31	一子	いっこし	61	各藩	かくはん
○32	一所	いっしょ	62	学文	がくもん
○33	一生懸命	いっしょうけんめい	63	過激	くわげき

○64	家財	かざい	○94	虚	きよ
65	過日	くわじつ	○95	教育	けうゐく
○66	加勢	かせい	96	恐縮	きやうしゆく
67	華族	くわぞく	○97	行跡	ぎやうせき
68	活発	くわつぱつ	○98	兄弟	きやうだい
○69	合点	がてん	99	玉顔	ぎよくぐわん
○70	家内	かない	100	局中	きよくちう
71	官員	くわんめん	○101	去年	きよねん
○72	官途	くわんと	102	居留地	きよりうち
73	看板	かんばん	103	寄留	きりう
○74	看病	かんびやう	○104	気力	きりよく
○75	元来	ぐわんらい	○105	議論	ぎろん
○76	機	き	○106	勤仕	きんじ
○77	義	ぎ	107	近所	きんじよ
78	危急	きゝふ	108	苦	く
○79	奇遇	きぐう	○109	愚痴	ぐち
80	気苦勞	きぐらう	○110	苦痛	くつう
○81	帰国	きこく	○111	屈	くつ(し)
82	気象	きしやう	○112	苦勞	くらう
83	帰	き(す)	113	芸妓	げいぎ
○84	祈誓	きせい	○114	稽古	けいこ
85	帰省	きせい	○115	境内	けいだい
86	汽船	きせん	116	輕薄	けいはく
○87	貴殿	きでん	○117	気色	けしき
88	危難	きなん	○118	景色	けしき
89	気分	きぶん	119	下宿	げしゆく
90	旧	きう	120	下駄	げた
91	救護	きうご	○121	決	けつ(し)
92	旧習	きうしう	122	下坂	げはん
93	旧幕	きうばく	123	縣	けん

124	剣道	けんだう	○154	早速	さつそく
○125	見物	けんぶつ	155	茶店	さてん
126	強	がう	○156	左右	さいう
127	厚意	こうい	○157	左様	さやう
○128	後悔	こうくわい	158	産婆	さんば
129	交誼	かうぎ	○159	産婦	さんぷ
130	效驗	こうげん	160	散歩	さんぽ
○131	強情	がうじやう	161	市街	しがい
132	好天氣	かう(天)き	162	志願	しぐわん
133	港内	かうない	○163	仕義	しぎ
134	高論	かうろん	○164	死去	しきよ
135	枯魚	こぎよ	○165	地獄	ぢごく
136	故郷	こきやう	○166	仔細	しさい
137	刻苦	こくく	167	自恣	じし
138	古跡	こせき	○168	事情	じじやう
○139	御免	ごめん	○169	時節	じせつ
○140	懇意	こんい	○170	自然	しぜん
141	婚儀	こんぎ	○171	士族	しぞく
○142	混雜	こんざつ	○172	次第	しだい
○143	言上	ごんじやう	173	時代	じだい
○144	今度	こんど	○174	支度	したく
○145	坐	ぶ	175	七夜	しちや
146	際	さい	176	失敬	しつけい
147	才氣	さいき	177	実子	じつし
○148	在勤	ざいきん	178	実直	じつちよく
○149	再三	さいさん	179	実貞	じつてい
150	災難	さいなん	○180	嫉妬	しつと
151	財布	さいふ	181	慈童	じどう
○152	祭礼	さいれい	○182	慈悲	じひ
○153	察	さつ(し)	○183	自分	じぶん

○184	四方	しはう	○214	正気	しやうき
185	事務	じむ	215	床机	せうぎ
186	社頭	しやとう	○216	証拠	しやうこ
○187	自由	じゆう	217	正午	しやうご
188	主家	しゆうか	○218	定業	ぢやうごう
○189	祝言	しうげん	○219	障子	しやうじ
190	秀才	しうさい	220	少々	せう々々
191	周旋	しうせん	221	小身	せうしん
○192	十分	じふぶん	222	賞	しやう(す)
○193	酒宴	しゆえん	○223	乗	じよう(じ)
○194	修行	しゆぎやう	224	状態	しやうたい
○195	宿所	しゆくしよ	225	上達	じやうたつ
○196	祝	しゆく(す)	○226	承知	しようち
○197	宿場	しゆくば	227	昇等	せうとう
198	種々	しゆ々々	○228	城内	じやうない
199	手段	しゆだん	○229	小児	せうに
200	出京	しゆつきやう	230	聖霊	しやうりやう
○201	出産	しゆつさん	○231	書翰	しよかん
○202	出仕	しゆつし	○232	食事	しよくじ
203	出世	しゆつせ	○233	所持	しよぢ
204	出精	しゆつせい	234	所々	しよ々々
205	出立	しゆつたつ	235	女色	ぢよしよく
○206	出張	しゆつちやう	○236	書生	しよせい
○207	首尾	しゆび	○237	初夜	しよや
○208	樹木	じゆぼく	○238	思慮	しりよ
○209	手練	しゆれん	239	瞋恚	しんい
○210	情	じやう	240	信誼	しんぎ
○211	城下	じやうか	241	心志	しんし
○212	生涯	しやうがい	242	心中	しんぢう
213	紹介状	せいかいじやう	243	親切	しんせつ

○244	親族	しんぞく	○274	全体	ぜんたい
○245	心頭	しんとう	275	先方	せんほう
246	神童	しんどう	276	前夜	ぜんや
247	人道	じんだう	○277	相應	さうおう
248	心配	しんぱい	278	葬式	そうしき
249	親友	しんいう	○279	相談	さうだん
○250	吹擧	すみきよ	○280	騒動	さうどう
○251	随分	ずるぶん	○281	双方	そうほう
○252	素性	すじやう	282	賊	ぞく
253	精勤	せいきん	283	即座	そくざ
254	政權	せいけん	○284	賊徒	ぞくと
255	性質	せいしつ	285	卒族	そつぞく
256	星霜	せいさう	○286	尊敬	そんけい
257	成長	せいちやう	○287	存	ぞん(じ)
258	制度	せいど	288	大改革	だいかいかく
259	西洋館	せいやうくわん	289	大喝	だいかつ
○260	世間	せけん	○290	大事	だいじ
○261	切	せつ	○291	対	たい(し)
262	絶佳	ぜつか	○292	大切	たいせつ
263	折角	せつかく	○293	大層	たいそう
○264	折檻	せつかん	294	代々	だい々々
○265	拙者	せつしや	○295	大抵	(大)てい
○266	説得	せつとく	296	退転	たいてん
○267	是非	ぜひ	297	大病	たいびやう
○268	世話	せわ	298	泰平	たいへい
269	詮	せん	299	大名	だいまやう
○270	嬋娟	せんけん	300	大名衆	だいまやうしゆう
○271	先生	せんせい	○301	宅	たく
272	全盛	ぜんせい	○302	他事	たじ
○273	先祖	せんぞ	303	多少	たせう

○304	達	たつ (せし)	334	同縣	どうけん
305	脱	だつ (す)	335	同宿	どうしゆく
○306	旦那	だんな	○336	当地	たうち
307	智恵	ちゑ	337	道中	だうちう
308	智識	ちしき	○338	同道	どうだう
○309	着	ちやくす	339	同藩	どうはん
310	忠勤	ちうきん	○340	当分	たうぶん
311	忠告	ちうこく	341	登庸	とうよう
312	忠実	ちうじつ	○342	同様	どうやう
313	中年	ちうねん	○343	道理	だうり
314	注文	ちうもん	344	逗留	たうりう
315	長官	ちやうくわん	345	都会	とくわい
316	長家	ちやうけ	346	読書	どくしよ
○317	調子	てうし	347	得心	とくしん
○318	灯燈	てうちん	348	渡世	とせい
○319	朝廷	てうてい	○349	土地	とち
320	長途	ちやうど	350	徳利	とつくり
321	帳場	ちやうば	○351	途方	とはう
322	眺望	てうばう	352	頓死	とんし
○323	随従	つゐしやう	353	内所	ないしよ
○324	通	つう (ず)	354	内心	ないしん
325	都合	つがふ	○355	内々	ない々々
○326	体	てい	356	内福	ないふく
327	天気	てんき	357	難	なん
328	伝言	でんごん	○358	難義	なんぎ
329	転進	てんじん	359	難産	なんざん
○330	等	とう	○360	男女	なんによ
331	同居	どうきよ	361	肉身	にくしん
○332	当家	たうけ	362	入費	にうひ
333	同家	どうけ	○363	女房	にようばう

○364	念	ねん	○394	不自由	ふじゆう
365	年功	ねんこう	○395	武術	ぶじゆつ
○366	陪臣	ばいしん	396	不首尾	(不)しゆ(尾)
367	廢	はい(し)	○397	不審	ふしん
○368	拝	はい(す)	○398	風情	ふぜい
369	發	はつ(す)	○399	不足	ふそく
370	藩	はん	400	浮沈	ふちん
371	繁華	はんくわ	○401	武道	ぶだう
○372	万事	ばんじ	402	無難	ぶなん
373	藩主	はんしゆ	403	府藩縣	ふはんけん
374	藩知事	はんちじ	○404	不便	ふびん
○375	藩中	はんちう	405	不本意	ふほんい
○376	万民	ばんみん	○406	不量見	ふりやうけん
377	卑下	ひげ	○407	無礼	ぶれい
○378	非常	ひじやう	408	文学	ぶんがく
○379	畢竟	ひつきやう	409	文体	ぶんてい
○380	病氣	びやうき	○410	閉口	へいこう
○381	評判	ひやうばん	411	平生	へいぜい
382	便宜	びんぎ	○412	別嬪	べつぴん
383	貧苦	ひんく	413	勉強	べんきやう
○384	愍然	びんぜん	○414	変死	へんし
○385	不意	ふい	○415	返事	へんじ
○386	諷諫	ふうかん	416	返上	へんじやう
○387	夫婦	ふうふ	417	返報	へんぱう
○388	不覺	(不)かく	418	方角	はうがく
389	不勤	ふきん	419	謀計	ばうけい
○390	武家	ぶけ	420	方向	はうかふ
○391	武士	ぶし	421	奉公人	ほうこうにん
○392	無事	ぶじ	422	帽子	ばうし
○393	不思議	ふしぎ	423	砲術	はうじゆつ

424	朋友	はういう	454	猶豫	いうよ
425	僕輩	ぼくはい	455	遊歴	ゆうれき
426	没	ぼつ(し)	456	愉快	ゆくわい
○427	本意	ほい	○457	餘	よ
428	本音	ほんね	○458	様	やう
○429	煩惱	ぼんのう	○459	用意	ようい
○430	真向	まつかふ	○460	養育	やうぬく
○431	未熟	みじゆく	○461	用捨	やうしや
432	微塵	みちん	○462	養女	やうぢよ
○433	身分	みぶん	463	幼少	えうせう
434	明神	みやうじん	○464	用心	ようじん
○435	無常	むじやう	○465	様子	やうす
436	無造作	むざうさ	○466	容体	ようだい
○437	夢中	むちう	○467	養父	やうふ
○438	無二	むに	○468	容貌	ようぼう
○439	無念	むねん	○469	餘義	よぎ
○440	無理	むり	470	翌朝	よくてう
441	名所	めいしよ	471	餘光	よくわう
○442	命	めい(ず)	○472	来歴	らいれき
○443	命数	めいすう	473	離散	りさん
○444	迷惑	めいわく	○474	利発	りはつ
○445	面会	めんくわい	475	留学	りうがく
○446	面目	めんぼく	476	流儀	りうぎ
447	黙	もく(す)	○477	領	りやう(す)
448	目前	もくぜん	478	両君	りやうくん
449	家	や	○479	量見	りやうけん
450	約束	やくそく	○480	両人	りやう(人)
451	野臺	やたい	○481	料理	れうり
452	融通	ゆうづう	482	料理屋	れうりや
453	郵便	ゆうびん	483	緑林	りよくりん

○484	旅宿	りよしゆく	○490	老人	らうじん
485	旅人	りよじん	491	郎黨	らうだう
486	旅店	りよてん	○492	老婆	らうば
487	礼辞	れいじ	○493	老病	らうびやう
488	伶俐	れいり	494	老父	らうふ
489	練習	れんしふ	495	惑溺	わくでき

仮名主体で書かれた草双紙の漢語と対照したところ、『梅雨日記』に使われた漢語の異なる数四九五語のうち二四二語（四十八・八％）が一致した。約半数の漢語が、仮名主体の草双紙にも漢字仮名まじり文で書かれた草双紙にも使用されている漢語であるということになる。仮名主体の表記体であっても、漢字仮名まじり文の表記体であっても、草双紙を書く漢語語彙には重なり合いがあり、表記体の違いは漢語語彙に大きな影響を及ぼさないといえる。先に述べた、漢字仮名まじり文の草双紙で「振仮名が振られない漢字」が、仮名主体の草双紙に「漢字で書かれる語」であることも通っている。

このような一致度は一〇〇％をめざすものではない。使用された語彙（この場合は漢語に限るが）の重なり合いが「高い」とみる数値はどの程度であるのかということを示すことは難しいのではないかと思われる。

たとえば、草双紙以外の資料や、時代の異なる文学作品などの（漢語）語彙を同じような方法で抽出し、それらをそれぞれ比較して一致度を出し、その数値どうしを対照するなどすることができれば、今回の数値がどのような位置をしめる数値であるのかということ、を、より積極的に「評価」することができると思われる。

日本語の語彙として漢語をとらえたときには、漢語には（厳密にとらえることは難しいが）難易度のような差があり、漢語語彙の内部には層があるという考え方がとられることがある。草双紙の漢語を、あるひとまとまりの「漢語の層」という見方からとらえるならば、仮名主体の草双紙の漢語と明治式の草双紙の漢語は、同じ層の範囲内にあるとみることもできる一致度であるのではないかと考える。漢語の層については第四章において考察する。

第二章第三節で示した『御産池龍女利益』^{みぞろがいはりめうじよのりやく}の漢語は、前篇十五丁・後篇十五丁の計三十丁で漢語総数七九四語、異なり数四四八語であった。『梅雨日記』の漢語は、初編上中下、二編上中下各九丁ずつなので計五十四丁、漢語総数七六〇語、異なり数四九五語であり、

ほぼ同じ数の漢語を抽出するのに、『梅雨日記』は一・八倍の丁数を費やしていることになる。これは仮名主体の草双紙のほうで、漢字仮名まじり文で書かれる草双紙よりも、ぎつしりと文字を書いていることにより、一丁あたりの字数が多いためではないかと思われるが、漢字仮名まじり文で書かれる草双紙は、漢字を使うことによつてすべて仮名で書くよりも一文の長さを短くすることができる。

先に『御産池龍女利益』全体の字数は約二万一二〇〇字あり、漢語七九四語は字数に直すと二六九九字であつたので、全体の字数に対しての漢語の割合は十三%ということになると述べたが、同じように『梅雨日記』の漢語の割合を計算してみる。『梅雨日記』初編上中下、二編上中下の計五十四丁は約一万六七〇〇字である。仮名主体で書かれている草双紙の字数に合わせるために、漢字で書かれている語を「一期」↓「いちご」のように、仮名の字数に直す。たとえば先に引用した『梅雨日記』初編下の二丁裏く三丁表をとりあげて計算すると、文字数は四一六字、そのうち振仮名は二三七字、漢字は二〇〇字であるので、漢字で書いてある語を振仮名の仮名に直すと、漢字で書いた字数の約一・二倍の文字数になることになる。それを『梅雨日記』が仮名主体表記で書かれた場合の字数と仮にみなすと、一万六七〇〇字の一・二倍で二万四千字となり、仮名主体で書かれた『御産池龍女利益』三十丁の字数とほぼ同じになる。『梅雨日記』の漢語総数は七五七語、これを振仮名の仮名字数に直すと二七八三字となり、全体の字数に対しての漢語の割合は一三・八%ということになり、これもほぼ『御産池龍女利益』と一致する。つまり（仮の計算にすぎないが）漢語の使用頻度にもほぼ差がないとみてもよいと思われる。

第三節 漢字列と振仮名

文献に漢字で書かれている文字列に対して「漢字列」という用語を用いることがある。「漢字列」は今野真二『消された漱石―明治の日本語の探し方』（二〇〇八年 笠間書院）七十九頁においては、「文字（列）」に語としての資格、具体性を与えられない場合、あるいはそのような「段階」で、この文字（列）を「漢字列」とよぶことにすると、語を特定しないままでも観察、考察を続けられることになる。」と記されている。

ここでは草双紙に漢字で書かれている語を、その語がどんな語であるのか特定せず示すために「漢字列」という用語を用いる。「漢字列」という捉え方はどのようなテキストであつてもひとまずはそれを指し示すことができ、語の観察において有意義な見方であると

考える。また、これは、山田俊雄『日本語と辞書』（二十二頁）において「漢字語」と設定されている考え方に依るものであり、山田俊雄（一九七八）には「何と読むべきか確定できない漢字の熟語、時代によって、場合によって、読み方をさまざまに変えるけれども、見える文字連結としては、一定の文字列としての漢語を、むしろ音声言語風に還元して扱うことをやめて、全くの書記言語として、つまりは文字言語として扱う手を考えることである。つまりそれは、由来からすると中国語であろう、しかし日本人もつくり出す、えせ漢語もあるうから、すべて一括して扱うために、「漢字語」という枠を設定して、そこで一括して取扱う。和語は、いわば音声言語としての存在がみとめられ、『万葉集』の歌にも詠み込まれる。漢語は歌には排斥される伝統があった。「漢字語」というジャンルを設定することによって、上代語の辞書には圏外になるものをすべて収容するという方法がありうるであろう。それは、必ずしも臨時の便宜の方法とのみはいえないのである。むしろ、学問的な研究の方からの要請にも十分応じるものである。」とある。

この箇所を引用し、今野（二〇〇八）ではさらに「ここでは「漢字語」という表現が提示されているが、山田俊雄はむしろ「文字連結（文字列）」という表現をしばしば用いており、文字が連なった「文字連結」があつて、その文字が漢字であつた場合には、「漢字列」とよび、仮名の場合は「仮名列」とよぶことには充分に意義があると考える。（九十一頁）」と述べられている。また、「熟字」と言った場合には主に漢字二字以上の文字列をさすものと思われるが、漢字一字で書かれているものに対しても「漢字列」ということはできる。

明治式草双紙の漢字列は、ほとんどの漢字列に振仮名がふられている。そこにはいくつか漢字列と振仮名の組み合わせにパターンがあることがわかる。たとえば先の引用箇所であれば、「はんくわ繁華」「しぐわん志願」「わかももの若者」「おや親」のように、漢字列と振仮名の関係が漢字の音訓と一致しているもの、「とりおき埋葬」「いひなづけ豫約」のように、漢字列は「マイソウ」「ヨヤク」という漢語を表す漢字列であるのに対し、振仮名は「とりおき」「いひなづけ」という和語であるもの、引用範囲外だが「ふしぎ不測」のように、漢字列は「フソク」を表す漢語で、振仮名は別の漢語である「フシギ」が振られているような場合がある。

このような漢字列と振仮名の組み合わせは、草双紙特有のものではなく、漢字と仮名を使う資料であれば、歴史的にひろく行なわれてきている表記の方法である。草双紙の場合も、漢字仮名交じり文で書くという表記体を選択すれば、このような表記形式が現れるといえる。

今回明治式草双紙の漢語を採集するのの際しては、漢字列に振られた振仮名が漢語であ

る場合をあげた。「はんくわ繁華な東京へ」と書かれていた場合は「ハンカ」という漢語が作者によって選択され使われているのであり、「とりおき埋葬等も方の如く」では「とりおき」という和語が本文であり「マイソウ」は「草双紙の漢語語彙」として採集されないことになる。「埋葬」のように、ある漢語を表していると認め得る漢字列をここで便宜的に「漢語漢字列」と呼ぶこととする。振仮名が和語の場合は「和語振仮名」とする。

次に、このように「草双紙の漢語語彙」として採集されないが、明治期の草双紙に漢語漢字列として使われている例を『梅雨日記』から挙げる。

さらに、これらの漢語漢字列と和語振仮名の結びつきが、草双紙が刊行されていた明治期にはどのようなものであったのかをみるために、これらの語について、大槻文彦によって普通辞書として編集され、明治二十四年に刊行を終えた国語辞書『言海』をひいてみる。

漢字列は本文に使われている漢字、振仮名はその漢字列に振られているものを示す。言海は振仮名の語と、漢字列を音読みでみた場合、つまり漢語（字音語）ととらえた場合の語をひいた。へゝ内は、言海の見出し項目直下に置かれている漢字列、【】内は、言海の語釈末に置かれることのある「漢の通用字」（註11）をあげる。（ ）内は、語釈の一部を示す。項目がないものは「ナシ」と示す。

『梅雨日記』漢語漢字列＋和語振仮名

漢字列	振仮名	『言海』
1 接遇	あつかひ	あつかひ〈扱〉／せつぐうナシ
2 貴君	あなた	あなた〈彼方〉／きくん（アナタ）
3 合奏	あはせ	あはせ〈合〉／がつそう〈合奏〉（合ハセテ奏ヅルコト）
4 周章	あはて	あわつ〈周章〉／しうしやう〈周章〉
5 愍然	あはれ	あはれ〈哀〉／びんぜん〈憫然〉
6 大畧	あらまし	あらまし〈荒増〉／たいりやく〈大略〉（オホヨソ）
7 主人	あるじ	あるじ〈主〉（主人）／しゅじん〈主人〉（アルジ）
8 突然	いきなり	いきなり〈行成〉／とつぜん〈突然〉
9 端緒	いとぐち	いとぐち〈諸〉【端緒】／たんしよナシ
10 豫約	いひなづけ	いひなづけ〈言名付〉【許嫁】／よやく〈豫約〉
11 点頭	うなづき	うなづく〈項衝〉【點頭】／てんとう〈點頭〉（ウナツ

12	熟睡	うまゐ	うまい〈熟寝〉【熟睡】／じゆくすい〈熟睡〉
13	白粉	おしろい	おしろい〈白粉〉／はくふん〈白粉〉(オシロイ)
14	遂人	おつて	おつて〈追手〉／すいじんナシ
15	侠客	おとこ	をとこ【侠】／けふかく〈侠客〉ヲトコダテ
16	音信	おとづ(る)	おとづる〈訪〉(音信ナドニテ)【訪問】／おんしん〈音信〉(オトツレ)
17	戸外	おもて	おもて〈表〉／こぐわいナシ
18	記念	かたみ	かたみ〈形見〉【記念】／きねんナシ
19	首途	かどで	かどで〈門出〉【首途】／しゅと〈首途〉(カドデ)
20	面色	かほいろ	かほいろ〈顔色〉／めんしよく〈面色〉(カホイロ)
21	悸然	ぎよつと	ぎよつと／きぜんナシ
22	私語	さゝやく	ささやく〈私語〉／しご〈私語〉(ササヤクコト)
23	寒気	さむさ	さむさ〈寒気〉／かんき〈寒気〉(サムサ)
24	幸福	しあはせ	しあはせ〈仕合〉／かうふく〈幸福〉(シアハセ)
25	失敗	しくじつ(た)	しくじり【失敗】／しつぱい〈失敗〉(シクジリ)
26	知己	しるべ	しるべ〈知邊〉／ちき〈知己〉
27	容姿	すがた	すがた〈姿〉【形勢】／ようしナシ
28	納涼	すずみ	すずみ〈納涼〉／なふりやう〈納涼〉(スズミ)
29	戸外	そと	そと〈外〉／こぐわいナシ
30	佇立	たゝずみ	たたずむ〈佇〉／ちよりつ〈佇立〉(タタズムコト)
31	仮令	たとひ	たとひ〈仮令〉／けりやうナシ
32	掌中	たなそこ	たなそこ〈掌〉／しやうちゆう〈掌中〉
33	猶豫	ためらふ	ためらふ〈躊躇〉／いうよ〈猶豫〉(タメラフコト)
34	容易	たやすく	たやすし〈容易〉／よういに〈容易〉
35	縁因	ちなみ	ちなみ〈因〉／えんいんナシ
36	乳児	ちのみ	ちのみご〈乳呑児〉【乳児】／にうじナシ
37	一寸	ちよつと	ちよつと〈一寸〉／いつすんナシ
38	戸外出	とほ(出)	とほで〈遠出〉／こぐわいナシ
39	埋葬	とりおき	とりおき〈取置〉(葬ルコト)／まいさう〈埋葬〉

40	中央	なかば	なかば〈半〉／ちゆうあう〈中央〉
41	怠惰	なまける	なまける〈懶〉／たいだ〈怠惰〉(ナマケ)
42	営業	なりわひ	なりはひ〈生業〉／えいげふ〈営業〉(ナリハヒ)
43	旅舎	はたごや	はたごや〈旅籠屋〉／りよしやナシ
44	跣足	はだし	はだし〈跣〉／せんそくナシ
45	同胞	はらから	はらから〈同胞〉／どうはう〈同胞〉(ハラカラ)
46	再度	ふたたび	ふたたび〈再〉／さいど〈再度〉(フタタビ)
47	兩人	ふたり	ふたり〈二人〉／りやうにん〈兩人〉(フタリ)
48	故郷	ふるさと	ふるさと〈故里〉【故郷】／こきやう〈故郷〉(フルサ ト)
49	真情	まこと	まこと〈真〉／しんじやうナシ
50	仮眠	まどろ(む)	まどろむ【交睫】／かみんナシ
51	妊娠	みごもり	みごもる〈身籠〉／にんしん〈妊娠〉
52	誤認	みちがへ	みちがへナシ／ごにんナシ
53	看護	みとり	みとる〈見取〉／かngo〈看護〉(ミトルコト)
54	容兒	みなり	みなり〈身形〉／ようばう〈容貌〉
55	親族	みより	みより〈身寄〉【親族】／しんぞく〈親族〉
56	看客	みるひと	みるひとナシ／かんかくナシ
57	由縁	ゆかり	ゆかり〈縁〉／ゆえんナシ
58	蘇生	よみがへ(り)	よみがへる〈蘇〉(蘇生ス)／そせい〈蘇生〉(ヨミガ ヘルコト)
59	悪漢	わるもの	わるもの〈悪者〉【悪漢】／あつかんナシ
60	少女	をとめ	をとめ〈少女〉／せうちよナシ

これらは本文上、和語とみなすことになり、漢語を採集する際には取り上げられない語であるが、漢字列は漢語を書き表す漢字列であると言える。「突然」は漢語「トツゼン」を表す漢字列であり、「怠惰」は漢語「タイダ」を表す漢字列である。たとえば「突然」のよ
うに、漢語漢字列に和語の振仮名が振られているとき、振仮名となっている和語を、その漢字列が書いている状態とみるので、和語の扱いになる。しかし「突然」のように、漢語漢字列が振仮名を伴っていないければ(厳密には語形は決まっていらないことになるが)その

漢字列が漢語と見なされることはあるといえる。

草双紙にはこのような漢字列の形であられる漢語がある。しかしこの場合、和語を書くために選ばれた漢字列であり、漢字の文字列のみでは厳密には「語」とはいえないので「漢字列」としてその語がどんな語であるのか特定せずに示すが、振仮名がない場合、漢語と認められ得る（厳密には歴史的に漢語として使用されたと確認することができないものであるほうが望ましい）漢字列を「漢語漢字列」とするものである。

「突然」には「いきなり」という振仮名が振られている。『新潮国語辞典第二版』（一九九五年 新潮社刊）で「いきなり」を引くと、和語であることをあらわす平仮名で「いきなり【行（き）成（り）】」という項目があり、語釈には「㊦突然なこと。」とある。「トツゼン」を引くと、漢語であることを表す片仮名で「トツゼン【突然】」という項目があり、「前ぶれも予告もないさま。」とある。「いきなり」の語釈に「突然なこと」とあることから、「突然」は「いきなり」と語義的な結びつきがあるといえる。

明治式草双紙のように、振仮名を伴うことがあらかじめ想定された書き方がなされる場合、振仮名がその語形を明示するのだから、どんな漢字を使っても良いことになる。しかし、実際に漢語漢字列＋和語振仮名のかたちで現れる語は、その漢字列と和語に何らかの結びつきがあるということが自然なかたちであると思われる。

言海を引いた結果を見ると、「周章／あはて」「白粉／おしろい」「私語／さ々やく」「寒氣／さむさ」「納涼／すずみ」「仮令／たとひ」「容易／たやすく」「一寸／ちよつと」「同胞／はらから」「少女／をとめ」は『言海』の見出し項目と項目直下の漢字列の組み合わせが一致した。つまり『言海』の凡例（卅八）が「篇中毎語ノ下ニ、直ニ標出セル漢字ハ、雅俗ヲ論ゼズ、普通用ノモノヲ出セリ」というように、これらがその和語を書くための「普通用ノ」漢字列であるということになる。

また、「端緒／いとぐち」「點頭／うなづき」「熟睡／うまゐ」「首途／かどで」「失敗／しくじつ（た）」「乳児／ちのみ」「故郷／ふるさと」「親族／みより」「悪漢／わるもの」は『言海』が語釈末に示す「漢ノ通用字」と一致した。これらも、『言海』において語と語の結びつきがあるということが示されているといえる。

漢語漢字列の語を『言海』でひいてみると、「貴君／あなた」「合奏／あはせ」「主人／あるじ」「點頭／うなづき」「白粉／おしろい」「侠客／おとこ」「音信／おとづ（る）」「首途／かどで」「面色／かほいろ」「私語／さ々やく」「寒氣／さむさ」「幸福／しあはせ」「失敗／しくじつ（た）」「納涼／すずみ」「佇立／た々ずみ」「猶豫／ためらふ」「怠惰／なまける」

「営業／なりわひ」「同胞／はらから」「再度／ふたたび」「故郷／ふるさと」「看護／みとり」「蘇生／よみがへ（り）」はそれぞれの項目の語釈に和語振仮名の語がみられた。

これらの結果は草双紙に現れた漢語漢字列と和語振仮名の結びつきを『言海』が保証しているといえる。「私語／さゝやく」のように、「ささやく〈私語〉／しご〈私語〉（ササヤクコト）」と『言海』を漢語漢字列側から引いても和語振仮名側から引いても相互にそれぞれの語がみられるような語は、より結びつきが強いとみて良いと思われる。

このような漢語漢字列＋和語振仮名という形式が現れるのは、漢字仮名交じり文で書かれていることによる。和語をどのような漢字で書き表すかということは、日本語の表記に関わる事象である。しかし、漢語漢字列と和語振仮名によって書き表される語と語の事象は、漢語と和語の語彙に関わる事象でもあることになる。

ここでは、漢語漢字列と和語振仮名の形であらわれるものを扱ったが、漢字列と振仮名の関係は次のようなパターンが考えられる。

- ① 漢語漢字列＋漢語振仮名（同語） ↓ 「繁華」^{はんくわ} 「志願」^{しぐわん}
- ② 漢語漢字列＋漢語振仮名（別語） ↓ 「不測」^{ふしぎ} 「動静」^{やうせい}
- ③ 漢語漢字列＋和語振仮名 ↓ 「埋葬」^{とむおき} 「豫約」^{いひやく}

また、漢語漢字列に対して和語を書き表す漢字列、つまり和語漢字列というものを想定できるのであれば

- *④ 和語漢字列＋和語振仮名（同語）
- *⑤ 和語漢字列＋和語振仮名（別語）
- *⑥ 和語漢字列＋漢語振仮名

というパターンがあることになる。たとえば「書置」^{かきおき}「手打」^{てうち}『高橋阿傳夜叉譚』三編）などは④と認められ得るか。しかし⑤は調査範囲の草双紙からは見いだせなかった。⑥は想定しにくいのではないかと思われる。よって、漢字列と振仮名とで結びつく語と語の関係は、漢字で書かれる漢語語彙がもつひろがりなのであり、漢字列の「力」であるといえる。

漢語漢字列に和語振仮名が振られる場合は、漢字と仮名で書かれているものであれば歴史的に文献に現れる事象であり、漢語が和語によって理解され、日本語の語彙体系の中に

入ってきたのであれば、漢語漢字列によって和語を書きあらわすという方法は、自然にこなわれてきたことといえる。その漢語と和語のむすびつきが端的に草双紙にも現れているのであり、ここでは、このような漢語漢字列の形で現れる漢語語彙も「草双紙の漢語語彙」としてとらえておきたいと考える。

第四章 草双紙の漢語の層

まず、仮名主体の草双紙に使われている漢語のデータを総合したものを【表一】として示す。

【表一】

作品名	御産池龍女利益		金華七変化						
刊行年	文政11年		万延元年～明治3年						
作者	関亭傳笑		鶴亭秀賀						
画	歌川国兼(北尾重政)		歌川国貞						
巻	前篇	後篇	十三編	十四編	十五編	十六編	十九編	二十編	二十一編
丁数	15	15	20	20	20	20	20	20	20
総文字数	8693	12695	11172	11986	10427	11810	13143	12609	13069
漢語総数	286	492	284	416	285	414	425	419	379
漢語異なり数	194	297	198	242	212	263	261	283	247
辞書掲載数（言海）	175	265	165	189	172	200	210	243	205
（いろは）	161	257	155	173	160	191	192	213	191
早引万代節用集掲載数	177	263	162	199	173	212	204	238	197

作品名	金華七変化					西南雲晴朝東風			合計
刊行年	万延元年～明治3年					明治11年			
作者	鶴亭秀賀		仮名垣魯文			篠田仙果			
画	歌川国貞		歌川国貞			楊洲斎周延			
巻	二十二編	二十三編	二十九編	三十編	三十一編	上	中	下	
丁数	20	20	20	20	20	8	8	8	294
総文字数	12303	11019	9746	9990	9224	3515	7062	6543	175006
漢語総数	429	442	327	380	334	156	305	267	6040
漢語異なり数	246	281	222	218	236	125	202	160	★2051
辞書掲載数（言海）	202	231	194	185	201	99	178	132	★1566
（いろは）	194	216	176	179	195	93	164	127	★1533
早引万代節用集掲載数	207	241	182	186	183	85	151	120	★1559

★異なり数

【表一】にあげた資料は、本稿でここまでに使用してきている仮名主体の草双紙である、文政十一（一八二八）年刊行の『御産池龍女利益』前篇・後篇の二巻、万延元（一八六〇）年から明治三（一八七〇）年までの間に刊行された『金華七変化』のうち、十三〜十六編、十九〜二十三編、二十八〜三十一編の計十三巻、明治十一（一八七八）年刊行の『西南雲晴朝東風』上・中・下の三巻であり、使われた漢語の総数は六〇四〇語、その異なり数二〇五一語である。それぞれの巻の詳細は次に示す通りである。また、それぞれの巻ごとの漢語の辞書掲載数として、『言海』『和漢／雅俗いろは辞典』『早引万代節用集』を使用した結果を合わせて掲載する。これらの辞書の詳細については第二節において述べる。

次に、草双紙から抽出した漢語総数六〇四〇語のうち、出現上位語を二五〇語まで示す。「回数」項の数字はその語がそれぞれの草双紙で使われた回数の合計を示す。これらは草双紙の本文には主に仮名書きで使われている語であるが、ここでは便宜的に漢字で示す。

さらにこれらの語を『言海』『和漢雅俗いろは辞典』『早引万代節用集』のそれぞれの対照結果をあわせて掲載している。「○」「×」はそれぞれの資料との対照結果として掲載の有無を示し、「△」は見出し項目があるものの、意味が草双紙に使用された漢語と同一であることとみなすことができなかったものを示している。

【江戸式草双紙の漢語 出現上位二五〇語と他資料との対照結果】

【言海】 【いろは辞典】 【節用集】 【回数】									
1 太守	○	○	○	261	11 実	○	○	○	29
2 様子	○	○	○	62	12 以前	○	○	○	28
3 様	○	×	○	48	13 長老	○	○	○	28
4 余儀	○	×	×	40	14 用意	○	○	○	28
5 不思議	○	○	○	38	15 御意	○	×	○	27
6 変化	○	○	○	38	16 次第	○	○	○	24
7 不審	○	○	○	37	17 面々	○	○	○	24
8 委細	○	○	○	35	18 近習	○	○	○	23
9 御前	○	○	○	31	19 衣服	○	○	○	22
10 典膳	○	○	○	30	20 先生	○	○	○	22

21 夫婦	○	○	○	22	47 百姓	○	○	14
22 用	○	○	○	21	48 刃	○	×	14
23 兩人	○	○	○	21	49 介抱	○	○	13
24 才	○	○	○	20	50 家中	○	×	13
25 城下	○	○	○	20	51 諫言	○	○	13
26 酒宴	○	○	○	19	52 亡神	×	○	13
27 忠臣	○	○	○	19	53 男女	×	○	13
28 方	○	○	○	19	54 人	○	×	13
29 義	○	×	○	18	55 万事	○	○	13
30 不義	○	○	○	18	56 案	○	×	12
31 編	○	×	○	18	57 恩	○	○	12
32 覺悟	○	○	○	17	58 軍学	○	○	12
33 最前	○	○	○	17	59 今日	○	×	12
34 士族	○	○	×	17	60 少年	○	×	12
35 一旦	○	○	○	16	61 前後	○	○	12
36 玄蕃	○	○	○	16	62 女房	○	○	12
37 女中	○	○	×	16	63 評判	○	×	12
38 是非	○	○	○	16	64 武士	○	○	12
39 難儀	○	○	○	16	65 浪人	○	○	12
40 残念	○	○	○	15	66 庵主	○	○	11
41 自然	○	○	○	15	67 怪猫	×	×	11
42 忤	○	○	○	15	68 家老	○	○	11
43 茫然	○	○	○	15	69 棺	○	○	11
44 家来	○	○	○	14	70 御殿	○	○	11
45 沙汰	○	○	○	14	71 死	○	○	11
46 大切	○	○	○	14	72 思案	○	○	11

73 支度	○	○	○	11	99 檢校	○	×	○	9
74 首尾	○	○	○	11	100 御免	○	○	○	9
75 承知	○	○	○	11	101 師	○	○	○	9
76 等	○	×	○	11	102 自在	○	○	○	9
77 当家	○	○	○	11	103 執權	○	○	○	9
78 盲人	○	○	○	11	104 障子	○	○	○	9
79 礼	○	○	○	11	105 思慮	○	○	○	9
80 老人	○	○	○	11	106 旦那	○	○	○	9
81 挨拶	○	○	○	10	107 提灯	○	○	○	9
82 一同	○	○	○	10	108 盜賊	○	○	○	9
83 衣類	○	○	○	10	109 武芸	○	○	○	9
84 懷中	○	○	○	10	110 兵士	○	○	○	9
85 感心	○	○	○	10	111 法	○	×	○	9
86 勤番	○	○	○	10	112 民部	○	○	○	9
87 仔細	○	○	○	10	113 妖怪	○	○	○	9
88 推拿	○	○	○	10	114 一味	○	○	○	8
89 随分	○	○	○	10	115 一通	○	○	○	8
90 詮議	○	△	○	10	116 遠慮	○	○	○	8
91 大恩	○	○	○	10	117 家	○	○	○	8
92 退治	○	○	○	10	118 稽古	○	○	○	8
93 対面	○	○	○	10	119 気色	○	○	○	8
94 天	○	○	○	10	120 玄関	○	○	○	8
95 人足	○	○	○	10	121 札	○	○	○	8
96 婦人	○	○	○	10	122 早速	○	○	○	8
97 機嫌	○	○	○	9	123 左様	○	○	○	8
98 供物	○	○	○	9	124 至極	○	○	○	8

125 時節○	○	○	8	151 十分○	×	○	7
126 写真○	○	×	8	152 少年輩×	×	×	7
127 邪魔○	○	○	8	153 神藥×	×	×	7
128 拙者○	○	○	8	154 相違○	○	○	7
129 世話○	○	○	8	155 太鼓○	○	○	7
130 先刻○	○	○	8	156 大胆○	○	○	7
131 大将○	○	○	8	157 宅 ○	○	○	7
132 忠義○	○	○	8	158 茶 ○	○	○	7
133 昼夜○	○	○	8	159 毒殺○	○	○	7
134 寵愛○	○	○	8	160 日 ○	×	○	7
135 道理○	○	○	8	161 藩中×	×	×	7
136 登城○	○	○	8	162 病氣○	○	○	7
137 人間○	○	○	8	163 不幸○	○	×	7
138 佞人○	○	○	8	164 平伏○	○	○	7
139 面目○	○	○	8	165 本心○	○	○	7
140 油断○	○	○	8	166 無理○	○	○	7
141 街道○	○	○	7	167 画 ○	×	○	7
142 合戦○	○	○	7	168 例 ○	○	○	7
143 合点○	○	○	7	169 路用○	○	○	7
144 檻倉○	○	×	7	170 案内○	○	○	6
145 觀念○	○	○	7	171 一言○	○	○	6
146 兄弟○	○	○	7	172 一度○	○	○	6
147 工夫○	○	○	7	173 一日○	×	○	6
148 昨夜○	○	○	7	174 一物○	△	○	6
149 参詣○	○	○	7	175 一生懸命○	○	○	6
150 自害○	○	○	7	176 一丁○	○	○	6

177 因縁○	○	○	6	203 弟子○	○	○	6
178 海賊○	○	○	6	204 当時○	○	○	6
179 懷妊○	○	○	6	205 年○	○	○	6
180 家督○	○	○	6	206 白状○	○	○	6
181 家内○	○	○	6	207 馬上×	○	×	6
182 急○	×	○	6	208 八方○	○	○	6
183 興○	×	○	6	209 美人○	○	○	6
184 近臣○	○	○	6	210 屏風○	○	○	6
185 下知○	○	○	6	211 不敵○	○	○	6
186 五体○	○	○	6	212 不便○	○	○	6
187 御覽○	○	○	6	213 塀○	○	○	6
188 最後○	○	○	6	214 変事○	×	○	6
189 出仕○	○	○	6	215 坊○	○	×	6
190 出兵×	×	×	6	216 反逆○	×	○	6
191 手鍊○	○	○	6	217 門弟○	○	○	6
192 正体○	○	○	6	218 夜中○	○	○	6
193 城中○	×	×	6	219 余○	○	○	6
194 勝負○	○	○	6	220 養育○	○	○	6
195 信仰○	○	○	6	221 乱暴△	○	○	6
196 神通○	○	○	6	222 廊下○	○	○	6
197 神変○	○	○	6	223 悪人○	○	○	5
198 節○	○	○	6	224 意○	○	○	5
199 退散○	○	○	6	225 意見○	○	○	5
200 退出○	○	○	6	226 医者○	○	○	5
201 段○	○	○	6	227 1時○	○	×	5
202 敵○	○	△	6	228 1人○	△	△	5

229 一家中○	○	×	5	240 空中○	○	○	5
230 一刻○	△	○	5	241 眷族○	○	○	5
231 一心○	○	○	5	242 監物○	○	○	5
232 以来○	○	○	5	243 孝行○	○	○	5
233 運 ○	○	○	5	244 国家×	×	×	5
234 閻魔○	○	○	5	245 催促○	○	○	5
235 寒気○	○	○	5	246 讒言○	○	○	5
236 莞爾×	○	○	5	247 死骸○	○	○	5
237 看病○	○	○	5	248 私学校×	×	○	5
238 虚 ○	○	○	5	249 指南○	○	○	5
239 金銀○	○	×	5	250 師範○	○	○	5

一番多く使われている漢語は「太守」（二六一回）となる。「太守」は漢語ではあるが、すべてが『金華七変化』に現れ、登場人物である「太守」を指す登場人物の呼び名として使われているため、必然的に出現数が多くなってしまっている。このように呼び名として使われるような漢語は出現数が増えるため、考察から省くべきであるかもしれないが、草双紙に使われる漢語語彙の内実を忠実に示すためにそのまま掲載する。同じように番号10「典膳」13「長老」36「玄蕃」なども登場人物の呼び名として使われているために数が多くなっているものと思われる。番号24「才」は、本文に「すでに十八才に／いたれど」（『金華七変化』十五編）とあるような場合に漢数字を省き「才」のみを集計した。「編」「人」「日」なども同様である。調査範囲の中で一度しか現れなかった語（回数1の語）は一一一語あり、全体（漢語の異なり数二〇五一語）の約五十四％となる。全体の四十六％の語は草双紙のなかで二度以上使われる語であるということになる。

これらのデータをもとに、草双紙の漢語の層別化を試みる。使用頻度の高い漢語、また、複数の草双紙に使われている漢語は、仮名で書かれることがより定着している漢語であると思われる。

第一節 漢語の層別化

山田俊雄『日本語と辞書』（一九七八）「六 辞書の中の漢語の姿」では、漢語を層としてとらえ、「漢語とはいっても、実は、すべてがいわゆる難解な漢語ではなくて、極めて一般的な庶民の程度でも十分に使ったり書いたりすることのできるものも少くはなかったと思われる。というのは、明治初期において見てもほぼ同じことが言えるかと思うが、漢語は漢字の裏付けをもたなくても存在しうる状態になる、また別な言い方をすれば、漢字離れをして、口頭言語の中でも普通になってゆくものがあつて、それらはいわば漢語の層の下の方に次第に累積し沈澱してゆく。」（二二五頁）という表現がなされている。

漢語の層別化にはいくつかの方法が試みられている。村山昌俊『明治時代語論考』（二〇〇三年おうふう刊）第三章第四節「二 明治期の漢語使用の層別分類について」（二五九頁）においては、池上楨造『漢語研究の構想』（一九八四年岩波書店刊）所収「漢語流行の一時期―明治前期資料の処理について―」による漢語の層別分類のしかたに触れ、「日常語として口語化していた漢語がどういうものであったか」について述べられている。層別化の方法の一例として以下にその箇所を引用する。

明治期の漢語の層別分類について、池上楨造は次のように三段階に分類した。

a 早く口語化している漢語

c 文語性の強い漢語

b その中間

そして、仮名垣魯文の『安愚楽鍋』（明治四年）の登場人物を

A 町人 職人 車力 芝居者 なまけもの 茶店女 娼妓歌妓

B 西洋好き 生文人 文盲 半可 野幫間 落語家 公用人 商人

C 藪医者 田舎武士 新聞好き

のように三分類し、a・c・bの漢語使用層をAはa、Cはc、Bはbとした。

これとは別に、山田俊雄は明治初年の漢語辞書『新令字解』（慶応四年六月、明治元年十二月）と『布令必用新撰字引』（明治二年）の掲出漢語に付されている漢語の一覧を示し、それらの漢語を日常語、すなわち「もつとも基層をなしてゐた漢語」とした。

これは漢語の使用層を登場人物によって位置づけ、それによって漢語を分類する方法ということになる。右にある山田俊雄の方法とは、山田俊雄（一九七七）「漢語研究上の一問

題―漢語層別化の試論―」で行なわれているものであり、漢語辞書の見出し項目の漢語と解説用語の漢語とには差を見出すことができるものとみて、理解語彙、使用語彙の二極をもつて漢語を層別化しており、「もつとも平易な理解語彙、使用語彙の層を見分けようとするときは、解説文中の用語をもつて、まづ平易の層をつくるものと見れば、大過はないと考へられる。しかし、論理的に解説を展開する時に使用される用語の範囲については、十分な調査を今は用意してゐないから、確言はさしひかえるけれども、かなり片寄りのあるものとなつてゐると推測される。したがつて、解説文中の用語すべてが、平易な層をすべて代表しうるものとはいへまい。そこに登場しないものがあり、またごく平易なものももれてゐることは十分考へられるところである。」(六〇〇頁)とも述べられているが「伝承されてきた漢語と、新出の漢語との総体を、質的に区別してとらへることを可能にする」(六三二頁)と述べている。

また、浅野敏彦『平安時代識字層の漢字・漢語の受容についての研究』(二〇一一年和泉書院刊)においては、平安時代識字層の「日常の読み書きの表層にあった語」(二七〇頁)を明らかにするために、訓点の付けられた『真福寺本将門記』を資料とし、漢語に対する付訓の有無によつて漢語を層別化するという方法を採っている。その結果、「傍訓の施されていない漢語は、傍訓のある漢語と比べて、当代の漢文消息の文範集であつた『高山寺本古往来』と共通する比率が、傍訓のある漢語の¹/₂倍程度あることからして、平安時代の日常の漢語の層に属するものであつたと思われる」(一一五頁)としている。ここでは漢語の受容のありようを明らかにすることが目的とされている。

浅野敏彦(二〇一一)の層別化は、漢語一語一語を対象としているのに対し、山田俊雄(一九七七)の層別化はある条件で抽出されたまとまつた語群そのものを層別化の対象としようとしている。本稿では後者の、あるまとまつた語群をもつて層別化することを試みる。

ある一定の条件によつて採集された漢語語彙を、(できれば排他的に)二分することが、漢語の層別化をするために有効と思われる方法の一つである。漢語語彙は、その体系自体が、層に分けられる可能性を内包していると考ええる。それは、「伝承されてきた漢語」や「新出の漢語」(山田俊雄一九七七)、また仏典で使われている漢語や、江戸期以降の唐話に使われる漢語、日本の近代において使われた西洋語の訳語など、日本語の語彙体系における漢語(中国語)の受容にともなう歴史的な積み重ねがあることと関係しているからではないかと思われる。漢語を層別化する方法と同じような方法をもつて、たとえば和語や他の

外来語を二分したり層別化したりすることは難しいと思われる。漢語は受容にともなって日本語の語彙体系の中に積み重なってきたのに対し、和語は日本語の語彙体系の中で、漢語を受け入れながら、もともとの土台から語義や使用範囲をひろげていったのではないかと考える。そしてその和語と漢語の関係性の中で、漢語が日本語の語彙体系内に重層的に組み込まれていったということが、層別化という方法を有効にしていると考ええる。よって、漢語の層別化はいくつかの方法によって試みられているが、どの方法をとった場合においても、何らかの区別による「層別化」は可能であると思われる。

しかし、ある方法をもって採集され、層別化された漢語群が、他の資料で同じ方法をとった場合の層別化された漢語群と過不足なく一致するということは考えにくく、漢語の層は（少しずつのずれを伴いながら）重なり合うものであると捉えるのが自然であると思われる。たとえば先に引用した池上楨造の層別化にある、「**a** 早く口語化している漢語」の漢語使用層である『安愚楽鍋』の「**A** 町人 職人 車力 芝居者 なまけもの 茶店女 娼妓歌妓」に使われた漢語は、**A**と同じような登場人物層でありそうな草双紙を資料として層別化したとしても、『安愚楽鍋』の漢語と過不足なく一致するということはないであろうということが予想できる。つまり、層別化は語を単位としてではなく、語彙を単位として行なうほうが有効であるということになる。

本稿では、草双紙を資料として抽出した漢語を「草双紙の漢語語彙」というひとつのまとまりをもった語群ととらえ、その漢語語彙が日本語のどのような漢語の層と重なりがあるものであるのかを、他資料で使用されている漢語群と結びつけながら具体的に示すことを試みる。漢語を層として捉えるという見方を明確にし、漢語語彙研究の新たな知見となることを期待したい。

第二節 辞書体資料との対照

「語彙」を調べる方法のひとつとして、辞書体資料（註12）を使うことは有効な方法であると思われる。辞書体資料に収録される語は、ある目的をもった辞書を編纂するという、ある一定の同じ条件によって採集された語彙であることになる。辞書体資料と対照することで、語彙の重なり度合い、漢語でいうならば層に重なりがあるのかどうかということを検証することができると思われるが、辞書体資料の収録語の多さ、収録範囲のひろさを考慮に入れて結果を捉えることが必要であると思われる。

草双紙の漢語語彙を検証しようとしたときに、草双紙が刊行された時期と同時代に使われていた資料によって比較することは、当時の日本語語彙体系内における草双紙の位置をみるという意味において有効な検証方法であると思われる。草双紙の漢語と明治期の国語辞書を照らし合わせるという方法をとったときには、草双紙の漢語が明治期の国語辞書で検索しうる語であるのかということが具体的な数字として現れる。

先にとりあげた小野正弘(二〇〇八)「語学資料としての幕末草双紙―仮名書き漢語を中心に―」では、「仮名書き漢語の八割方は、節用集で引ける漢語である」という結果が示されている。草双紙は当時の一般庶民によく読まれたものであるから、その語彙は当時の一般使用語彙から大きくかけはなれたものではないだろうということが予想される。

草双紙に使用されている漢語語彙が、これらのどのような漢語の層と重なり合いがあるのかということ、他資料で使用されている漢語群と結びつけながら検証する。先に挙げた【江戸式草双紙の漢語 出現上位二五〇語と他資料との対照結果】の、【言海】【いろは辞典】【節用集】の○×△表示は以下に対応している。

【『言海』との対照】

大槻文彦によって普通辞書として編纂され、明治二十四年に刊行を終えた『言海』は、近代的な国語辞書の魁として、高い評価を受けている辞書である。『言海』に付録されている「言海採収語：類別表」によると、漢語は約一万三千語収録されている。また、『言海』は、見出し項目直下に掲出する漢字列を、「和の通用字」と「和漢通用字」とに区別し、語釈の末にさらに「漢の通用字」を挙げるなど、漢字を掲載することによりかなり気を配った編集がなされているといえる。また、見出し項目の語が和語である場合と、漢語である場合に、それぞれ違う字形の活字を使用しており、語種についてもはっきりと区別している辞書である。

『言海』を用いて、仮名主体で書かれた草双紙の漢語を引いてみると、調査した二〇五一語のうち、一五六六語が『言海』の見出し項目にある語であった。これは今回調査した草双紙の漢語の、約七十六%が『言海』に見出し項目として掲載されている語であるということになる。

『言海』冒頭の「本書編纂ノ大意」(二)には、「此書ハ、日本普通語ノ辞書ナリ。」とあり、また、大意(十二)には、「此書、明治八年二月、命ヲ奉ジテ起草シ、十七年十二月ニ

至テ成稿セリ。」とある。明治期に「普通語ノ辞書」として編まれた近代的な国語辞書である『言海』の見出し項目になっている語が、草双紙に使われる漢語の七割以上を含んでいるということは、草双紙に使われる漢語が、『言海』の編纂までに通時的に使用されてきた、もしくは、日本語の語彙体系内に定着しつつあった「普通語ノ」漢語である可能性を示しているものと思われる。

【『和漢／雅俗』いろは辞典』との対照】

高橋五郎によって編纂された、『和漢／雅俗』いろは辞典』（明治二十二年 一八八九年刊）は、見出し項目として漢語を多く収録している辞書である。高橋五郎はさきに『漢英／対照』いろは辞典』を編纂している。西洋字書の体裁にならない、漢語と英語を列記したものであったが、この辞書から英語対照をのぞき、和漢語を補充したものが『和漢／雅俗』いろは辞典』（以下『いろは辞典』と省略）であるため、見出し項目に漢語が多く収録されることとなる。見出し項目数は、山田俊雄『日本語と辞書』（一九七八）によると、約五万八四〇〇語であると目されている。

『いろは辞典』と草双紙の漢語とを対照してみると、二〇五一語のうち一五三三語（七十五％）が見出せた。見出し項目との一致数は『言海』より少ないということになるが、『言海』には見出し項目として掲載がないが、『いろは辞典』には掲載があるという語が一七一語あった。

また、『言海』と『いろは辞典』のどちらの辞書にも見出し項目として掲載されている語が一三六二語、『言海』『いろは辞典』のどちらかに掲載のある語は一七三七語だった。これは言い換えれば、今回扱った草双紙の漢語のうち約八十五％は、明治二十年代に刊行されたこれらの国語辞書に見出せる語であるということになる。

このようなことから、漢語の層を想定することができる。どちらの辞書にも掲載のある漢語は、それぞれの辞書に収録された漢語の層に重なり合いがある部分であることになり、草双紙の漢語語彙のような、ある基準で採集した語彙を一つの尺度として見ることで、その重なり具合から、辞書の収録語についても検証できることになる。

辞書体資料は、存在しているあらゆる語を掲載しているわけではないので、辞書の編纂方針によっては、日常によく使われる語であっても、見出し項目として掲載されないということがある。

たとえば【江戸式草双紙の漢語 出現上位二五〇語と他資料との対照結果】の番号67「怪猫」は『言海』『いろは辞典』ともに掲載していない。『日本国語大辞典』第二版には「かい・びよう【怪猫】」という項目があり、初出例は「*春泥（一九二八）（久保田万太郎）」があげられている。「怪猫」は、草双紙中では十一例のうち二例は「怪猫くわいめう」と、漢字のあとに割書きで読みが書かれる形で使われており、残りの九例は「くわいめう」と仮名書きの形で使われている。草双紙中で「怪猫」は、『金華七変化』に登場し、太守を祟る妖怪の猫の意で使われている。この語のように、たとえば「妖怪の猫」のような既存の語の、造語成分を組み合わせてつくられたと思われる語は、『言海』『いろは辞典』が見出し項目としにくい語であることが予想され、そういった類の語が、草双紙のような非辞書体資料にあらわれる漢語の中には、少なからずあると思われる。番号153「神薬」161「藩中」190「出兵」もそのような語であると考えられる。

【節用集との対照】

節用集と草双紙の漢語との対照は、小野（二〇〇八）においても行なわれている。小野（二〇〇八）では、式亭三馬『復讐安達太郎山』かたきうちあだたらやま（一八〇六年刊）の仮名書き漢語の異なり数一九九語を『早引永代節用集』（天保十四 一八四三年新刻、嘉永三 一八五〇年再刻）と、『増字／百倍早引節用集』（嘉永四 一八五一年刊）を用いて検索した結果、どちらの節用集にも掲載されていない語が四十二語（二十一％）であったことから、「仮名書き漢語の八割方は、節用集で引ける漢語である」と述べられている。

本稿では、草双紙と対照する『節用集』として、嘉永三（一八五〇）年に刊行された『早引万代節用集』の見出し項目を五十音順に改編した、高梨信博編『改編・早引万代節用集』（一〇六 二〇一〇年）を使用する。『日本語学研究事典』（二〇〇七 明治書院）の「節用集」の項目によると、「早引節用集の系統のもの」として、「イロハ各部内の第二分類が音節数によったもの。「い」「い二」……などと分けており、音節数を数えてすぐ引けることから、〈早引〉と名づけたものである。小型本がほとんどであるが、語彙数はかなり多く、基本的なものはほぼ収められているようである。」と説明されている。掲載する語数が多いのは節用集類の特長であるが、さまざまな語彙がまざりあっているともいえる。

この『早引万代節用集』と草双紙の漢語と対照すると、二〇五一語のうち一五五九語（七十六％）が掲載されていた。『早引万代節用集』は、今回調査対象とした草双紙とほぼ同じ

時期に刊行された節用集であるといえる。小野（二〇〇八）の結果では、「仮名書き漢語の八割方は、節用集で引ける漢語である」ということであつたので、同様に、本稿で扱った草双紙の漢語の八割近くが、今回使用した早引タイプの『節用集』にも見出せるということが、改めて検証できたということになる。

草双紙が刊行されていた時期に同じく刊行されていた『節用集』と、草双紙の漢語とを対照することによって、それが当該時期に、ある程度実用的に使われていた漢語であるということ、漢語使用の共時的な面において検証することができると考える。また、早引タイプの『節用集』を用いることは、『節用集』を（当該時期のように）実際に使用するという観点でも検証できることになる。

今回扱った草双紙の漢語の調査範囲が、使用した『早引万代節用集』（嘉永三 一八五〇年）より後に刊行された草双紙を含んでいるので、作品別に対照結果を見てみると、『御産池龍女利益』全篇との一致率は九十%、『金華七変化』（十三〜十六、十九〜二十三、二十九〜三十一編）との一致率は八十二%、『西南雲晴朝東風』全巻との一致率は七十三%となっており、『節用集』刊行時期より後である、明治十一年に刊行された『西南雲晴朝東風』との一致率は少し低くなっている。刊行時期による一致率の差であるとみることができるかどうかという判断は難しいと思われる。漢語の層でいうならば、明治期に用いられるようになったいわゆる「新漢語」のような漢語の層を区別できるようであれば、『節用集』の成り立ちを考慮に入れたうえで、刊行時期による一致率の差である可能性も検証できることになる。

もう一つ、高梨信博編『改編／宝暦 新撰早引節用集』（二〇一〇年）を使用して同じように草双紙の漢語語彙と対照した結果、一致した語は一〇二二語（五十%）であつた。この『節用集』は、宝暦二年（一七五二年）刊であり、今回扱った草双紙の一番古いものは『御産池龍女利益』の文政十一年（一八二八年）であるので、刊行時期とは約七十六年の隔たりがあることになる。草双紙の刊行時期と重なる『早引万代節用集』より一致率が低いことについて、こちらも刊行時期の差が要因であるかもしれないと予想はされるが断言はできない。節用集との対照については、節用集にもさまざまなタイプがあるので、漢語の層も視野にいれ、使用する節用集の数を増やすなどして、さらに検証を重ねる必要があると思われる。

【明治期刊行漢語辞書の語釈中にみられる漢語との対照】

草双紙に仮名書きで使われる漢語のように、漢語が「漢字離れ」をして使われているものに、辞書の語釈がある。『言海』の語釈は、漢字と片仮名で記されており、たとえば見出し項目「へんたふ／返答」は語釈に「カヘリゴト。コタヘ。ヘンジ。アイサツ。」と漢語も片仮名で記されている。『いろは辞典』も、語釈はおもに漢字と平仮名で記されているが、見出し項目「はいれい／拝礼」の語釈、「をがみ。又じぎ、あいさつ」のように、仮名書きされているものもある。

幕末から明治期にかけて盛んに刊行された漢語辞書類は、漢語を見出し項目として、漢字列の右側に読みを附し、その漢語の意味を、片仮名の短い語釈で記した小型辞書であることが多い。この短い語釈の中にも(片)仮名書きの漢語がみられる。たとえば『漢語字類』(庄原謙吉纂輯 明治二 一八六九年青山堂刊)の見出し項目「不敬^{フケイ}」は、語釈に「シツレイ」とだけ書かれている。このように、漢語辞書の語釈に使用される漢語は、漢語を説明することができることになり、日本語の中でも理解がすすんでいる漢語であるとみることができ、且つ(それが仮名で書かれている場合は)「漢字離れ」をしている漢語である。

この漢語群を取り出し、分類すると、見出し項目となっている漢語より難易度が低い(と思われる)漢語群を抽出することができる。それは、見出し項目となっている漢語の層とは(難易度において)違う層をなす漢語群であると想定することができる。見出し項目となっている漢語を説明するために使われた漢語群と、見出し項目の漢語とは、層をわけることができると考える。

山田忠雄『近代国語辞書の歩み―その模倣と創意と―上』(一九八一年三省堂刊)の第二部第二章「漢語辞書の盛行 狭義の漢語とは」(三三三頁〜三三六頁)に、『漢語字類』(庄原謙吉纂輯 明治二 一八六九年青山堂刊)の語釈に使用された字音語一覧が掲載されている。『漢語字類』の、「見出し漢語の語釈中に用いられた字音語を網羅し、五十音順に排列したもの」(三三三頁)である。この漢語群と草双紙の漢語語彙を対照を試みる。

次に挙げる漢語一覧は、山田忠雄(一九八一)に掲載されている、『漢語字類』の語釈に使用された字音語一覧のうち、本稿で調査した草双紙の漢語と一致する語を一覧にしたものである。一覧の括弧内の語が『漢語字類』中で見出し項目となっている漢語であり、片仮名で表示した語は、見出し項目である括弧内の語の語釈中に使われている漢語である(註13)。たとえば「アンナイ」は、『漢語字類』の「先導」という見出し項目の語釈に「アンナイ」とあることを示している。見出し項目「先導」の語釈欄には「アンナイ」としか

書かれておらず、見出し項目の漢語を一語で置き換えた形の語釈であるということになる。「カタン」は「連合」という見出し項目に「ダイミヤウ ガ カタンスル」とある語釈に使われている「カタン」を示している。つまり、「アンナイ」「カタン」が語釈に使用され、漢語を説明することのできる漢語ということになる。

【『漢語字類』の語釈に使用された字音語一覧のうち、草双紙の漢語と一致する語】

1	アイサウ (善諛)	24	カトク (襲封)
2	アクジ (犯罪)	25	カナイ (噓類)
3	アクマ (厲鬼)	26	カロウ (閹老)
4	アンナイ (先導)	27	カンコウ (熟考)
5	アンラン (偷安)	28	カンジン (枢機)
6	イクワウ (耀徳)	29	カンヤウ (主意)
7	イケン (忠告)	30	キゲン (邪媚)
8	イシヤ (軍医)	31	キシツ (廉節)
9	イチド (網羅)	32	キヤウクン (誨示)
10	イチニン (丈夫)	33	ギヤウジャウ (言行)
11	イツキ (単騎)	34	ギヤウセキ (名実)
12	イツシヤウ (誤生)	35	キヤウダイ (鴿原之情)
13	一尺 (咫尺之間)	36	ギヨカン (叡感)
14	イツスン (姑息)	37	ギリ (交宜)
15	イツパイ (充滿)	38	キリヤウ (麗質)
16	イライ (爾来)	39	ギンミ (試業)
17	カウサン (首服)	40	グワイコク (海外)
18	カクゴ (決死)	41	グンチウ (軍臣)
19	カゾウ (加秩)	42	ケイコ (修行)
20	カタン (連合)	43	ケイゴ (陛戦)
21	カチウ (弊藩)	44	ケツコウ (殊榮)
22	カッセン (巷戦)	45	ケンクワ (骨肉相食)
23	ガテン (頓悟)	46	ケンノン (危懼)

47	ケンブツ (看客)	77	シュツギヨ (臨御)
48	コウクワイ (噬臍)	78	ジョウブ (牢固)
49	ゴウジャウ (頑固)	79	シヨクブン (一日万機)
50	コクチウ (挙国)	80	シヨコク (各国)
51	ゴザシヨ (南面)	81	シンガン (願望)
52	コツジキ (乞丐)	82	シンジツ (欸接)
53	ゴテン (後宮)	83	シンセツ (厚意)
54	ゴニチ (後患)	84	セイジ (議事)
55	ゴラン (叡覽)	85	セカイ (鎖国)
56	コンイ (結欸)	86	セケン (物議)
57	ザイニン (勾捉)	87	ゼツシヨ (絶險)
58	サウイ (逕庭)	88	センサク (討論)
59	サウダン (会議)	89	センゾ (先靈)
60	サウヲウ (不当)	90	ソエン (闊遠)
61	ザンネン (遺憾)	91	ソニン (上変)
62	シアン (沈吟)	92	ソマツ (不腆)
63	シキヨ (赴聞)	93	ゾンブン (遂志)
64	シゼン (天陰)	94	ダイジ (保護)
65	ジタイ (辞職)	95	タイシヤウ (総督)
66	シチ (典物)	96	タイセツ (緊要)
67	シツレイ (不敬)	97	タコク (鎖攘)
68	シハウ (四散)	98	ダン々々 (蚕食)
69	ジヒ (哀訴)	99	チャウレン (講兵)
70	ジブン (味夾)	100	ツイシヨウ (足恭)
71	ジマン (自負)	101	テウダイ (拝受)
72	シヤウガイ (終身)	102	デシ (束脩)
73	シヤウグン (閩外之制)	103	テツポウ (彈丸)
74	シヤウゾク (束帶)	104	テンウン (運祚)
75	シヤウチ (頷之)	105	テンカ (率土)
76	シヤム (賊賢害民)	106	テンシ (陛下)

107	テンチ (霄壤之隔)	137	ホツキ (改悔)
108	テンネン (天陰)	138	ホヨウ (娛目)
109	ドウイ (協同)	139	ホン (書生)
110	トウジ (時弊)	140	ホンヂン (中軍)
111	トウブン (儉安)	141	マイニチ (連日)
112	ドウリ (順逆)	142	マンタタ (巨万)
113	ドクガイ (酖殺)	143	ミツタタ (陰謀)
114	ト ज्याウ (登堂)	144	ミヤウモク (大義名分)
115	トタウ (比党)	145	ムシツ (無罪)
116	トチ (開墾)	146	ムホン (不臣)
117	ナンギ (櫛風沐雨)	147	ムリ (僻論)
118	ナンジウ (困苦)	148	メイド (泉下)
119	ネング (三調)	149	モヤウ (形勢)
120	ハウ (失当)	150	モンゴン (脱文)
121	ハット (三尺法)	151	ヤクニン (有司)
122	ヒダウ (横逆)	152	ユイケン (遺詔)
123	ビヤウキ (采薪之憂)	153	ユウゲイ (末技)
124	ヒヤウバン (美譽)	154	ユダン (寸鉄殺人)
125	ヒヤクシヤウ (蒼生)	155	ヨウジン (予防)
126	フィ (邂逅)	156	ヨウス (動靜)
127	フウフ (匹夫匹婦)	157	ヨギ (脅従)
128	ブギヤウ (使君)	158	ランバウ (肆虐)
129	フシギ (不測)	159	リコウ (飾智)
130	ブシヨウ (疎慵)	160	リハツ (百伶千俐)
131	フシヨウチ (不平)	161	リヤウケン (井蛙之見)
132	フソク (怨望)	162	リヤウジ (医療)
133	フダイ (世臣)	163	リヤウブン (割拠)
134	ヘイシ (行伍)	164	リヤウリ (草具)
135	ベツダン (出格)	165	リンジウ (絶命)
136	ホウコウ (羈旅之臣)	166	レイギ (膺懲之典)

草双紙の漢語と対照すると、山田忠雄(一九八一)の一覧表に掲出されている全三三四語のうち、一六九語(五十一%)が一致した。草双紙に仮名書きで使われる漢語は、漢語辞書の漢語を説明する漢語とも、重なり合いがあるということになる。とくに、この一六九語の漢語は、漢字を離れて書かれる可能性が高い漢語であるといえる。

山田忠雄(一九八一)には「層別化」ということは示されていないが、この一覧は、見出し項目の漢語と、語釈の漢語とをもって、漢語の層をわけていることになる。先にも述べたように、何らかの条件をもつてまず二分することが、層別化の方法のひとつであり、漢語辞書の見出し項目となっている漢語を、説明するために使われた語釈の漢語群は、見出し項目の漢語よりも、理解されやすい「平易な層」(山田俊雄一九七八)であっただろうと予想され、見出し項目の漢語と、語釈に使われる漢語は、はつきりと層をわけることができると思われる。

山田忠雄(一九八一)第二部第二章「漢語辞書の盛行」の「狭義の漢語とは」は、「漢語辞書に盛られる漢語とは如何なる種類の言語をさすのであろうか?」という問いからはじまっている。漢語辞書の漢語は「日常の会話に用いられる今日^{コン}・本日・当日・昨晚・去年・天道・引導・因縁・異口同音・一体(全体)・夫婦・兄弟^{カヤ}・徒然^{トセ}・毎度・不断など総べて漢語ならざるはない」という「広義の漢語」ではなく、「日常の会話に其が用いられるとしても何程か他の語とは異なる雰囲気^{コン}を以て使用せられ又受取られるものの中、字音語の謂い」であり、「何程か改まった意識を以て用いられる単語のうち漢土起源のものを主として指」すと述べられている。そして、『漢語字類』の語釈に用いられる字音語の大部分が「日常語としての使用をみる」、「狭義の漢語とは言えない字音語」であり、「此のように社会生活に広範囲に亘って滲透する事実^{コン}は、明治文化の持つ一つの大きな特徴として正に瞠目に値する」と述べられている。

漢語辞書の見出し項目となる漢語は、辞書内において、これから説明を加えようとする語であるから、難易度が高い語であることが予想される。試みに、草双紙の漢語を五十音順に二〇〇語とりあげ、『漢語字類』の見出し項目の漢語と対照したところ、そのうち約九割が草双紙の漢語と一致しなかった。このことから、見出し項目の漢語と、語釈に使われる漢語の層に違いがあるということを、窺い知ることができる。

山田俊雄（一九七七）「漢語研究上の一問題―漢語層別化の試論―」には、『漢語便覧』『大増補漢語解大全』『広益熟字典』の三種の漢語辞書の解説文中にみられる漢語一覧が掲載されている（六一二～六二九頁）。これらの漢語も、山田忠雄（一九八一）と同様に、見出し項目の漢語と、語釈に使われる漢語を層別したものであるといえる。

山田俊雄が「煩を顧みずに羅列したのは、なるべくその総体を捉へることを必要としたからであるが、同時にどんな語が、解説文中の用語として普通の漢語であつたかを観察することも大切であると思ふからである」（六三〇頁）と述べるように、十八ページにわたり一二三〇語の漢語が示されている。この漢語群と草双紙の漢語を対照すると、一二三〇語のうち五二五語（四十三％）が一致した。

また、山田俊雄『日本語と辞書』（一九七八）にも、元禄十一（一六九八）年刊の『経書字辨』（古市藤之進興孝著 乾坤二冊）の注解の中に使用された漢語を一覧にしたもの（二二八～二三五頁）が掲載されている。この一覧と草双紙の漢語は（掲載されている）四二三語のうち二〇一語（四十七％）が一致した。以下に草双紙の漢語と『経書字辨』の注解が一致したものを挙げる。片仮名で書かれている語は『経書字辨』中で仮名書きされていることを示す。語義判別のために漢字を合わせて提示する。

【草双紙の漢語と一致した『経書字辨』の注解の中に使用された漢語】

1	アイ(ス)	愛	13	一處	
2	アイサツ	挨拶	14	一タン	一旦
3	アンナイ	案内	15	一ハイ	一杯
4	意		16	一方	
5	イト	以後	17	衣服	
6	醫書		18	インシン	音信
7	イセイ	威勢	19	エンリョ	遠慮
8	一時		20	ヲ、チャク	横着
9	一事		21	カイホウ	介抱
10	一日		22	カウ／＼	孝行
11	一家		23	カクコ	覚悟
12	イツキヤウ	一興	24	カクベツ	格別

25	カゾウ	加増	55	ザ	座
26	ガテン	合点	56	サイシヨ	最初
27	カラウ	家老	57	ザイシヨ	在所
28	カンシヨク	顔色	58	サイソク	催促
29	カンヤウ	肝要	59	サウダン	相談
30	キ	気	60	サタ	沙汰
31	義		61	サツソク	早速
32	キゲン	機嫌	62	サホウ	作法
33	キメウ	奇妙	63	字	
34	ギヤウギ	行儀	64	シアン	思案
35	キヤウダイ	兄弟	65	四季	
36	キヤク	客	66	ジキ	辞儀
37	ギョイ	御意	67	シゴク	至極
38	ギリ	義理	68	シサイ	仔細
39	キリヤウ	器量	69	シシヤウ	師匠
40	キレイ	綺麗	70	時セツ	時節
41	ギンミ	吟味	71	シゼン	自然
42	ク	苦	72	シダイ	次第
43	クラウ	苦労	73	シタク	支度
44	君子		74	シナン	指南
45	ゲイ	芸	75	十分	
46	ケイロ	稽古	76	ジブン	自分
47	ケガ	怪我	77	ジブン	時分
48	ゲヂ	下知	78	ジマン	自慢
49	ケツシテ	決	79	ジャウ	情
50	ケツカウ	結構	80	シヤウロ	証拠
51	ケライ	家来	81	シヤウシ	笑止
52	御キゲン	機嫌	82	ジャウジウ	成就
53	ロジキ	乞食	83	ジャウズ	上手
54	ロンレイ	婚礼	84	城中	

85	ジャウブ	丈夫	115	タイギ	大儀
86	ジャチ	邪智	116	ダイジ	大事
87	ジャマ	邪魔	117	タイシヤウ	大将
88	ジュウ	自由	118	タイセツ	大切
89	シユ人	主人	119	タイテイ	大抵
90	シユビ	首尾	120	タイリヤク	大略
91	シヨク	食	121	ダウグ	道具
92	ジヨサイ	如才	122	タウブン	当分
93	シヨモウ	所望	123	ダウリ	道理
94	シン	真	124	タツシヤ	達者
95	シンカウ	信仰	125	タニン	他人
96	シンジツ	信実	126	ダン	段
97	シンヂウ	心中	127	ダン〜	段々
98	ジンリヨク	人力	128	智	
99	ズイブン	随分	129	忠臣	
100	セイ	性	130	調子	
101	セイ	精	131	女中	
102	聖人		132	ツイシヤウ	追従
103	セウシ	障子	133	テイシユ	亭主
104	セケン	世間	134	テウシ	調子
105	セツ	説	135	デシ	弟子
106	ゼヒ	是非	136	天	
107	セワ	世話	137	天下	
108	センギ	詮議	138	天地	
109	センサク	詮索	139	徳	
110	センゾ	先祖	140	ナイ〜	内々
111	ソマツ	粗末	141	ナンギ	難儀
112	ソズ	存	142	女房	
113	ゾンネン	存念	143	人ギヤウ	人形
114	ダイイチ	第一	144	ニンソク	人足

145	人夫		174	マイニチ	毎日
146	ネン	念	175	マンイチ	万一
147	ネング	年貢	176	ム	無
148	ハウ	方	177	ムリ	無理
149	ハット	法度	178	モチロン	勿論
150	法		179	文字	
151	バンジ	万事	180	モヤウ	模様
152	ハンブン	半分	181	モンコン	文言
153	晩		182	ヤウ	様
154	ヒキヤウ	卑怯	183	ヤウシヤ	容赦
155	ヒサウ	秘蔵	184	ヤク	役
156	ビヤウキ	病氣	185	ヤクギ	役儀
157	評判		186	役人	
158	ヒヤクシヤウ	百姓	187	ユダン	油断
159	フウ	風	188	用	
160	不義		189	ヨウジン	用心
161	ブギヤウ	奉行	190	ヨギ	餘儀
162	フシギ	不思議	191	ラウゼキ	狼藉
163	フシン	不審	192	ラチ	埒
164	フソク	不足	193	リカウ	利口
165	フリヤウケン	不了見	194	リキリヤウ	力量
166	ブレイ	無礼	195	リチギ	律儀
167	ブン	分	196	リハツ	利発
168	ベツ	別	197	リヤウケン	了簡
169	ヘンジ	返事	198	リヤウリ	料理
170	奉公		199	リヨグハイ	慮外
171	ホウバイ	傍輩	200	ルイ	類
172	ホウビ	褒美	201	ロク	碌
173	ホンマウ	本望			

これらについて山田俊雄（一九七八）では、「右に示した事実とは、もともと平易な解説を標榜した『経書字辨』の注解の中に、漢語がかなり多く入っているということである。またそれが多く仮名で書かれているという点が注目される。」（二三五頁）と述べられている。

「アンナイ」「カクゴ」「ガテン」「カンヤウ」「キゲン」「ギリ」「キリヤウ」「ギンミ」「ケイコ」「サウダン」などは先に挙げた『漢語字類』の語釈に使われた漢語と、『経書字辨』の注解中において使われた漢語とに、共通して使用されているということになる。

先に、明治式草双紙の中で、和語振仮名が振られている漢語漢字列は、和語と語義的な結びつきがある漢語であることを述べた。また、『漢語字類』の語釈に使われた漢語は、その見出し項目の漢語と語義的なむすびつきがある漢語ということになる。つまり、草双紙の漢語には

① 和語と結びつく漢語

② 漢語と結びつく漢語

とがあり、そのどちらにも含まれる漢語があることになる。この結果は、漢語の層が「重なり合っている」という想定とも通うものであると考える。

漢語辞書の語釈に使われる漢語は、見出し項目の漢語を説明するために置かれ、また、すべての語釈が漢語で説明されるわけではないということもあり、それは非辞書体資料で見られるような場合とは異なり、かなり限定的に現れる漢語群であるといえる。そうした限定された漢語群であっても、草双紙の漢語とそれぞれ五割程度の重なり合いをもつことが確認された。漢語辞書の語釈に使われる漢語群と一致する語をもつ草双紙の漢語は、「漢語を説明する漢語」と同じように、理解されやすい漢語であるといえる。

明治期に刊行された国語辞書との対照、草双紙と同時期に刊行された節用集との対照、そして明治期に刊行された漢語辞書の語釈に使われる漢語と対照した結果、草双紙に使われている漢語は、明治期刊行の国語辞書に掲載されている漢語の約八割、江戸末期に刊行された早引きタイプの節用集に掲載されている漢語の約八割、漢語の説明に使われる漢語の約五割と、重なり合いをもつ漢語であるということがわかった。この重なり合いは、同じ漢語が使われていたという個々の語の動きであるということだけでなく、それぞれの資料群の漢語が、重なり合った層をなす漢語群であると捉えることができる。

当該時期の節用集と一致する漢語は、草双紙の漢語とは共時的に一致するものであり、国語辞書と一致する漢語は、その国語辞書の編纂までに通時的に使用されてきた漢語であるといえ、漢語辞書の見出し項目の漢語を説明する、語釈に使われた漢語は、その性質上

あらゆる語が現れる条件ではないために、かなり限定的な漢語群であることにはなるが、その重なり合いをみることで、漢語語彙を体系としてとらえる手だてになる語群であると思われる。

『いろは辞典』は、漢語を多く収録している辞書ではあるが、草双紙の漢語との一致数が『言海』より多くなかったことについては、『言海』と『いろは辞典』とが収録する漢語の層にずれがあるのではないかと考えることもできる。草双紙の漢語が、近代的な国語辞書の見出し項目にとられる語であり、漢語辞書の語釈に使われる、平易な漢語と重なり合いがある漢語群であるという見方によって、草双紙の漢語語彙を、日本語の語彙体系内における漢語の層に、ある程度位置づけることができたのではないかと考える。今後、他資料の漢語の層を考えるにあたって、これをひとつの指標とすることができ、さらに、たとえば草双紙の漢語語彙について「この資料の漢語群とはほとんど重なり合いがない」というような対照結果を示し合わせることができれば、よりはっきりと、漢語を層別化することができると思われる。

第三節 草双紙の漢語漢字列の層

漢字仮名交じり文で書かれる明治式草双紙に使われる漢語と、仮名主体で書かれる草双紙との対照は第三章第二節で述べたとおり、『梅雨日記』に使われた漢語異なり数四九五語のうち、二四二語（四十八・八％）が一致した。仮名主体の表記体であっても、漢字仮名まじり文の表記体であっても、それぞれの草双紙に使われる漢語語彙には重なり合いがあり、草双紙の表記体の違いは、漢語語彙に大きな影響を及ぼさないといえる。これは言い換えれば、仮名主体の草双紙と漢字仮名まじり文で書かれた草双紙に使われる漢語の層は、ほとんど重なっているとみることができることになる。

次に、草双紙の本文中では和語とみなすことになり、漢語を採集する際には取り上げられない語である、漢語漢字列＋和語振仮名の語についてとりあげる。この漢語漢字列の語を、仮名主体の草双紙の漢語語彙と対照する。

以下に、第三章第三節でとりあげた漢語漢字列の語を、音読した語形で草双紙の漢語語彙と対照した結果を挙げる（漢語／和語と表示する。）

草双紙の題名は『御産池龍女利益』↓「龍女」、『金華七変化』↓「金華」、『西南雲晴朝東風』↓「西南」と省略した。

1	接遇	せつぐう／あつかひ	×	
2	貴君	きくん／あなた	×	
3	合奏	がつそう／あはせ	×	
4	周章	しうしやう／あわて	×	
5	愍然	びんぜん／あはれ	○	西南下 1回
6	大畧	たいりやく／あらまし	○	金華二十 1回
7	主人	しゅじん／あるじ	○	龍女後、金華十六・十九・二十三・三十 5回
8	突然	とつぜん／いきなり	×	
9	端緒	たんしょ／いとぐち	×	
10	豫約	よやく／いひなづけ	×	
11	点頭	てんとう／うなづき	×	
12	熟睡	じゆくすい／うまゐ	○	西南下 1回
13	白粉	はくふん／おしろい	×	
14	遂人	すいじん／おつて	×	
15	俠客	けふかく／おとこ	×	
16	音信	いんしん／おとづる	○	金華二十二 1回
17	戸外	こぐわい／おもて	×	
18	紀念	きねん／かたみ	×	
19	首途	しゆと／かどで	×	
20	面色	めんしよく／かほいろ	×	
21	惻然	さぜん／ぎよつと	×	
22	私語	しご／さゝやく	×	
23	寒氣	かんき／さむさ	○	龍女後・金華二十九 5回
24	幸福	かうふく／しあはせ	×	
25	失敗	しつぱい／しくじり	×	
26	知己	ちき／しるべ	×	
27	容姿	ようし／すがた	×	
28	納涼	なふりやう／すゞみ	×	
29	戸外	こぐわい／そと	×	

30	佇立	ちよりつ／たゝずみ	×	金華一四 1回（「中央 ^{ちゆう} わう」の形で漢字書き）
31	假令	けりやう／たとひ	×	
32	掌中	しやうちゆう／たなそこ	×	
33	猶豫	いうよ／ためらふ	×	
34	容易	よい／たやすく	○ 龍女前 1回	
35	縁因	えんいん／ちなみ	×	
36	乳児	にうじ／ちのみ	×	
37	一寸	いつすん／ちよつと	○ 金華十六 2回	
38	戸外（出）	こぐわい／とほで	×	
39	埋葬	まいさう／とりおき	×	
40	中央	ちゆうあう／なかば	○ 金華一四 1回（「中央 ^{ちゆう} わう」の形で漢字書き）	
41	怠惰	たいだ／なまける	×	
42	営業	えいげふ／なりわひ	×	
43	旅舎	りよしや／はたごや	×	
44	跣足	せんそく／はだし	×	
45	同胞	どうはう／はらから	×	
46	再度	さいど／ふたたび	×	
47	兩人	りやうにん／ふたり	○ 金華十六・十九・二十・二十一・二十二・二十三・三十一	
21回				
48	故郷	こきやう／ふるさと	×	
49	真情	しんじやう／まこと	×	
50	仮眠	かみん／まどろむ	×	
51	妊娠	にんしん／みごもり	×	
52	誤認	ごにん／みちがへ	×	
53	看護	かんご／みとり	×	
54	容兒	ようばう／みなり	×	
55	親族	しんぞく／みより	○ 龍女前 1回	
56	看客	かんかく／みるひと	×	
57	由縁	ゆえん／ゆかり	×	
58	蘇生	そせい／よみがへり	○ 龍女後 4回	

59	悪漢	あつかん／わるもの	×
60	少女	せうぢよ／をとめ	×

たとえば「容姿ようし／すがた」は、仮名主体の草双紙のなかで「すがた」と仮名書きで複数回使われているのに対し「ようし」は一度も使われていない。「蘇生／よみがへ(り)」は「そせい」という仮名書きされた形で『御産池龍女利益』後篇に四回使われている。「両人りやうにん／ふたり」は「両人^{りょうにん}」と割書きで読みが書かれているもの、「両人」「りやうにん」と漢字書き・仮名書きのみのもの、「りよう人」と混ぜ書きのものが見られた。「両にん」という形では使われていなかった。

しかし、そのほかの漢語漢字列の語は、仮名主体で書かれた草双紙にはほとんど使われていなかった。これは、漢語漢字列の漢語の層が、仮名書きで使われる漢語の層、また、明治式草双紙で漢語漢字列＋漢語振仮名で使われる漢語の層とは、違う層の漢語であるためと、考えることができると思われる。

漢語漢字列と、和語振仮名の語と語の結びつきは、先に『言海』を用いて確認した。つまり、漢語の層の中でも、このような形で和語との結びつく漢語漢字列は、それそのものが何らかの層をなしているのではないかと思われる。

漢語漢字列＋和語振仮名のかたちは、『言海』でいうならば、見出し項目が漢語で、その語釈が和語であるというような、ある漢語を説明するために和語が使われる場合、あるいは、見出し項目が和語で、その通用字として漢語(漢字列)があげられているといった場合の、漢語と和語の関係性に近い。実際に、第三章第三節において、『言海』を漢語漢字列の語と和語振仮名の語の双方からひいたときに、語釈に和語振仮名の語がみられるものや、語釈末の漢の通用字と通っているものがあつた。このように漢語と和語が結びつくのは語義のちかさを契機としていることがわかる。

和語と結びつきが強い漢語は、和語を通して漢語の意味を理解していることになり、仮名書きの単独で使われる漢語よりも、理解しにくい漢語、難易度でいうならば、難しい漢語であるとみることができる。山田俊雄(一九七七)においても、「漢字離れをして、口頭言語の中でも普通になってゆくものがあつて、それらはいわば漢語の層の下の方に次第に累積し沈澱してゆく」と表現されていることから、仮名書き単独でも理解される漢語は、層の下の方においていく、つまり難易度の低い漢語のほうだが、層の下方を形勢し、定着することになる。すると、和語と結びついている漢語漢字列の漢語は、草双紙に仮名書きで

使われる漢語よりは、上層に位置づけられることになる。

今野真二『百年前の日本語』（二〇一二年）に、「和語「サイワイ」に漢語「コウフク（幸福）」を書く時に使う漢字をあてることができるのは、和語「サイワイ」と漢語「コウフク」との語義の重なり合いを背景にしているからであり、表記原理としては、表意的表記をしていることになる。したがって、漢語「フダン」に漢字「平生」をあてるとは、同じ表記原理であることになる。そしてまた、漢語「フダン」が出自からいえば漢語ではあっても、そうと意識されずに使われているとみえる点からすれば、この語自体が和語に近づいているということをも同時に予想させる。」（七十三頁）と述べられている箇所がある。

「和語「サイワイ」に漢語「コウフク（幸福）」を書く時に使う漢字をあてるとは、「幸福」という形になっているということを示している。「漢語「フダン」に漢字「平生」をあてること」は、「平生^{ふだん}」というように、漢語漢字列に、別語である漢語を振仮名として書いている形を示している。この形は山田俊雄（一九七七）で「その漢語の本来の有した文字連結（文字列）から遊離しても存在し、使用せられた」形（二三八頁）にも相当するのではないかと思われる。

「漢語ではあっても、そうと意識されずに使われている」漢語が、「和語に近づいている」ということを同時に予想させる」という箇所は、山田俊雄（一九七七）の、「漢語の漢字離れは、漢語を漢語らしく見せる姿を変えることである。ことに、一字の漢語は音節としては一音節もしくは二音節であるから、姿を仮名にやつしてしまうと、それは漢語としての性格をかなりあいまいにすることになる。そこには、漢語の日本化、漢語の性質転換がおこる。しかし一方では、それを抑制する傾向が、語表記の方法とは別に生じていたろうとは思われる。」と述べられている部分の、「漢語の日本化、漢語の性質転換」と同じ方向性の考え方であるように思われるが、「漢字離れ」をし、通常漢字で書かれる漢語の本来の姿ではないという「漢語の性質転換」がされたとしても、漢語は漢語であることに変わりはないと思われ、それは、和語に近づき、和語と同じように使われることをめざしているのではないと考える。先に、漢語は層を想定できるが、和語は同じような方法をもって層別化することは難しいのではないかと述べた。それは、和語に層が想定しにくいからであり、そのような体系の違いからみても、漢語と和語は性質のまったく違うものであると思われる。

また、「和語「サイワイ」に漢語「コウフク（幸福）」を書く時に使う漢字をあてることができるのは、和語「サイワイ」と漢語「コウフク」との語義の重なり合いを背景にして

いるからであ」と述べられているが、稿者はこの場合、和語「さいわい」と漢語漢字列「幸福」が結びついていると考える。前者は「サイワイ」と「コウフク」という語と語の結びつきを契機として「幸福^{さいわい}」というかたちが実現していると述べられているものであると思われ、語彙的事象となるが、後者は「さいわい」という和語と「幸福」という漢語漢字列が結びついている、表記的事象でもあると考える。それは、このような形の結びつきは、漢字で書くことを前提とした場合にしか起こらないと思われ、仮名で書かれた漢語に振仮名を振ることがないので、漢字列がなければ結びつかないことになるからである。

小島憲之『漢語逍遙』（一九九八年 岩波書店）に、「俗語「経紀」は、唐代前後の雑説類にみる如く、生計を営むこと、営む人の意から派生して種々の意をもつようになるが、基本線をそれではない。しかも中国古代語の「経紀」が前述の如く、糸を織り成してすべ理めること、常のすじ道などの意をもつ以上、多少の移りを経て、生計をよく営むことにもつらなる。時を異にして意味が派生するにしても、古代語の「経紀」という漢語の土台は必ずしも崩れてはいない。総じて漢語というものはこのような性格をもつものであるうか。」と述べられている箇所がある。ここでいわれている「漢語の土台」というものが、漢語漢字列がもつ表意のつよさのようなものであると思われる。漢字列に（漢）語の資格を与えられないような場合でも、表意による意義の近さを認めうるのならば、「漢語の土台」をもって、和語を書くことはできないかと思われる。

一方で、語義のちかさ以外にも、漢語と和語はさまざまな面における結びつきが日本語の中でひろく形成されていると予想される。漢字列＋振仮名という形は、原理的にはどのような漢字列と振仮名の組み合わせでも結びつき得るものであるが、ここでとりあげているような漢語漢字列＋和語振仮名というかたちで、実際に文献上に実現する和語と漢語の組み合わせは、そのようにひろく形成されている和語と漢語の結びつきよりも、実際に使われる形は、かなり限定的であるのではないかと予想される面もある。そして、そのことも、漢語語彙が層をもっているというみかたと関わるのではないかと思われる。

第五章 結論

以上、幕末明治期に刊行された草双紙を中心資料として、草双紙を、幕末明治期の日本語を観察するための資料として活用するという観点から検証をこころみた。本論文の題目は「語彙・表記」であるので、草双紙の語彙的事象と表記的事象について主にとりあげ、

考察をした。草双紙は幕末から明治期にかけて、その当時の出来事や流行を題材にした、さまざまな内容の作品があり、現在でも大量に残存している。さらに、草双紙の形態の変化により、一冊当たりの文字量が増え、文字資料として十分に研究対象になり得るものである。草双紙とは、赤本・黒本・青本・黄表紙・合巻という、体裁によって呼び分けられている資料の「総称」であるということにも留意しておきたい。さらに、その版面について、「江戸式」「明治式」「東京式」という区別がされているということについても確認した。

草双紙は、日本語の資料として扱う他、読み物として楽しむためにも翻刻が必要であり、文学面の研究分野では、翻刻資料とともに文学研究書の刊行もみられる。本稿では、主に漢語語彙について扱ったが、ほとんど仮名ばかりで埋め尽くされた草双紙の版面に、どのくらい漢語が使われているのかということは、原本を一見しただけでは、判然としないことであり、これまでに漢語の資料としては取り扱われることがほとんどなかった。今回の検証において、草双紙にも相当数漢語が使われていることがわかり、今後漢語を使用した資料としての活用も期待できるものと思われる。

草双紙の先行研究は、文学面、日本語学面の両方に見られるが、それぞれ緒についたばかりであるといつてよく、とくに明治式草双紙の語学面の研究については、先行研究となるものがほとんどないといえる。また、これまで草双紙の研究は、作品・作者ごとの取り扱いであることが多かった。本稿で扱ったように、「草双紙の語彙」としてまとまった言語単位での考察も、十分に行なうことができるものであると思われる、さらに広範囲にわたる研究の余地があるものであると考ええる。

江戸式の草双紙は、仮名主体で書かれていることがその特徴であるため、仮名遣い、仮名文字遣いについての先行研究が多く、語彙の調査はほとんどされていなかったということもあり、今回、仮名書きの漢語語彙という、資料の新たな面をみることでできたのではないかと思われる。資料としてとりあげた『御産池龍女利益』『金華七変化』『西南雲晴朝東風』は、文政から明治期にかけて、それぞれ刊行された時代がずれている作品であるが、作品に共通して使われている漢語語彙を示すことで、草双紙の通時的な面もみられたことになる。草双紙がなぜ仮名で書かれているのかということに、はっきりとした理由を見出せず、仮名で書くことで、それが婦女童幼向けであるということとつながるという面も、語彙の調査からは見出せなかった。草双紙が仮名主体で書かれているのは、赤本の頃からの流れであるからということが理由の一つと考えられ、その仮名で書くという表記体は、作者が作品を書くときの使用語彙にまでは影響しなかったと思われる。

明治式の草双紙は、漢字仮名交じり文で書かれていることで、とくにその漢字に振られている振仮名が注意をひいた。仮名主体の草双紙には漢字で書かれている語があっても、振仮名というかたちではなく、割書きでその読みが記されていた。『高橋阿傳夜叉譚』と『嶋田一郎梅雨日記』をとりあげたが、『高橋阿傳夜叉譚』のほうが、漢字に振られている振仮名の割合が多いようである。(一部の調査ではあるが、『嶋田一郎梅雨日記』の振仮名が漢字の一・二倍であるのに対し、『高橋阿傳夜叉譚』は一・八倍であった。)

漢字仮名交じり文で書かれた草双紙の漢語は、仮名主体の草双紙の漢語と比較すると、その約半数に重なり合いがあった。漢字が多く使われている明治式草双紙のほうが、漢語が漢字で書かれるために、より多くの漢語を使用し得るということ、また仮名主体の漢語より難易度の高い漢語が使われるのではないかという予想があったが、使われている漢語とその頻度には、ほとんど差はないようであった。ここからも、草双紙を仮名で書くという表記体が、語彙にほとんど影響しないということが覗える。つまり、漢字仮名交じり文に振られている振仮名を、そのまま仮名の本文と見立てれば、漢字仮名交じり文で書かれた草双紙は、仮名主体の草双紙とほとんど変わらない体裁になるということになる。仮名主体の草双紙に読みが付されていない漢字が、漢字仮名交じり文の草双紙のときには振仮名が振られない漢字であることも通う。

また、漢語を採集するのに際し、漢語漢字列＋和語振仮名の形で書かれた場合の語は、「漢語」の範囲に入らず、採集されないが、漢字列が漢語であることに注目し、振仮名の和語との関係を検証した。漢語漢字列は、和語を書き表す際に、和語を書き表すために選ばれた漢字列であるため、その漢字列が振仮名を伴わなかった場合に、漢語であると認められ得る漢字列であっても、それは語としては和語であるということになる。「突然」は「トツゼン」という漢語であると認められ得るが、「いきなり」という振仮名がある場合は和語であることになる。この漢字列の漢語と、振仮名の和語は、明治期に刊行された国語辞書である『言海』を用いて行なった検証において、ほとんどの語について、それぞれの関係性が認められた。漢語漢字列と和語振仮名は、語と語の結びつきをもってその形を示しているのであるが、第四章ではこの語と語の関係性について、漢語の層からの見方も取り入れると、語と漢字列が直接結びつく、表記面のつながりでもあるのではないかと考えられる。

漢語語彙を扱うに際して、漢語研究で謂われることのある「漢語の層」という考え方について取り入れた。漢語が、さまざまな層を内包しながら重なり合っているというイメー

ジを持つことができるのは、中国語が漢語として日本語の語彙に取り入れられる際に、いくつかの段階を重ねたからであり、山田忠雄（一九八二）がいうような、「何程か他の語とは異なる雰囲気」や「改まった意識」を感じさせるような性質をもっているからであると考ええる。おそらくはそれを難易度と表しても良いのではないかと思われる。

漢語の層別化にはいくつかの方法があり、その先行研究を示した。それぞれ層別化する切り口は異なるものであるが、あるひとつの漢語語彙を、ある条件をもって二分するということとは共通している方法であると考ええる。それがより排他的な条件であれば、はっきりと層を分かつことになるが、それぞれの条件において「どちらにも含まれる」ものがあることが予想され、それが自然なたちであるといえる。

草双紙の漢語語彙を基準として、辞書体資料との比較を行ったが、明治期に刊行された国語辞書、節用集それぞれに重なり合いを見出せたのは、これも草双紙の漢語語彙の通時的な面であるといえる。草双紙の漢語語彙を基準とすることで、国語辞書『言海』と『いろは辞典』の語彙の違いも見えてくる。節用集は、収録語数が多く幅広いために、節用集そのものの語彙の取り扱い方も難しいと思われる、タイプの違う節用集との比較も情報として必要であるかと思われるが、あらゆる語を集めたような厚冊の節用集と対照したとして、草双紙の漢語語彙がすべてそこに収まったとしても、それは漢語の層を見出したということにはならないと思われる。ある程度固定した条件のもとで抽出された漢語語彙であることが、漢語の層別化をするための比較資料として条件の良いものであるといえる。

今回扱った漢語語彙を層別化すると、次のように仮定できる。

【下層】

- a. 草双紙に仮名書きで使われる漢語、辞書の語釈に使われる漢語
- a↖b. 漢語漢字列＋漢語振仮名（同語）で書かれる漢語
- b↖c. 漢語漢字列＋和語振仮名で書かれる場合の漢語漢字列の漢語
- c↖d. 漢語辞書の見出し項目になっているような「狭義の漢語」

【上層】

a は、仮名主体で書かれている江戸式草双紙だけでなく、明治式草双紙の中にも見られる。扱った資料の中にあまり例が見られなかったために本稿ではとりあげなかったが、『梅雨日記』には、「ふぜい」「ふしぎ」「ふしん」「やうす」など、漢語が仮名で書かれること

もある。漢字を使って書くことができる表記体の中でも仮名書きされる漢語は、仮名主体の草双紙の中でも使用頻度の高い語であることがわかる。

b は、主に明治式草双紙に使われている漢語で、仮名主体の草双紙で仮名書きされる漢語とほぼ同じ語群であろうと想定したが、漢字が見えるのと見えないのでは、その漢語がもつ「土台」、表意的な力によって、仮名だけで使われる場合とは違う面が、多少はあるのではないかということも、可能性として考慮にいれておくべきであると思われる。

c は、本稿中で検証した通り、仮名主体の草双紙の漢語語彙には現れない漢語であったことから、このような位置づけとした。漢語語彙は日本語の語彙体系内に、何らかの形で馴染めば、層の下層へ「沈没」してゆくので、上層にある漢語も、日本語の中での使われ方によって、層を上下することはあるといえる。その漢語が、日本語の語彙体系内に馴染み、性質をいくらか変えたとしても、漢語は漢語のまままで定着していくものであると思われる。

「a」b」「b」c」と範囲を重ねるように設定したのは、分類したそれぞれの層について、「どちらにも含まれる」ものがあることを考慮したためであり、また、そのように重なり合いがあると考えるのが「漢語の層」の自然なカタチであるだろうと思われるからである。以上の比較・検証により、草双紙に使われる漢語語彙は、漢語の層のある一定範囲内にある語群であると想定できる。表記体を変えてもほぼ同じ層の語群であるとみることができ、そしてそれは、山田俊雄（一九七七）がいう「もつとも基層をなしてゐた漢語」が属する「平易な層」にちかいといえ、草双紙の漢語語彙を、日本語の漢語語彙の基層として位置づけ、これをひとつの尺度とした語彙研究が可能なのではないかと考える。

おわりに

本稿では、草双紙の語彙・表記と題して草双紙の資料性について考察をしてきたが、草双紙の語彙としては漢語について述べるのにとどまった。仮名主体で書かれた草双紙に使われる「漢字離れ」した漢語に注目したからであり、同時に、草双紙が、仮名主体で書かれている資料と、漢字仮名交じり文で書かれている資料とを対照できる、条件の良い資料であるということが、漢字列と振仮名についても考察を広げることにつながったと言える。

草双紙の語彙をさらに考察するにあたっては、語彙調査として、草双紙本文の和語についても検証することが必要であると思われる。本稿の第三章第三節において扱った、漢語

漢字列と和語振仮名の関係について、草双紙に使われる和語についても調査が及べば、さらにはつきりと、草双紙の語彙を捉えることにつながるのではないかと考える。

試みに、第三章第三節で扱った漢語漢字列に振られていた振仮名の和語について、安政五年から明治三年の間に刊行された仮名主体で書かれた草双紙である、『うすおもかげまろしにつき薄佛幻日記』（為永春水作、梅蝶楼国貞画）初編（第五編と対照した結果を挙げておく。【本文】は『薄佛幻日記』にその和語が使われている箇所を抜き出した一部分を示す。

【漢字列】【振仮名】

【本文】

1	接遇	あつかひ	あつかひぶりのなにとやらしゆじんのとき
2	貴君	あなた	あなたがどのやうにひとりやきもききをもんでも
3	周章	あはて	あはてふためきからいろがかなのこじりを引とゞめ
4	愍然	あはれ	よそのあはれも身につまされて
5	大畧	あらまし	うばゝせんといふ手だてはあらましたいしたれど
6	主人	あるじ	とうけのあるじ邦利くにとしなるにぞ
7	豫約	いひなづけ	それがしとおやのゆるせしいひなづけ
8	点頭	うなづき	とろ六ほく／＼うちうなづき
9	白粉	おしろい	おんかほのおしろい
10	侠客	おとこ	おとこの身にてはあしぶみならぬ
11	音信	おとづる	しのぶをとこのおとづれをまつ身に
12	戸外	おもて	おもてのかた上使のおいりトよはざるこゑに
13	首途	かどで	かどでをしゆくす小うたひに
14	私語	さゝやく	ちかくまねきてさゝやくやう
15	幸福	しあはせ	世にもまれなるむすめがしあはせ
16	知己	しるべ	ちとのしるべをこゝろあてに
17	容姿	すがた	ふりそですがたのおほわかしゆ
18	戸外	そと	にわぐちのもんよりそとへおしいだされ
19	佇立	たゝずみ	いとほいなげにたゝづみて

20	假令	たとひ	たとひのちをおとすとも
21	猶豫	ためらふ	それと見さだめかねためらひ／＼三人が
22	縁因	ちなみ	していのちなみもありてえきなし
23	一寸	ちよつと	ついちよつとぬすんだとさへいへば
24	中央	なかば	さア／＼おしまひ／＼トことばなかばに
25	再度	ふたたび	たちあがるを目九郎ふたゝび引とゞめ
26	両人	ふたり	ふたりがさしむきのよきをりなれば
27	真情	まこと	むねのきみつをうちあけてまことあらはす
28	由縁	ゆかり	いさゝかゆかりあるものなれば

第三章でとりあげた漢語漢字列＋和語振仮名の語は六十語であったが、『薄倂幻日記』と対照して検索できた語はそのうちの二十八語であった。『梅雨日記』と『薄倂幻日記』の作品一対一の対照であっても、半数は見出せたことになる。漢字仮名交じり文の草双紙に使われる和語は、仮名主体の草双紙の本文にも使われていることがわかる。右にあげたように、草双紙の漢語との結びつきから、その関係性を緒にして、和語を検証していくことはできるのではないかと思われる。草双紙の語彙として、どのように和語を扱えば良いか、草双紙の和語語彙からどのような知見が得られるかという検証の方法を含めて、今後の課題とする。

参考文献

- 『和漢／雅俗いろは辞典』（高橋五郎著 一八八九年）
『言海』（大槻文彦著 一八九一年）
『日本大辞書』（山田美妙著 一八九二年）
『日本古典文学大辞典』（一九八四年 岩波書店刊）
『日本国語大辞典』第二版（二〇〇〇年 小学館）
『日本語学研究事典』（二〇〇七年 明治書院）
『小説神髓』（坪内逍遙 松林堂 一八八六年）
『明治開化期文学集（二）』（明治文学全集二 筑摩書房刊 一九六七年）
『草双紙集』（新日本古典文学大系 一九九七年 岩波書店）
『江戸文学』第三十五号（二〇〇六年 ペリかん社）

- 浅野敏彦（二〇一一）『平安時代識字層の漢字・漢語の受容についての研究』和泉書院
池上禎造（一九八四）『漢語研究の構想』岩波書店
石田元季（一九二八）『草雙紙のいろいろ々々』（『草双紙研究』 南宋書院）
内田宗一（一九九八）「柳亭種彦自筆資料の仮名字体：草双紙稿本を中心に」（『語文』七十二）

- 小野正弘（二〇〇八）『幕末草双紙の言語研究用デジタルコンテンツ化と語学的研究』（科学研究費補助金基盤研究成果報告書 明治大学）
尾崎久弥（二〇〇一）『怪奇草双紙画帖』（国書刊行会）
木村八重子（二〇〇九）『草双紙の世界―江戸の出版文化』（ペリかん社）
久保田篤（一九九五）「草双紙の用字法―赤本の仮名字体の用法を中心に―」（『築島裕博士古稀記念国語学論集』汲古書院）
小島憲之（一九九八）『漢語逍遙』（岩波書店）

今野真二 (二〇〇一)『仮名表記論攷』(清文堂出版)

今野真二 (二〇〇八)『消された漱石―明治の日本語の探し方』(笠間書院)

今野真二 (二〇〇九)『文献日本語学』港の人

今野真二 (二〇一一)『二つのテキスト(下) 明治期の文献』(日本語学講座第五巻 清

文堂)

今野真二 (二〇一二)『百年前の日本語―書きことばが揺れた時代』(岩波新書 1385)

佐々木亨 (一九九五)『明治の合巻―所謂明治式合巻と東京式合巻なる名称をめぐる―』

『徳島文理大学文学論叢』十二号』

佐藤亨 (二〇〇七)『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』明治書院

佐藤至子 (二〇〇〇)『忠孝と真情―文化期草双紙の遊女像―』(『日本文学』十月)

佐藤至子 (二〇〇一)『江戸の絵入小説―合巻の世界―』(ぺりかん社)

鈴木俊幸 (一九九五)『草双紙論』(『中央大学文学部紀要』第一五七号)

鈴木俊幸 (二〇一〇)『絵草紙屋 江戸の浮世絵ショップ』(平凡社)

田島優 (二〇〇二)『振り仮名と漢字表記との関係の処理について』

〔日本語の文字・表記―研究会報告論集―〕(国立国語研究所)

中村健之介 (二〇〇四)『ニコライの見た幕末日本』

(一九七九年第一刷発行、第十八刷発行 講談社)

村山昌俊 (二〇〇三)『明治時代語論考』おうふう

矢野準 (一九九四)『一九黄表紙に於ける漢字(一)』(『香椎潟』三十九号 福岡女子大

学)

矢野準 (二〇〇一)『草双紙の行―京伝黄表紙三種を中心に―』

『筑紫語学論叢奥村三雄博士追悼記念論文集』 風間書房)

矢野準 (二〇〇二)『草双紙類の仮名遣い―石原知道浄書合巻類四種を資料として』

『国語と国文学』七十九)

山田忠雄 (一九八一)『近代国語辞書の歩み―その模倣と創意と―上』三省堂

山田俊雄 (一九七七)『漢語研究上の一問題―漢語層別化の試論―』

『松村明教授還暦記念国語学と国語史』明治書院

山田俊雄（一九七八）『日本語と辞書』中央公論社

「明治大学図書館蔵幕末草双紙デジタルコンテンツ」明治大学

http://www.lib.meiji.ac.jp/Project/bun/m_ono/kusazoshimain.htm

「近代デジタルライブラリー」国立国会図書館

<http://kindai.ndl.go.jp/>

「リプリント近代日本文学」国文学研究資料館

http://www.nijl.ac.jp/info/ondemandHP/reprint_home.html

草双紙（いずれも清泉女子大学図書館蔵本を使用）

『御産池龍女利益』前篇・後篇（文政十一年刊）

『薄倂幻日記』初編～五編、各上下巻（安政五年～明治元年）

『金華七変化』十三～十六、十九～二十三、二十八～三十一編（万延元年～明治三年刊）

『西南雲晴朝東風』上中下巻（明治十一年）

『嶋田一郎梅雨日記』初編～五編、各上下巻（明治十二年）

『高橋阿傳夜叉物語』初編～五編、各上下巻（明治十三年）

註

- 1 早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」
<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html>
- 2 Web ページより引用した。
http://www.nijl.ac.jp/info/ondemandHP/reprint_home.html
- 3 「明治大学図書館蔵幕末草双紙デジタルコンテンツ」
http://www.lib.meiji.ac.jp/Project/bun/m_ono/kusazoshimain.htm
- 4 いわゆる「地の文」について、草双紙『薄倂うすおもかげまぼろし日記』初編上五ウラでは、「ほんもん」と書いている。
- 5 「表記体」は『仮名表記論攷』（今野真二著 二〇〇一年 清文堂出版）「序章 仮名表記史記述の試み」註4（三十五頁）に、表記体という概念について浜田敦「表記論の諸問題」（『国語国文』第三〇巻第二号）に述べられていることが提示されている。ここでは『文献日本語学』（今野真二著 二〇〇九年 港の人刊）「第三章 第四節 草双紙」に述べられている「表記体」は、（日本語の書かれた）あるまとまりをもった文献Ⅱテキストを、漢字、仮名などを使ってどのように文字化しているか、というその「文字化のありかた」を指す概念とする。」という考え方に基づいて「表記体」という語を用いることとする。
- 6 「書入」は常に絵に即し、絵とともに示されるので、地の文と絵の内容がずれてしまっても絵のそばに書かれている。よってこの「書入」は、ほとんど絵の一部であると考えても良いと思われる。『御産池龍女利益』中では、地の文と、地の文とは離れた場所にあることばとが対応する箇所の下が離れてしまった場合でも、地の文に書かれている内容と合っているが、そのことばは、地の文自体にはないことばである。また、地の文に書かれている内容と、地の文に書かれていることを絵にしたはずである場面が合っていないということが草双紙にはしばしばみられる。草双紙の絵が、見開きを単位として描かれることが多いのに対し、本文はその見開きの絵が示す内容を語

るまでに時間差があることがある。同じ丁のうちで絵と本文が合わないときは、絵が先行する場合が多いように思われ、「この場面の絵解き」として、わざわざ絵が先に進んでいるという説明文を本文中に書きこんでいる場合もある。

7 巻末に「一、出典総覧」として、辞書の用例に使用された資料の一覧が掲載されている。これを見ると「合巻」として「裾模様沖津白浪（四世鶴屋南北作・一八二八年刊）」（大南北全集一七 一九二五年春陽堂刊）がとりあげられているが、草双紙類はこの一点のみとみられる。

8 つまり本稿で扱う漢語とは、山田忠雄（一九八一）の「漢語辞書」に盛られる漢語とは如何なる種類の言語を指すのであろうか（三三三頁）という話題の中で「単に字音語の謂であるとするならば、日常の会話に用いられる今日・本日は・昨日・去年・天道（主として「お天道さん」の形で用いられる）・引導・因縁・異口同音・一体（全体）・夫婦・兄弟・徒然・毎度・不断（借字は、普段）など総べて漢語ならざるはない」と例を挙げて述べられている、漢語の「最も広義に属するもの」にあたる。

9 仮名主体の草双紙には、漢字書きのあとにその読みが割り書きで書かれる場合があるが、『御産池龍女利益』ではその書き方がなされておらず、漢語ではないが「鯉」が一例のみであった。『金華七変化』の例では「上段」「登城」などのように書かれる。このように書かれるのは、たいていはじめの一例で、のちに同じ語が使われる場合は、漢字書きで読みなしか、仮名書きになっている。漢字はごく少数使われているが、「読みを振るほどではない漢字」を使って書いているという意識につながるか。

10 柱題には「島田初下」の字がみえる。今野真二『二つのテキスト（下）明治期の文獻』（日本語学講座第五巻 二〇一一年 清文堂刊）の中で『嶋田一郎梅雨日記』を扱った箇所の註によると、「初編でいえば、上冊の表紙見返しには「島田一郎」、挿絵には「嶋田一郎」とあり、さらに初編中冊の表紙には「嶋田一郎」とあつて、「シマ」にあてられる漢字は少なくとも三通りみられる。このことは「島・嶋・嶋」字が自然に通用していたことを示す」と述べられている。本稿では「嶋」字を使用した。

1 1 『言海』の凡例（卅八）には次のようにある。「凡例（卅八）篇中毎語ノ下ニ、直ニ標出セル漢字ハ、雅俗ヲ論ゼズ、普通用ノモノヲ出セリ、「日」「月」「山」「川」等ノ正字ハ、固ヨリ論ゼズ、「辻」「峠」「杜若」ノ如キ和字又ハ誤用字ニテモ、通俗ナルヲ挙ゲタリ、而シテ、和漢通用ナルハ、一曰「一」「月」「一」「山」「一」「川」「一」ナドト標シ、又、和用ナルハ、一「辻」「一」「杜若」「一」ナドト標シテ、語釋ノ末ニ、別ニ漢用字ヲ掲ゲテ、十字街、燕子花ナドト標セリ、此類、識別スベシ、但シ、漢字ノ當ツベカラザルモノハ、スベテ闕ケリ。」また、「索引指南」の「種種ノ標」では二重線を引いた標を「漢ノ通用字、十字街、燕子花ナド。（注ノ中ニ置ク）」としている。「漢の通用字」とはここで「漢用字」「漢ノ通用字」とよばれている漢字列をさす。どのような漢字列が「漢ノ通用字」として配されているのかということは未だ不明であるが、「漢ノ通用字」は、おそらく多くは漢語であり、「語釋ノ末ニ」配されている。また、「索引指南」では「注ノ中ニ置ク」とあり、「漢ノ通用字」は語釈の一部であるとみることができ

1 2 「辞書体資料」とは今野真二『消された漱石―明治の日本語の探し方』（二〇〇八年笠間書院）「第一章 消された漱石」（六十五頁）において「ある文献から情報を抜き出して「編集」といった「操作」が行われている」、「何らかのかたちで情報の取捨選択が行われている文献」を「辞書体資料」と呼んでいることに基づく。また、「ごく一般的にみて辞書とみなされるような形態の文献」も「辞書体資料」ということになる。「文」や「文脈」から切り離されているということもできようか」とも述べられているものであり、語が文脈を伴うか伴わないかということには違いがあり、辞書体資料と非辞書体資料の比較対照は有効であると考ええる。「漢語の層」という見方からしても、辞書体資料である国語辞典に掲載される漢語は、編集によって集められた語であり、文脈上に（自由に）現れる場合とは、語彙としての内実の違いがあるのではないかと考えられる。

1 3 山田忠雄（一九八一）の一覧表における提示の方法を踏襲する。山田忠雄の一覧表では、同じ漢語が使われる語釈である見出しの漢語が複数挙げられているが、ここではそのうちの一語のみを示す。たとえば「サウダン」は山田忠雄の一覧表には見出し項目の語として「下問・会議・与謀」の三語が挙げられており、『漢語字類』を

見ると「下問」は「メシタナモノニサウダンスル」、「会議」は「ヨリアフテサウダンスル」、「与謀」は「サウダンニノル」と、それぞれ語釈に「サウダン」が使われている。